

怪星ガン

海野十三

青空文庫

臨時放送だ！

「テレ・ラジオの臨時ニュース放送ですよ、おじさん」

矢木三根夫は、伯父の書斎の扉をたたいて、伯父の注意をうながした。

いましがた三根夫少年は、ひとりで事務室にいた。そしてニュースの切りぬきを整理していたのだ。すると、とつぜんあの急調子の予告音楽を耳にしたのだ。

（あッ、臨時放送がはじまる。何ごとだろうか）と、三根夫は椅

子からとびあがって、テレ・ラジオのほうを見た。その予告音楽は、そこから流れでていたし、またその上の映写幕には目にうったえて臨時放送のやがてはじまるのを、赤と藍あゐとのだんだら渦巻でもって知らせていた。

テレ・ラジオというのは、ラジオ受信機とテレビジョン受影じゅえい機きがいつしよになっている器械のことだ。みなさんはすでに知っておられることと思うが。……

（臨時放送は、まもなくはじまる。そうだ、すぐおじさんに知らせておかなくては。……あとで「なぜそんな重大なことをおしえなかったのか」などといって目をむくおじさんだから、知らせておいたほうがいい）

三根夫は、事務室をとびだすと、廊下を全速力で走って、いまものべたように、伯父の書斎までかけつけると、扉をどんとたたいたのである。

なかから、大人の声が聞こえた。

「臨時ニュースの放送か。よしわかった。……鍵はかかっていないよ。こつちへはいつてミネ君も聞くがいい」

伯父は三根夫のことを、いつもミネ君と呼んでいる。探偵を仕事としている伯父のことだから、なかなか気むずかしいこともあるが、ほんとはやさしい伯父なのである。

三根夫は扉をあけて、書斎にはいった。

伯父の帆村莊六は、ほむらそうろく寝衣ねまきのうえにガウンをひっかけたままで、

暗号解読器をしきりにまわして目を光らせていた。このようすから察すると、伯父は夜中にとび起きて、なにかの暗号をときにかかったまま、朝をむかえたものらしい。

伯父の頭髮はくしゃくしゃで、長い毛がひたいにぶらさがって目をふさぎそうだ。卵形をしたりっぱな伯父の顔は、たいへん色が悪く目ははれぼったい。三根夫は伯父に同情し、そしてまた仕事に熱心すぎる伯父の健康についてしんぱいになった。三根夫がはいっていても、伯父はちらりと、ひと目だけ甥おいを見ただけで、あとはふりむいても見ず、声をかけようともせず、ますますいそがしそうに暗号解読器をまわしつづけているのだった。

そのとき、臨時放送がはじまった。

アナウンサー田村君の声が、いつになくきんきんとするどく響く。――

「お待ちせしました。臨時ニュースを申しあげます――」
すみの三角棚だなのうえにおいてあるテレ・ラジオがしゃべりだす。その器械のまん中にはまっついている映写幕には、アナウンサー田村君のきんちようした顔がうつつている。

「――地球連合通信。九時五分発表。

サミュエル博士以下六十名の搭乗しております宇宙艇『宇宙の女王』^{イン}号が遭難したもようであります。

その遭難地点は、地球より約四千万キロメートルのところと思われます。

『宇宙の女王』号が金星探検のために宇宙旅行をつづけていたことは、みなさんよくごぞんじの通りであります。

地球時間の本日七時五十五分に『宇宙の女王』号は謎の文句をのせた無電を放送いたしました。その文句は、

『……航行不能におちいった、どこの故障なるや解くことをえず。

艇および艇内気温異様に急上昇す、室温摂氏三十五度なり。乗員裸となる。二等運転士佐伯さえき、怪星を前方に発見す、太陽系遊星にあらず、彗星にあらず、軌道法則にしたがわずふしんなり。ただいま突然、怪星怪光をあげて輝き、にわかになれに接近す。われいまや怪星ガン』

電文はここで切れております。

それいらい『宇宙の女王』号よりの無電連絡はとだえておりまして、すでに一時間余を経過しており、同号の安否はすこぶる憂^{うりよ}慮されております。

同号は、非常のときに五種の救難信号を発するように設備せられていますが、いままでにその一つもつかまらないのであります。それから推察して、『宇宙の女王』号は、まえに読みました謎の無電の停止した直後に、おそるべき破壊または爆発をとげたものではないかと思われます。

なお、遭難地点にちかき空間を航行ちゆうの宇宙艇にたいし、救難のためその地点へ急行するよういらいをしましたが、調査によれば約三隻あり、そのもつとも近きものは、現場より千三百万

キロメートルをへだてた空間にある宇宙採取艇さいしゆていギンネコ号であります。

以上がただいまお知らせすることの全部であります。十時の定時ニュースのときに、つか放送することがあるはずでございます。

サミュエル博士の『宇宙の女王』号遭難説に関する臨時ニュース放送をおわります」

国際電話で

臨時ニュースを聞きおわつて、三根夫は、すがりつくように伯父のほうへ目を向けた。

すると帆村は、いつのまにか暗号器からはなれていて、小さな腰掛のうえに腰をおろして足を組み、膝のうえにメモをひらいて、鉛筆をにぎっていた。三根夫が見たとき、帆村はメモのうえに書きつけた速記文字を熱心に見入っていた。

「おじさん。たいへんなことがおきたものですね」

すると帆村は無言のままメモを持って立ちあがり、しずかに事務机のうえにおいた。このとき帆村の唇が、ぎゅつとへの字にまがった。それはこの名探偵が、何かある重大なる手がかりをつか

んだときにするくせだった。

「おじさん。どうしたんですか」

三根夫は、伯父からしかられるだろうと思いつつ、そういつて聞かすにはいられなかつた。

「うん。これはまさに重大事件だ。わら小屋のいちぐう隅に、マッチの火がうつされて、めらめら燃えあがつたようなものだ。見ていてごらん。いまに世界じゆうをあげてさわぎだすようになるだろう」

「いまではもう世界的事件になつてゐるではありませんか。臨時ニュースで放送されるくらいですもの」

「いや、それでもいまは、まだマッチの火がわらたば束たばにうつつたく

らいだ。やがで世界じゅうの人々が火だるまになってわら小屋からとびだしてくるだろう。——おや、おや、僕はとんでもない予言をしてしまったね。予言することは、このおじさんはほんとは大きらいなんだが……」

そのとおりであった。伯父は、事件の捜査にあたって、いろいろな証言や証拠品がそろって、もうだれにも「かれが犯人だ」といえるようになって、伯父はけっしてそれを、ひとにいわないのだった。また次の日、犯人がある場所へあらわれることを知っていた。それでも、それをけっしていわない人だった。そういうときは、伯父はその日になってその場所へいつて待っている。そして犯人がほんとに姿をあらわしたときに、伯父ははじめて「そうだ。そ

うこなくてはならなかったのだ」と一言つぶやくのがれいだった。

だから伯父帆村莊六が、いままでになく『宇宙の女王クイーン』号の遭難事件が、やがて全世界の人々をすつかりおびやかすほどの大事件にまで発展することを予言したのは、伯父がこの事件について、よほどおどろいたせいなのであろう。

いや、さもなければ、伯父はなにかこういう事件の発生を待ちかまえていたところだったので、臨時ニュースを聞いているうちに、それだと知ってきゆうにおどろいたのかも知れない。伯父がメモに取った速記は、いまの臨時ニュースの全文のうつしなのであろう——と、三根夫は思った。

「世界じゅうの人々がさわぎだす事件で、それはいったいどんな

ことが起こるんですか」

「さあ、それはしばらくようすを見まもっているしかないね」

このときはやくも伯父は、いつもの慎重な探偵の態度にもどつてしまった。

そのときであった。けたたましい呼出し音おんきょうとともに外から電話がかかってきた。

「お、きたようだ」

帆村は、かれにしか意味のわからないことをつぶやいて、電話機のほうへ足早にいった。

かれがスイッチを入れたのは、国際電話の器械のほうだった。

やはりテレビジョンがついていて、電話をかけてくる相手の顔が

映写幕にうつる方式の電話機だった。

映写幕のなかに、血色のいいアメリカ人の顔がうつった。顔の背景に、宇宙図が見えていた。

「やあ、ミスター・ホームラ。ぼくはきみを引つ張りだす役目を仰おおせつかったのだ。うちの社できみを雇って、出張してもらおうというんだがね、行先は宇宙のまつ只中だ。聞いたろう、さっきの臨時ニュース放送を……」

ぶつきら棒に、さつそく用件を切りだしたそのアメリカ人は、ニューヨーク・ガゼット新聞の社会部記者として名の高いカークハム氏だった。そして彼カークハム氏は、これまで二、三の事件を通じて帆村莊六と知合いなのであった。

「だしぬけにぼくを引つ張りだして、どういふ仕事をやれといふのかね、カークハム君」

そういう帆村の声は、いつもの落ちついたしずかな調子であった。

「明朝はやく、こつちから『宇宙の女王』号の救援艇が十隻^{せき}出発する。その一つにきみは乗るんだ。もう救援隊長テッド博士の了解をえてあるが、きみは『宇宙の女王』号の捜査にしたがうんだ。そして記事を全部わが社へ送つてくれるんだ。わが社は、それを新聞、ラジオ、テレビジョンを通じて特約報道としてアメリカはもちろん全世界にまき散らすんだ。——もちろんきみは引きうけてくれるね」

「その他に条件はあるのかね」

「ない。それよりはきみのほうの条件を聞かしてくれ」

「条件は別にないよ——おツと、ちよつと待ってくれ、カークハム君」

帆村は送話口そうわぐちでしゃべるのをちよつと中止して、横へ首をのばした。そこには三根夫がいて、しきりにじぶんの鼻を指さしていた。

「ゆきたいのか。……ふーん。しかしひどい目にあつて泣きだしても知らないよ。大丈夫か。きつとだね」

帆村は小声の早口で甥おいとはなしてから、ふたたび映写幕のなかのカークハム氏と向きあつた。

「条件はただ一つ。ぼくの甥の矢木三根夫という少年をぼくの助手として連れていくこと。いいだろうか」

「オーケー。では契約したよ」

カークハム氏はにっこり笑った。

「救援艇の出発一時間まえまでに、社へぼくをたずねてきてくれたまえ。それまでにこっちはいつさいの準備と手続きをしておく」

三根夫の買物

えらいことになった。

きゆうに話がきまつて、アメリカへ飛ぶことになった。——いや、アメリカどころか、何千万キロ先のひろびろとした宇宙のまただなかつ只中めがけて旅立つのだ。

帆村莊六は、三根夫に、あと三時間の自由行動をゆるした。そして本日十三時に東京発の成層圏航空株式会社の『真しんじゆひめ珠姫』号に乗りこんでニューヨークへたつこととなった。それに乗れば目的地へ五時間でつく。

三根夫は、すっかりうれしくなり、顔をまっ赤にほてらせたまま、往おうらい来へとびだした。この三時間に、かれは宇宙旅行の準備をととのえるつもりだった。必要だと思ふいろいろな品物を買ひ

そろえなくてはならない。

それから、いとまごいをしておきたい先生や友だちも四、五人あつたが、それを全部まわる時間はないかもしれない。テレビ電話をかけて、それでまにあわせることにするか。

いとまごいをするのは、それだけだ。三根夫には両親も兄弟もない。兄弟は、はじめからない。両親は、はやくに亡くな^なつた。だから、一番近いみよりといえば、帆村伯父だけであつた。

「さあ、なにを買つて、持つていこうかなあ」

三根夫は商店街を歩きまわつた。そしてぜひ必要だと思つたものを買ひ歩いた。

たとえばかれは十冊ぞろいの名作小説文庫を買つた。また愛曲

集と画集を買った。それから工学講義録二十四冊ぞろいも買った。これらは艇内にとじこめられて、たいくつな永い旅行をつづけるあいだに、たのしんだり、勉強をするためだった。

受信機や万年筆や手帳やランプやピンポン用具などは、買いかけたが、やめにした。こんなものは艇内にそなえつけてあるだろう。

薬品を買うひつようはないであろう。

服装に関するものもないだろう。靴なんかのはきものもいらないであろう。艇内には、そういうものを作ってくれる裁縫師さいほうしや靴屋さんがいるであろうから。

だんだん考えていくと、ぜひ買っていかねばならぬ品物があま

りないことに気がついた。

もう家へかえろうかなと思つた三根夫は、最後に、とうぶん銀座街ともお別れだと思ひ、そこを歩いた。

昔ながらの露店ろてんが、いろいろなこまかいものをならべて、にぎやかに店をひらいていた。それをいちいちのぞきこんでゆくうちに、三根夫は、ある店に、小さな娘の人形が、オルゴールのはいつた小箱のうえで、オルゴールの奏そう楽がくとともにおもしろくおどる玩具おもちゃを、一つ買った。かれはオルゴール音楽がたいへん好きだつたのである。

それからしばらくいった先の店で、かれは一ちようの丈夫なパチンコを買つた。さらにその先の店で、硝子ガラスのはまつた木箱のな

かで、じぶんの身体よりもずっと大きい車をくるくるまわしつづけるかわいい白しろねずみ鼠を買った。それは三つの車がついている一番いい白鼠の小屋に、白鼠を七ひきつけて買った。

オルゴール人形、パチンコ、車廻しの白鼠の小屋——なんだかあまりひつようなのうに見えないへんな買物であるが、とにかくときはずみで三根夫はそれを買ってしまったのである。いわば、よけいなフロクの買物であった。

しかしこのフロクの買物が、やがて三根夫にとって、思いがけないたいへんな役目をつとめてくれることになるうとは、さすがに気がつかなかった。

三根夫がかえってみると、伯父の帆村はやっぱり寝衣ねまきのうえに

ガウンをひっかけてたまま、暗号器を廻しつづけていた。別になんの出発準備をすすめているようすもない。

が、帆村は、三根夫がその部屋へはいつていったとき、「やれやれ、間にあつたぞ」

ひとり言をいって、暗号器から一枚の紙をぬきだしてほつと一息つくと、その紙片しへんを八つに折りたたんで、革製の名刺入れのなかにつつこんだ。

「さあ、でかけよう」

伯父は寝衣をぬいで、外出用の服に着かえた。たった一分しか、かからない。それから机の上の雑品をあつめてポケットへつつこんだ。それから戸棚とだなから一個のトランクをだして、手にさげた。

「ミネ君。でかけるが、きみの準備はいいかい」

「待ってください、伯父さん。ぼくはこれから荷造りにつくをするので
す」

「おやおや、そうかい。……でもまだ三十分時間があるね」

救援艇の出発

ニューヨークのエフ十四号飛行場から、十台の救援ロケット艇
がとびだしたときの壮烈なる光景は、これを見送った人びとはも

ちろん、全世界の人びとにふかい感動をあたえた。

帆村莊六と、甥の三根夫少年は、テッド隊長の乗っている一号艇に乗組んだ。

各艇とも、乗員は三十名であつた。

遭難をつたえられるサミュエル博士搭乗の『宇宙の女王^{クイーン}』号にくらべると、搭乗人員ははんぶんであるが、そのかわりこの救援ロケット艇は、最新型の原子エンジンを使っているのです、ひじょうなスピードをだすし、またその航続距離にいたっては十億キロメートルを越すだろうとさえいわれる。

うつくしい流線形をした巨体。後部には、軸^{じく}に平行に十六本の噴気管がうしろへ向かって開いている。

頭部の一番先のところが半球形の透明壁とうめいへきになっていて、その中に操縦室がある。その広さは十畳敷ぐらいあるというから、このロケット艇はかなりの巨体であることがわからう。

出発のときは、胴体から引込み式の三脚きやくをくりだして、これによつて滑走かつそうした。そのとき、やはり胴体から水平翼すいへいよくと舵器だきが引き出されて、ふつうの飛行機とどうように地上を滑走した。

もちろんプロペラはないから、尾部びぶからはきだす噴気ふんきの反動によつて前進滑走した。そしてある十分なスピードにたつたとき、艇は空中に浮かび上がり、それから、足と翼と舵器とをそろそろ胴体のなかにしまいこむ。

一等むずかしい仕事は、スピードをだんだんあげていくその調

子であった。スピードをそろそろあげていたのでは、目的地へたつするのにたいへん年月がかかって、搭乗員とうじょういんはみんな老人となり、ついにはみんな死んでしまわなくてはならない。

そうかといって、あまりスピードをあげる割合を——このことを『加速度のあげ方』ともいう——その割合をきゆうにする、搭乗員の内臓によくないことが起こる。ことに脳がおしつけられてしまつて、気が遠くなつたり、仮死かしの状態となり、はげしいときにはそのままほんとうに死んでしまう。そういうことがあるから、あまり加速度をきゆうにあげることでもできないのであつた。

つまり、その中間の、ほどよい、そして能率のよいスピードの

あげ方というものがある。それをまちがいなく正しく調整していくことが操縦員にとつてまず第一番のたいせつな仕事であった。

「ああ、なんとという壮烈なことだ。どうかこの十台の救援艇が、無事にもどつてきてくれますように」

そういつて、ひそかに神に祈りをあげる老紳士もいた。

「うまくいくだろうか。三十名十台だから、総員三百名だ。このうち何人が生きて帰つてくるだろうか」

心配する飛行家もいた。

「ああ、勇ましいいさい。あたしはなぜいつしよにゆけなかつたんでしよう。エイリーンさん、アネットさん、ペテーさんはいつてしまった。あたし、うらやましい」

ハンカチーフをふりながら、残念がるお嬢さんもいた。婦人の搭乗者もあると見える。

「どうかなあ。この救援は成功しまいとおもうよ。第一、宇宙はあまりに広いんだ。……それにね、去年の春あたりからこつちへ、ひんぴんとして行方不明の宇宙艇があるじゃないか。わしののらんだところによると、宇宙のどこかに、きようあく兇悪な宇宙の猛獣とでもいうべき奴がひそんでいて、みんなそれに喰われてしまうんだとおもうよ」

禿げ頭のスミス老人が杖をふりまわしながら、花束を持った四、五人の老婦人を相手にしゃべっている。

「まあ、宇宙の猛獣ですって。またスミスさんのホラ話をはじめ

つたよ」

「なにがホラ話なもんか。わしはきのう、その宇宙の猛獣をつかう恐ろしい顔をした猛獣使いを見つけたんだ。わしは相手に知らないように、こつそりと、その恐ろしい奴のあとをつけていったが——ややツ」

スミス老人は、きゆうに話を切つて、おどろきの声をあげた。そのときそばを、顔を緑色のスカーフでぐるぐる巻きにした目のすごい怪しい男が、松葉杖にすがりながら、通りすぎた。

自称 金鉱主
じしやうきんこうぬし

スミス老人は、おしやべりを忘れてしまったかのように、口をつぐんだ。そして肩をすぼめてあごひげを小さくふるわせている。老人の顔色は血の^ち気をうしなっている。

そのまわりにいた老婦人たちも、スミス老人のただならぬようにすに気がついた。そしてスミス老人がぶるぶるふるえだしたわけを、それとさっして、これまた顔色が紙のように白くなり、ひざのあたりががくがくとふるえだして、とめようとしても、とまらなかつた。花束までが、こまかくふるえていた。

ずいぶん永い時間、みんなは息をとめていたような気がした。

しかしじっさいは、たった二分間ほどだった。その間に、れいの緑色のスカーフで顔をつつんだ松葉杖の男は、人ごみの中にかくれてしまった。

「スミスのおじいさん、いまここを通っていったのが、そうなんですかね」

ケート夫人が、さいしよに口をきつた。くだもの店をもっているしつかり者と評判の夫人だった。

「しいッ。あまり大きな声をださんで……」

とスミス老人は大きな目をひらいて言った。

「……わしの言ったことはうそじやなかるうがな。だれでもひと目見りやわかる。あのとおりあやしい男じや」

「やっぱり、そうなの？ あのスカーフの下にどんなこわい顔がかくれているんでしょね」

「おじいさん。あれが、さつきおじいさんがいった宇宙の猛獣使いなの？」

「そうじゃ。この間から、彼奴きやつがこのへんをうろうろしてやがるのじゃ。ひとの家の窓をのぞきこんだり、用もないのに飛行場のまわりを歩きまわったり、あやしい奴じゃ」

「なぜ、あの人宇宙の猛獣使いな。宇宙の猛獣で、どんなけだものなんですの」

「宇宙の猛獣を知らんのかな。アフリカの密林ジャングルのなかにライオンや豹ひょうなどの猛獣がすんでいて、人や弱い動物を食い殺すこと

はごぞんじじやろう。それとおなじように、宇宙にはおそろしい猛獣がすんでいるのじゃ。頭が八つある大きな蛇、首が何万マイル先へとどく竜、^{りゆう}そのほか人間が想像もしたことのないような珍獣奇獣猛獣のたぐいがあつちこつちにかくれ住んでいて、宇宙をとんでゆく旅行者を見かけると、とびついてくるのじゃ」

「おじいさん。それはほんとうのこと。それとも伝説ですか」

「伝説は、ばかにならない。そればかりか、あのあやしい男はな、わしがこつそりと見ていると、ひそかに宇宙を見あげて、手をふったり首をふったりしておった。そうするとな、星がぴかりと尾をひいて、西の地平線へ向けて、雨のようにおっこつた。だから彼奴は、宇宙の猛獣使いにちがいないんじゃ」

「ほほほ。やっぱりスミスおじいさんのほら話に、あんたたちは乗ってしまったようね」

「おじいさんは、話がおじょうずですからねえ」

「ほら話と思つてちや、あとで後悔しなさるぞ。わしはうそをいわんよ。だいいち、あの男の顔をひと目見りや、あやしいかどうかわかるじやろうが……」

「もし、おじいさんのいうとおりだったら、あのあやしい松葉杖の男は、さつき出発したテツド博士たちの旅行に、わざわいをあたえるかもしれませんわねえ」

「それだ。それをわしは心配しておるんだて。それについてわしは、もつといろいろとあのあやしい男のあやしいふるまいについ

て知っているんじゃない。昨晚あの男はな……」

「あ、おじいさん。あの男が松葉杖をついて、またこつちへもどつてくるよ」

「うツ、それはいかん。……わしは、こんなところでおちついで話ができる。こうしようや。みなさんが、次の日曜日、教会のおかえりに、わしの家へお集まりなされ。あツ、きやがった」

スミス老人が、ぎくりと肩をふるわせたそばを、れいの緑色のスカーフに面をおもて包んだ男が、ぎちぎちと松葉杖のきしむ音をたてて通りすぎた。

一同が、そのほうへこわごわと視線を集めていると、いったん通りすぎたかの男は、ぴたりと松葉杖をとめ、それからうしろを

ふりかえった。肩ごしに、首をぬつとまえにつきだして、かれはしやがれ声でものをいった。

「おい、お年寄り、あまり根も葉もないよけいな口をきいていると、おまえさんの腰がのびなくなっちまうよ」

「……」

「おれは金鉾のでる山を三つも持っているパンチョという者だ。

これからへんなことをいうと、うちやつてはおかねえぞ」

ぎりぎりぎりど、すごい目玉で一同をねめつけておいて、かれはそこを立ち去った。

あとの一同は、しばらくまた息がつけなかった。スミス老人は、いつまでも唇をぶるぶるふるわせていた。

宇宙通信

「なかなか気持のいい旅行をつづけています」

帆村莊六は救援艇ロケット第一号の中から、ニューヨーク・ガゼット編集局のカークハム氏と無電で話をしている。

「はじめは、このような球形の部屋に住みなれなくて、へんなぐあいでしたが、もうだいたいなれました」

テレビジョン電話で話しているから、この部屋のなか相手の

カークハム氏にもよく見える。そのかわり、カークハム氏の事務室の光景が、帆村のまえにあるテレビ電話の映写幕にうつつてい
る。

球形の部屋の一つを、帆村と三根夫少年とでもらっているのだ。なぜこの部屋が球形になっているか。その理由はもつと先になるとわかる。

室内の調度は、みんなしつかり部屋にくくりつけになっている。コップ一つだって、ちゃんとゴム製のサツクの中にはめるようになってい
る。そしてそのサツクは壁とか机の上とかに、しつかり取りつけてあるのだ。

「この窓も、もう閉めたきりです。だっていつ窓から外をのぞい

ても、暗黒の空間に、星がきらきら光っているだけのことですからね」

地上から成層圏のあたりまで航行する間は、それでも外が明るく見えていて、多少なぐさめになった。しかし成層圏を突っ切つてからというもの、どこまでいっても、暗黒の空間に星がきらきらであった。

もつとも、そのなかにおける一つの異風景は、昼間は暗黒の空間に太陽が明かるくかがやいていることだった。月よりはずっと大きく、もつと赤味あかみのある光りをはなっているのだが、附近の空間は地上で見るような青空でなく、暗黒の空間であることにかわりはない。それはそのあたりにはもう空気がないから、太陽の光

りを乱反射する媒体ばいたいがなく、だから太陽じしんが明かるく光つてみえるだけで、そのまわりはすこしも明かるく見えないのだ。

これは宇宙旅行の第一課にそうとうする知識なのである。

地上から二十万キロメートル位のところで、空から明かるさがまったく消えたが、そこまで達するのに、地上出発いらいちょうど十二時間かかった。それいじょうに速くすることは、乗組員の生命に危険があつた。

いまま加速度は、ぐんぐんふえていく。それはこの宇宙艇隊の航空長とその部下が、計器をにらみながら、ひじょうに正確にあげているのだ。そのやりかたの良し悪しによつて、この宇宙艇隊の乗組員の健康を良くも悪くもし、また原動力の能率を良くも悪

くもするのだ。しかもそのけっかが、さらに『宇宙の女王^{クイーン}』号の救援作業の成功か不成功かをさだめる原因となるのだ。

「地上では、われわれの救援ロケット隊にかんしんをもっていないか」

帆村もそのことが気になると見え、カークハム氏にたずねた。

「かんしんをもっているかどうかどころじゃない。きみたちが空を飛んでいるところを、二十四時間テレビジョンで放送してくれなどという注文があるくらいだ。新聞記事のほうでも、二面全部をこんどの事件に使っているよ。それでも読者は、まだ報道が少ないとふへいをいつてくる」

「なるほど、近頃まれなるかんしんのよせぶりですね。しかしそ

のわりに、われわれの現場到着はひまがかかるので、みなさんにしびれを切らしてしまいそうですね」

「それはその通りだ。だから一刻も早く現場へ到着してもらいたいものだ。このあと、ほんとに一カ月半ぐらいかかるのかね」

「そういつていますね、うちの艇長が……」

「これから一カ月半を、どうして読者をたいくつさせずに引っ張っていくか。これはうちの社のみならず各社各放送局でも気にやんでいる。だからねえ帆村君。その間に、なにかちよつとした事件があつてもすぐ知らせてくれるんだよ。そしてじぶんの部屋なんかにあまり引きこもっていないで、操縦室にがんばっていて、首脳部の連中のしやべること考えることをよく注意していてもら

「いたいね」

「それは、やっていますから安心してください。今、操縦室には三根夫ががんばっていますよ。ぼくと交替で、かれがいま部署についているのです」

「三根夫少年だろう。少年で、首脳部の連中のいつていることがわかるかね」

「あれは勘のいい少年だし、ぼくがこれまでにそうとう勉強させてありますから、大事なことはのがさないでしょう」

「そうかしら。なんだか心配だぞ」

そういつているときであった。艇内電話のベルがけたたましく鳴りひびいた。帆村は手をのばして、卓上から電話機につづいて

いる紐線ひもせんをずるずると引つ張りだし、そのはしを耳の穴に近づけた。紐線の端には、線とおなじ太さの受話器がついていた。

「ああ、ミネ君か。……えッ、なんだって。第六号艇がおかしいって。故障？ えっ、火災が起こった。爆発のおそれがあるって。それはたいへんだ。ぼくは、そっちへすぐゆくよ」

帆村は受話器をもとへもどして、立ちあがりざま、テレビ電話の映写幕のなかに録音器を抱きあげて目を丸くしているカークハム氏にいった。

「わかったでしょう。三根夫はなかなか使えるじゃありませんか。ではぼくは操縦室へゆきます。あっちからあなたにあらためて連絡します」

帆村はいそいで部屋をとびだした。

刻々危険せまる

三根夫少年は、操縦室の壁ぎわに、頬をまっ赤にして、はりきっていた。

帆村の姿が見えると、三根夫は手をくるくると動かして、なにか合図のようなものを帆村に送った。

「六号艇ハ絶望ラシイ」

手先信号で、三根夫は重要なことを帆村に知らせた。

「どうしたの、第六号は……」

帆村は三根夫のそばへかけよると、小さい声でたずねた。

「いまから五分まえに、後部倉庫からとつぜん火をふきだしたそうです。原因は不明。消火につとめたが、次々に爆発が起こって

——燃料や火薬に火がうつって誘爆ゆうぱくが起こって、手がつけられ

ないそうです。テッド隊長は、『絶望だ』とことばをもらしました」

「わかった。ここはぼくがいるから、ミネ君は部屋へいそいでもどり、ガゼットのカークハム君を呼びだして、いまの話をしたまえ。そしてね。ぼくもあとから連絡するといっておいてね。その

連絡がすんだら、きみはもう一度ここへやってくるんだよ」

「はい。そのとおりやります」

三根夫は、いそぎ足で操縦室をでていった。

あとには帆村が壁ぎわに立ち、この部屋でいまむちゆうになつて働いている人々のじやまをしないようにつとめながら、悲しむべき第六号艇の椿事ちんじのなりゆきを見まもった。

いまこの操縦室には、本隊の首脳部がのこらず集まっていた。もちろん隊長テッド博士が中心になって、なんとかして第六号艇をすくう道はないかと、一生けんめいにやっている。

その悲劇の第六号艇の姿は、操縦室の前方側面の壁に、大きくうつしだされている。それは一メートル四方のテレビジョン映写

幕いっぱいにつしだされているのだった。

艇の姿がななめになってうつついている。本艇よりはすこしおくられている。そして艇のうしろから三分の一の部分のところから七、八箇所も、えんえんと火を吹きだしている。その焰にまじって、まぶしいほどの火の塊が、ぼんぼんとはねながらとんでいる。それらの焰と煙とは、むざんな火の尾を長くうしろにひいている。それは艇の全長の五倍にもものびていて、見ているだけで脳貧血が起こりそうである。

いったいどうしてこんな大椿事が起こったのであろうか。

第六号艇の艇長ゲーナー少佐は、原因不明だと無電でテッド隊長に報告している。この救援隊の十台のロケット艇がエフ十四号

飛行場を出発するとき、地上では不吉な流ふきつ言りゅうげんがおこなわれたが、それがとうとうほんものになったようでもある。

隊長テッド博士以下の救援隊の首脳部の心の痛みは、災害をちよくせつに身にうけてその生命もいまや風前の灯火どうようの第六号艇の乗組員三十名よりも、ずっとふかく大きかった。

テッド博士たちとゲイナー少佐とは、あれから無線電話でたえずことばをかわしていたのだったが、テッド博士はついに第六号艇の火災と爆発とが、とても人じんりよく力ちからによつてふせぎ切れるものでないことを見てとると、艇員たち全部の退避をすすめた。

艇長ゲイナー少佐は、沈着な責任感の強い軍人だったので、隊長テッド博士のこのすすめには、すぐにはしたがわなかった。そ

してなおも部下をはげまして消火作業をつづけさせたのであった。だが、それから五分ののちに致命的な大爆発が起こり、そのために艇の後部はふきとばされてしまった。そのすごい光景は、司令艇の操縦室の映写幕にもはつきりとうつつて、帆村も見た。見たは見たが、あまりに悲壮ひそうであつてとうてい見つけられることはできなくて、おもわず両手で目をおおったほどだ。帆村だけでなく、他の人びとの多くも目をおおった。

隊長テッド博士だけは、またたきもせず、だいたんにこの地獄絵巻のような第六号艇の爆発をじつと見つめていた。そして艇長ゲーナー少佐にたいし、ふたたび総員退避をすすめた。

「ゲーナー艇長。この次の爆発が起こると、原子力的な大爆発と

なるだろう。そうすれば、第六号艇だけでなく、のこりのわれわれ九台の宇宙艇もまたぜんぶ破壊するおそれがある。だから一刻もはやく総員を艇から退避させたまえ。きみたち救援のことは引き受けた」

隊長の忠言は、ゲイナー少佐をついに動かした。

「隊長。わかりました。総員退避を命令します。部下を救ってください。お願いします」

少佐はそこではじめて最後の命令をだした。

二十九名の乗組員は、部署をはなれて、くうかんひょうりゆううき空間漂流器をす

ばやく身体にとりつけると、艇外へ飛びだした。こくあんたん黒暗澹たる死

のような空間へ……。

爆発原因

帆村は、手に汗をにぎって、映写幕のうえに見入っていた。

かれは、しばしばうなつた。こうしてじつとして惨劇さんげきを見て
いるにたえなかつた。じぶんもすぐ艇外へとびだして、あの気の
どくな第六号艇の漂流者たちのなかに身を投じ、ともに苦しみと
もにはげましあつて、この危機の脱出に協力したかつた。

だが、そんなことはゆるされない。艇外へとびだしたとて、何

のやくに立とうぞ。

第六号艇のまわりには、僚艇りょうていから放射する探照灯たんしょうとうが数十本、まぶしく集まっていた。その中には、空間漂流器を身につけて、艇からばったのようにとびだす乗組員たちの姿もうつっていた。また、すでにその漂流器にすがって空間をただよっている乗組員たちの姿をとらえることもできた。それはどこかタンポポの種子たねにちようじくにちにくにてにいた。上に六枚羽根のプロペラがあり、それから長軸ちようじくが下に出、そして種子の形をした耐圧空気室があつた。

人間はこのなかへ頭を突っ込んでいるが、だんだんと下から上へはいりこむと、しまいには全身をそのなかに入れることもできた。この耐圧空気室のなかには、いろいろな重要な器具や食糧や燃

料などがそろっていた。まず発光装置があつて、遠方からでもその位置がわかるように空間漂流器全体が照明されている。

無電装置は送受両用のものがついているから、連絡にはことかない。

原子力発電機があつて、ひつようにおうじてヘリコプター式のプロペラを廻して、上昇することもできる。その外にやはり原子力をりようしたロケット推進器がついており、航続時間は約千時間というから、四十日間は飛べる力を持っている。

そのほか、空気清浄器や食糧いろいろの貯蔵もあり、娯楽用の小説やランプもあり、バイブル聖書とハンドブックもあつた。

これだけの用意ができている空間漂流器だったから、乗組員は

じゆうぶん安心して、これに生命をあずけておくことができた。

だが、それだけで安心するにははやい。なぜなれば、もし第六号艇が、テッド博士のおそれる第二の爆発を起こすようであったら、その附近から大して遠くはなれてない空間漂流者たちは爆発とともに、まず生命はなくなるものと思わなければならぬ。

「おい、ゲーター君。なぜきみは早く退避しないのか」

無電で、隊長テッド博士が、ゲーター艇長を叱りつけしかるよう
にいった。

「もうすぐ退避する。二十八名、二十八名だ。まだ一名艇内に残っている者がある」

少佐は、艇員がもう一名残っているのを気にして、じぶんは危

険をおかして踏みとどまっているのだ。

それを聞くと隊長テッド博士は、胸が迫ってきた。

「ゲーナー君。きみは数えまちがえている。二十九名だよ、今空中を漂流しているのは……」

博士は、生涯にはじめて嘘を一つついた。

「二十九名？　ほんとうに二十九名が漂流していますか」

「ほんとうだ。いくらかぞえても二十九名いるぜ」

「ははは、ぼくはあわてていたらしい。じゃあこんどはぼくが飛びだす番だ……」

と少佐は壁から空間漂流器をおろして身体にしぼりつけようとした。そのとき少佐は、おどろいた顔になって戸口をふりかえつ

た。

「誰だ？ まさか……」

もう誰も残っていないはず。が、戸の外からどんだたたく音がする。人間らしい。そのようなことがあっていいものか。

少佐は漂流器を下において、戸口へとんでいった。そして戸をまえへ開いた。

と、戸といっしょに、ひとりの人間の身体がころがりこんできた。

たしかに人間だった。乗組員だ。しかし誰だわからない。上半身が黒こげだ。顔も両手も黒こげだ。

「誰だ、きみは……」

その黒こげの人物は、火ぶくれになった顔をあげ、ぶるぶるふるえる両手に一つの黒い箱をささえて少佐にさしだした。

「きみはモリだな」

「森です」火傷やけどの男は苦しそうにあえいで、

「艇長。これを発火現場で見つけました。本艇の出火はこれが原因です」

「これはなにか」

「強酸きょうさんと金属とをつかった発火装置です。艇長、本隊を不成

功におわらせようという陰謀いんぼうがあるにちがいありません。他の艇にも、こんなものはいっているかもしれません。至急、僚艇へ警告してください」

「うん、わかった。すぐ司令艇へ報告する」

艇長は、痛む胸をおさえて後をふりかえって、テレビ電話のほうを見た。映写幕には、司令艇の隊長テッド博士の顔が大うつしになって、うなずいていた。

『ばんじわかったぞ。はやく退避せよ』と目で知らせているのだ。少佐は安心した。

「報告はすんだ。モリ、さあぼくといっしょにはやく艇から脱出しよう。きみの空間漂流器は……おお、これを着ろ」

少佐はじぶんの漂流器を森に着せようとした。

「それはいけません。艇長のふかい情になさけ合がつしやう掌しょうします。しかしわたしはもうだめです。助かりっこありません。艇長、わたしに

かまわず、はやくこの艇をはなれてください」

「そんなことはできない……」

「艦長。はやく艇をはなれてください」

森は、最後の力をふるって立ちあがった。そして漂流器を少佐にかぶせた。それから操縦室の床にある自動開扉じどうかいひの釦ボタンをおして、床がぽつかりと穴があくと、その中へ少佐の身体を押しこんだ。

すぐその外に、まっ暗な空があった。漂流器にはまった少佐の身体は、ついに艇をはなれた。艇は、ものすごい落下速度がついているので、頭部を下にして急行列車のように少佐のそばをすりぬけて下へ落ちていった。

それから十五分の後、おそるべき第二の大爆発が起こって、第

六号艇は無数の火の玉と化して空中にとび散った。

椿事ちんじの原因をとらえた倉庫員森もまた、その火の玉の一つとなつたことであろう。

救う者、呪のろう者、魔力をふるう者。

大宇宙を舞台に、奇々怪々事はつづく。……

危機一歩まえ

三根夫少年も帆村莊六探偵も、第六号艇のいたましい最後を涙

とともに見送った。

「おじさん。第六号艇は自然爆発したのでしょうか。それとも誰か悪い人がいて爆発させたのでしょうか」

三根夫は、どうもようすがあやしいので、帆村にたずねた。

「さあ。いまのところ、どっちともわからないが」

と帆村探偵は首を横にふり、すこし考えているようすだったが、
「うむ、そうか。これは気をつけないといけない」

と行って、顔色を白くした。

「やっぱり悪人がいるんですか」

「うむ。ミネ君にいわれて気がついたんだが、六号艇の爆発した中心部だね、その中心部の位置を考えると、どうしても自然爆発

が起こったとは思われない。あそこはぜったい安全な場所だった。……だから、時間の関係から考えても、これは時限爆薬しげんぼくやくで爆発させられたものと見て、まずたいしたまちがいはないだろう」

さすがは名探偵だ。

爆発がどの場所に起こったかを見落としてはしなかつた。そして爆発の場所から考えて、それは自爆でなく、他人の陰謀によってこの大惨劇だいさんげきがひきおこされたことを推理したのだ。

このことは、あとに六号艇の艇長ゲーナー少佐が救助されたけっかはつきりした。

空間漂流器に身体をまかせて、極寒ごっかんのまっくらな空間をあてもなくただよっていた六号艇の乗組員たちは、六名の犠牲者をの

ぞいて、全部僚艇に助けられた。

そのうちの一名は、みずから艇とともに運命をともした倉庫員のモリであり、他の五名は、六号艇が爆発したとき、すごい勢いでまわりに飛び散った艇の破片はへんによつて、不幸にも漂流器をこわされ、あるいは身体に致命傷ちめいしやうをうけた人びとだった。

その救助のときはそうかんだつた。

九台の僚艇は、全部が六号艇の遭難現場のまわりに集まつてきて、四方八方から六号艇のほうへ強力なる照空灯で照らした。あたりは光りの海と化した。六号艇からふきでる火災の煙が、地上の場合とははんたいに、照明をたすけた。顕微鏡で見たみじんこのような形をした空間漂流器が、明かるく光る。それを目あてに、

救助作業がはじまったのだ。

しかし六号艇が爆発して飛び散ったときには、みんなひやつとした。それは破片がとんできてじぶんの艇をぶちこわしはしないだろうか、きもをひやしたのだった。だがさいわいにも、それによる損傷はなくてすんだ。

ゲナー少佐は、司令艇に救助された。

救援隊長のテッド博士は、少佐をむかえて、しっかりと抱きしめた。

「けがはないのかね」

「たいしたことはないです」

「ほう。やっぱりけがをしているんだね。ドクトル、手当をたの

みます」

医局長がすぐに手当にかかった。両手と左脚をやられていた。

手のほうは火傷だ。やけど

「隊長、倉庫員のモリが重大なる発見をしたのです。それは……」
と、少佐は傷の手当をうけおわるのが待つていられないという
ようすで、艇長に報告をはじめた。

艇長テッド博士は、非常におどろいた。

そばに、それを聞いていた人たちも顔色をかえた。

聞きおわった艇長は、何おもったか、ものをもいわず、いそいでそこを去った。そして司令室にはいった。

「いそぎの命令だ、各艇に時限爆薬がかくされているおそれがあ

る。各艇はすぐさま艇内を全部しらべる。六号艇の爆破の原因は、時限爆薬のせいとわかった」

隊長は僚艇に無電で命令をつたえた。

たしかにそのおそれがあった。六号艇が特別にねらわれる理由はないようだ。だから時限爆薬は、他の九台の艇にもかくされているおそれはじゅうぶんであった。

この命令をうけた各艇は、ふるえあがった。そんなぶつそうなものがあったては一大事だ。各艇は総員を集め、大至急で艇内の捜査をはじめた。

そのけっか、隊長テッド博士のはやい命令がよかったことがわかった。というのは、第二号艇と第三号艇と、それから博士が乗

組んでいる司令艇と、この三台の艇内に、やはり時限爆薬がかくされていたことがわかった。

そのあぶないお客さまは、ただちに艇外に放りだされた。それは木箱にはいつていて、機械の部分を入れた箱のように見えた。もう五分間探しあてるのがおそかったら、司令艇は六号艇とおなじ運命におちいったことであろう。じつにあぶないところであった。

社会事業家ガスコ氏

艇内捜査と時限爆薬のかたづけがすんだあとで、艇長テッド博士は、数名の幹部とゲイナー少佐と、そのほかに特別に帆村莊六を招いた。

「集まってもらったのはほかでもないが、さっきの時限爆薬事件だ。なぜあんなものがかくされていたか、これについて諸君の意見を聞かせてもらいたい。じつにこれはにくむべき陰謀事件であるからねえ」

そこで一同は、あの事件のてんまつを復習し、そしていろいろと意見をのべて、事件の奥に何者がかくれているかを探しだそうとした。

「出航のまえに、じゅうぶん調べたんだがなあ。まったくふしぎだ」

「密航者しらべをしたときに、怪しい品物がまぎれこんでいるかどうか、それもいっしょに嚴重にしらべるよう僚艇に伝えたんですがねえ」

「もし、そういう品物がまぎれこんだとすれば、それはやはり出航のすぐまえのことだと思えます。つまり乗組員が家族に送られて艇を出たりはいたりしましたからねえ。もしそういうすきがあつたとすれば、それはそのときですよ」

これは帆村莊六の意見だった。

「まあ、こうだろうという話は、それぐらいでいいとして、じっ

さい見たことで、怪しいと思ったことがあったらすべてのべてもらいたい」

隊長テッド博士は、議論よりも事実のほうが大切だと思った。

「べつに怪しい者が出入りしたとは思いませんがねえ。みんな家族なんですから」

「出^で入りの商人もすこしは出入りしたね」

「招待客もすこしは出入りしました」

「顔を緑色のスカーフでかくした男がうろろしていましたね。松葉杖をつけていましたから、みなさんの中にはおぼえていらっしゃる方もありますよ」

帆村がいった。

「あつはっはっ」と同席のひとりが笑った。

帆村は、なぜ笑われたのかわかりかねて、その人の顔をふしぎそうに見た。

「それはガスコ氏だ」

「ガスコ氏とは？」

帆村いがいの人びとは、にやにや笑いだした。

「ガスコ氏というのは、こんどの救援事業に、名をかくして六百万ドルの巨額を寄附してくれた風変りの富豪だ。金鉱のである山をたくさん持っている」

この説明には、帆村も苦笑した。そういう有力なる後援者とは知らなかった。その方面のことは、かれと仲よしのカークハム編

集長も教えてくれなかったのだ。この重大なことをなぜ教えようとはしなかったか、ふしぎなことである。

そのとき帆村は、ふと気がついたことがあった。

「……名をかくし六百万ドルを寄附したということですが、それならば、なぜみなさんはそれがガスコ氏であることをご存じなのですか」

帆村は探偵だけに、どうもわけがわからないと思ったことは、わけのわかるまで探しもとめなければ気がすまないのだった。

「それはね、帆村君」とテッド博士が口を開いた。

「出発の日の朝になって、ガスコ氏は本隊へ電話をかけてきて、きょうはじぶんも気持がよいので、こっそり救援隊の出発を見送

りにいく。しかし微行びこうなんだから、特別にわしをお客さまあつかいしてもらつては困る。それからあの匿名とくめいきふしや寄附者がわしであることは、今回救援に出発する少数の幹部にだけは打ちあけてくれてもよい——こういう電話なんだ。それで幹部だけは、あの匿名寄附家がガスコ氏であることを当時わたしから聞かされて知つたのだ。きみには知らせるわけにゆかなかつたが、まあ悪く思うな」
「なるほど」

帆村はうなずいた。もつともな話である。帆村莊六は通信社から特にたのんだ便乗びんじようしゃ者にすぎない。隊の幹部ではない。

「それで隊長は当日、ガスコ氏をこの艇内へ案内せられたのですか」

「ちよつとだけはね。氏はほんのわずかの間艇内を見たが、まもなくおりてゆかれた。わたしは氏を迎えたとき、氏が『挨拶あいさつはよしましょう。ていちような取扱いもしないでください。近所のものずき男がやってきているくらいくらいの扱い方でけっこうです。わしはすぐ失敬します』といった。氏はきよくりよく知られたくないようすで、スカーフを取ろうともしなかつた」

「そこなんだが……」と帆村はまえへ乗りだしてきて、「どなたか、その時刻からのち、ガスコ邸ていへ電話をかけて、ガスコ氏と話をされたことがありますか」

「さあ、どうかなあ」

帆村のだしぬけな質問に、隊長テッド博士はすこし面くらいな

がら、幹部たちの顔を見まわした。

「わたしはその後一度もガスコ氏に連絡しないのだが、諸君はどうか」

その答えは、あるとき以後誰もガスコ氏と話したり連絡した者がいないとわかった。

「そうなるよ、これは調べてみるひつようがありますね。隊長。ガスコ氏を電話に呼びだして話をしてみてください」

奇怪な事実

帆村莊六は、いったい今なにを考えているのであろうか。ガスコ氏を電話でよびだして、どうしようというのだろうか。隊長テッド博士は無電技士に命じて、ガスコ邸をよびださせた。

まもなく電話はつながった。でてきた相手は、ガスコ氏の執事しつじのハンスであつた。

電話で、相手にたずねることがらは、そばから帆村が隊長にささやいた。

はじめははんぶんめいわくそうな顔をしていた隊長だったが、電話の話がだんだんすすむにつれ、おどろきの色をあらわし顔は赤くなり、また青くなった。

というのは、執事の話によると『旦那さまはこのところ持病の心臓病のためずっと家に引きこもっておられること、去る十三日も一日中ベッドの上に寝ておられ、ぜったいに外出されたことはないし、外出がおできになるような健康体ではない』ことをのべたからである。そして『去る十三日』というのは、テッド博士のひきいる救援隊が地球を出発した日のことであつた。だから博士のおどろいたのも、むりではない。

博士は、もしや聞きちがいかと思つていくどもくりかえし、おなじことを執事に聞いたが、執事はぜったいにまちがいでないと、またそんなにうたがわれるなら主治医に聞かれないと、すこし怒つたような声でこたえた。

(すると、出発当日、艇のそばへ姿をあらわし、じぶんと手をにぎったガスコ氏と名乗る松葉杖の人はいったい誰だったのかしらん)

隊長の服の袖をひく者があつた。そのほうを見ると帆村莊六だつた。(話はもうそのへんでいいから、電話をお切りなさい)と目で知らせている。そこでテッド博士は、執事にていちように挨拶をしてガスコ氏の病気がはよくなおることを祈り、そのあとで電話を切つた。

一同は、もう笑う者もない。みんなかたい顔になつてしまった。博士が、ためいきとともにいつた。

「わたしはゆだんをしたようだ。わたしは本隊の出発当日、身許みもと

の知れない覆面の人物を本艇や僚艇に出入りすることを許したよ
うだ」

そのあとは、しばらく誰もだまっていた。まことに気持のわる
い発見だ。

やがて帆村莊六が口をひらいた。

「ガスコ氏だと見せかけたその覆面の人物こそ、時限爆薬を投げ
こんでいったにくむべき犯人にちがいないと思います。その怪人
物を至急捕えなくてはなりません。おゆるしくだされば、わたし
はすぐにニューヨーク・ガゼットのカークハム氏に連絡して、検
察当局へ届けてもらいます」

「いや、こうなれば、わたしも責任上、公電をうって、この怪事

件についての新しい発見を報告しなければならぬ」

そこで隊長からいつさいのことが地球へむけて通信せられた。

読者は、その怪しい松葉杖の人物が、スミス老人によつて、宇宙の猛獣使いとよばれたことをおぼえていられるだろう。

スミス老人は、ほかの人たちが知らないことを知っており、ほかの人たちよりもずっとまえから、あの松葉杖の男に目をつけていたのである。

だが、スミス老人は、かの怪人物についてどれだけのことを知っているのか、今はまだわかっていない。

テッド博士からの報告により、検察当局ではさつそく大捜査だいそうさをはじめた。

だが、だいぶ日がたっていることでもあり、かんじんの人物が覆面しており、そして服装はといえば、ふだんのガスコ氏とおなじようであったので、その本人を探しだすのはたいへんむずかしかった。

せめてスミス老人か、老人のまわりに集まっていた婦人連とでも連絡がつけば、すこしは手がかりらしいものも見つかったであろうが、あいにく検察当局はこれらの人びとに出会う機会がなかった。

「ガスコ氏に似た怪人物の手がかりが見つからない。もつと資料を送っていただきまし」

そういう暗い報告が、検察当局からテッド博士のもとへとどい

た。

遭難現場近し

三根^{みね}夫^おは、音^ねをあげないつもりであつた。しかしとうとうがまんがでできなくなつて、三根夫は帆村^{ほむら}莊六^{そうろうく}にうったえた。

「おじさん。どうもたいくつですね」

帆村莊六は、本から顔をあげて、目をぐるぐるまわしてみせた。「そんなことは、いわない約束だったがね。それにミネ君は、い

ろんなおもちゃを艇内へ持ちこんでいるじゃないか」

「それと遊ぶのも、もうあきてしまったんです」

オルゴール人形、パチンコ、車をまわす白しろねずみ鼠ども——これだけのものを持つてはいったのであるが、もうあきてしまった。

白鼠の小屋の掃除をするのが、一番たいくつしのぎになる。といつても、これをいくらていねいにしても、ものの二十分とはかからない。

白鼠は、はじめ七ひきであったが、まもなく三ひき死んで四ひきとなった。しかしその後はどんどん子鼠が生まれて、一時は五十ひき近くになった。

五十ひきにもなると、食物の関係や、場所の関係があつて、そ

れ以上にふやせないことになった。そこでそれ以上にふえると、かわいそうだが、かたづけれることにした。

白鼠の運動を見ているのは、楽しい時もあったが、地球を出発してからもはや百日に近い。白鼠の車まわしに見あきたのもあたりまえだろう。

「ねえ、帆村のおじさん。いったいいつになったら『宇宙の女王』号に追いつくんですか」

「さあ、それはいつだかわからないが『宇宙の女王』号が消息をたった現場まではあと二、三日でゆきつくそうだよ」

「えっ、それはほんとうですか」

三根夫は、『宇宙の女王』号の姿ばかりを追っかけていた。し

かしよく考えてみると、それは今どこにいるかわからない。遭難しないで動いているとしても、あれから四カ月ちかくの日が過ぎたことであるから、その間にどこまで飛んでいったかわからない。また遭難してじぶんの力で動けなくなったとしても、地上とはちがうんだから、それから四カ月ものながいあいだ、おなじ空間にじつとしているとは思われない。どの星かの重力にひかれて動いていったことだろう。それもそろそろと動くのではなく、谷間に石を投げ落とすときのように加速度をくわえて飛んでいったかも知れない。

が、帆村のおじさんの話によって、そこまで探しあてるまえに、遭難地点の附近をしらべる仕事があることに気がついて、三根夫

はなんだかきゆうにたいくつから救われたような気がした。あと三、四日で『宇宙の女王』号の遭難地点にたつするとは、なんと
いう耳よりな話であろう。

三根夫は、いまやすっかりきげんがよくなった。このところさつぱり訪問をしなくなっていたところの操縦室へも、たびたび顔をだすようになった。

そのかいがあつた。

それは翌日のことであつたが、操縦士のところへ遠距離レーダー係から、

「前方に宇宙艇らしい形のものを感じる、方位は……」
と知らせてきたので、にわかに艇内は活発になった。

もちろん隊長テッド博士も操縦室へすがたをあらわし、手落ちなく僚艇へ知らせ、監視を厳重にした。

艇内では、この話でもちきりだ。

「やっぱり『宇宙の女王』号は、遭難現場附近にいたね」

「どんなことになっているかな。生き残っている者があるだろうか」

「それはどうかなあ。でもみんな死にはしないだろう」

「すると、この附近に『怪星ガン』もうろついていなければなら
ないわけだね」

「カイセイガンで、なんだい」

「こいつ、あきれた奴だ。怪星ガンを知らないのか。『宇宙の女

王』号が最後にうってよこした無電のなかに、おそるべき怪星ガンが近づきつつあることを、知らせてきたじゃないか」

「ああ、あれなら知っているよ。『宇宙の女王』号を襲撃した空の海賊——というのもおかしいが、おそるべき宇宙の賊だもの。きみの発音が悪いんだよ」

「あんな負けおしみをいつているよ」

そんなことをいい合っているうちに、救援隊の九台のロケット艇はどんどん宇宙をのりこえていった。そしてやがてテレビジョンのなかに、かの宇宙艇らしきものの姿が捕えられた。

「おや、これはどうもちがうね。『宇宙の女王』号ではないようだ」

テッド博士は、誰よりも先に、そういった。

「そうですね。形がちがいますね。もつと横を向いてくれると、はつきりわかるんですが……」

まもなく、かの宇宙艇は針路をかえて横になった。

「なあんだ。あれはギンネコ号じゃないですか、宇宙採取艇さいしゆていの……」

「そうだ、たしかにギンネコ号だ。救援の電信を受取つて、現場へいそいでくれたんだな。なかなか義理ぎりがたい艇だ」

「ギンネコ号に聞けば、なにか有力な手がかりがえられるでしょう」

「無電連絡をとつてくれ」

隊長が命令をだした。

はたしてギンネコ号は、どんなことを伝えてくれるであろうか。『宇宙の女王』号について、ギンネコ号はなにを知っているだろうか。また怪星ガンについてはどうであろう。

おそるべき魔の空間は近いのだ。いや、じつはもうほんの目と鼻との間にせまっているのだ。

テッド博士以下、誰がそのことについて気がついているだろうか。ミイラとりがミイラになるといことわざう諺もある。

怪星ガンの魔力はいよいよ救援隊のうえにのしかかろうとしているのだ。

宇宙採取艇^{さいしゆてい}

いよいよギンネコ号との距離がちぢまった。

救援隊長テッド博士は、九台の艇にたいし、全艇照明を命じた。この号令が各艇にとどくと、九台の救援艇の全身は光りにかがやいて明かるく巨体をあらわした。つまり艇の外側が、つよい照明によって光りをうけて輝きだしたのである。

九台の救援艇の編隊群は三つにわかれていたが、このときあざやかに美しくその姿を見せた。各艇の乗組員は、それを見ようと

して丸窓のところへ集まり、かわるがわる外をのぞいて僚艇の姿をなつかしがった。

ああ、もしいま六号艇もこの編隊のなかに姿を見せていたら、どんなにうれしいことだろうか、ゲイナー少佐をはじめ遭難の六号艇の乗組員だった者は、おなじおもいに胸をいためた。

それにしてもにくいのは、艇内に時限爆弾を仕掛けていった謎の悪漢だ。あっかんきやつは、どうやら社会事業家ガスコ氏に変装し、

松葉杖をつき、緑色のスカーフで顔をかくして、テッド隊長たちをあざむいたのだ。『宇宙の女王クイーン』号を助けにゆく救援隊のじやまするなんて、その悪漢はいったいどんな身柄の人物なのであろうか。

いま、司令艇のテレビジョンの映写幕のうえには、ギンネコ号のすがたが豆つぶほどの大きさにうつっている。ギンネコ号も、このうちの救援隊のほうへ艇首をむけて走っているのだが、あと一時間しないとそうほうは出会えない。

映写幕を見あげている人びとの中に、三根夫少年もまじっていた。そばに帆村莊六も、しずかに椅子に腰をおろしていた。

「帆村のおじさん。ギンネコ号は宇宙採取艇なんですってね」
三根夫が帆村に話しかけた。

帆村は、少年のほうへふりむいて、だまつてうなずいた。

「その宇宙採取艇というのは、どんなことを仕事にするロケットなんですか」

「ああ、それはね」

と帆村はひくいが、しつかりした声で甥おいのほうへ口を近づけて語りだした。

「この宇宙には、わが地球にない鉱物などをふくんだ星のかけらが無数に浮かんでいるんだ。その星のことを、宇宙塵うちゅうじんと呼んでいる学者もあるがね、とにかく名は塵ちりでも、わが地球にとってはとうといもので、宇宙に落ちている宝と呼んでもいいほどだ。ギンネコ号のような宇宙採取艇はそういう宇宙塵をひろいあつめるのを仕事にしているロケット艇なんだ。これは商売としてもなかなかいいもうけになるし、われわれ地球人にとっては、たいへん利益をあたえるものなんだ。つまり地球にない資源が、宇宙採取

艇のおかげで手にはいるわけだからねえ」

「じゃあ、隕石いんせきを拾うのですね」

「いや、隕石だけではない。もつといいものがいく種類もある。なかには、まだわれわれ地球人のぜんぜん知らない物質にめぐりあうこともある。たとえばカロニウムとかガンマリンなどは、地球にないすごい放射能物質で、ともにラジウムの何百万倍の放射能をもっている。こんな貴重な物質がどんどん採取できれば、じつにありがたいからね。それを使って人類はすごい動力を出し、すごいことができる」

「そんなら国営かなんかで、うんと宇宙採取艇をだすといいですね」

「うん。だがね、そういう貴重な宇宙塵は、なかなか、かんとんには手に入らないんだ、何千か何万かの宇宙塵のなかに、ひとかけら探しあてられると、たいへんな幸運なんだからね。宇宙採取艇で乗り出すのは、昔でいうと、金鉱探しやダイヤモンド探しいじょうに、成功する率はすくないんだ。宇宙塵採取やさんは、世界一のごろつき連中だと悪口をいわれるのも、このように貴重な宇宙塵を見つけだすことがたいへんむずかしいからだ。まあ、そんなところで話はおわりさ」

帆村莊六の説明は、三根夫をかなり、ふあんにおとし入れたようであった。三根夫は、眉まゆをよせていった。

「じゃあ、おじさん、これからぼくたちが出会うことになってい

るギンネコ号も、やっぱり宇宙のごろつきなんですね。すごい連中が乗組んでいるんですね」

そういうすごい連中と、こんなさびしい宇宙であうなんて気持のいいことではないと、三根夫は思ったのだ。

すると帆村がいった。

「いや、宇宙採取艇のみながみな、ごろつきだというわけではない。それにギンネコ号なら、たぶんこのおじさんの知っている鴨かもさんという艇長が乗組んでいるはずで、あの人は、けっしてごろつきではない」

それを聞いて三根夫は、やっと安心した。

宇宙のめぐりあい

はてしれぬ広々とした暗黒の宇宙だ。その宇宙のなかの一点においてめぐりあう二組の宇宙旅行者だった。

救援艇隊では、テッド隊長の命令によつて、各艇の外側に照明をうつくしい七色の虹のような照明にかえた。各艇は輪になつて、そのまん中にギンネコ号を迎える隊形をとつた。

相手のギンネコ号の方は、そんなはでなことをしなかつた。艇首に三つばかりの色のついた灯火とうかをつけ、『ワレ、貴隊ニアウヲ

喜ぶ』という信号をしめしただけであった。そしてひどく型の古い艇身に、救援隊側からのサーチライトをあびながら、輪形りんけいへん編隊たいのなかにとびこんできたが、そのかつこうはなんとなくきまり悪そうに見えた。

ギンネコ号が、いったん救援艇の輪のまん中を通りぬけると、こんどは救援隊はあざやかに大きく百八十度の大旋回をして、ギンネコ号のあとを追った。そしてやがてそれに追いついて、再びまえのようにギンネコ号をまん中にはさみ、救援艇九台がそのまわりをとりかこんだ。

そうほうのスピードは、ずんと低いところにたもたれた。こういふかつこうでゆつくりと暗黒の宇宙をただよいながら話をしよ

うというのであった。

隊長テッド博士は礼儀正しい人物であったから、ギンネコ号の艇長にたいし無電をもつてていちようないさつを送ったうえ、
失踪した『宇宙の女王クイーン』号のことについていろいろと貴艇の知っておられるところをおうかがいしたいから、こちらから副隊長のロバート大佐外四名の隊員を貴艇へ派遣することをゆるされたい。そのように申し送った。

これにたいするギンネコ号からの返事はかなり手間どった。救援隊の若い者は、ギンネコ号にたいし、なぜはやく返事をよこさないのかとさいそくの無電を打ちたがったことは一度や二度ではなかったが、テッド隊長は、まあ、まあ、そう相手をいそがせな

いほうがよかろうと、さいそくの無電を打たせなかつた。

三十分もしてから、やっとギンネコ号からの返事がきた。

「本艇は、有力な資料をほとんど持つていない。貴隊から使者のくるのはさしつかえない。ただし五名は多すぎるから、三名にしろてもらいたい」

この返事を記した受信紙の周囲にあつまつた若い者は、ギンネコ号の無礼にふんがいき、こちらから送る使者のかずに制限をくわえるのはどういうわけかと、ねじこもうと叫んだ者もあつたほどだ。だがこれもテッド隊長のことばによつてようやくしずまつて、それから三名の使者の人選が発表された。

それによると、第一は副隊長のロバート大佐、第二にポオ助教

授。この人は、『宇宙の女王』号の艇長であるサミュールの門下生のひとりだ。それから第三に、みんなを意外におもわせたが、帆村記者がえらばれた。

これを聞いた三根夫少年は、帆村莊六の横よこつ腹ばらをつつつき、「おじさんはいいなあ。うらやましいなあ」

といったが、帆村は笑いもせず怒りもせず、無神経な顔つきで、首を微動もさせなかった。

「それではこれから三名にでかけてもらおう。なにかお土産みやげを持って行ってあげたがいね。新聞と雑誌と、それから果物をいく種類か」

テッド隊長は、こまかく気をつかった。

一行はでかけた。

司令艇の側壁そくへきの一部が、するすると動きだしたと思うと、それは引戸のように艇の外廓がいかくのなかにかくれ、あとに細長い楕だえん円形けいの穴がぽつかりとあいた。

するとまもなくその穴から、円板えんばんのようなものがとびだした。それは周囲から黄色い光りを放ちまるで南京花火ナンキンはなびのようにくるくるまわって、闇をぬって飛んだ。

これは円板式の軽口ケツトで、汽船が積んであるボートにあたるものだ。くるくるまわっているのはその周囲のタービンの羽根のような形をしたところだけで、まん中のかなり厚味のあるところは廻らない。その中にこの円板軽口ケツトの乗組員たちや三名

の使者がはいっているのだった。

ぱつぱつと黄色い光りの輪のまわるのを見せながら、円板ロケットは大きい弧こをえがいたあとで、調子よくギンネコ号のうしろから近づいていった。ギンネコ号は知らん顔をして飛びつづけている。しばらくの間、円板ロケットはギンネコ号の下に平行になつて飛んでいたが、そのうちに円板ロケットからは、ほんと引力いかりがうちだされた。

それは円板の中央あたりからとびだしたものであるが、樽たるのよ
うな形をし、うしろに丸い紐ひものようなものをひっぱっていた。

しかしこれを見ると、紐ではなくて伸びちぢみのする螺旋らせんはし
ごであった。その先についている大樽みたいなものは、艇内から

送られる電気力によつて、相手のギンネコ号の艇壁ていへきにびつたり吸いついた。この引力いかりは、すごい吸引力を持っていて、艇内で電気を切らないかぎり、けつして相手から放れはしないという安心のできる宇宙用のいかりであつた。

これでギンネコ号は、側壁の扉を開かないわけにゆかなかつた。すると円板ロケットの中から、三人の人影があらわれ、やや横に吹き流れた螺旋らせんはしごの中を上へのぼつていった。そしてはしごをのぼりつめると、ギンネコ号の横つ腹にあいた穴の中へもぐりこんでいった。

このありさまは、救援隊の僚艇から集中するサーチライトによつて、はっきりと見えた。そしてその三人の人影が、ものものし

い宇宙服に身をかためていることも、双眼鏡でのぞいた人々の目にはうつった。

よくばり事務長

「ものものしいかつこうですが、お許してください」

円板ロケットから、ギンネコ号の中へ乗り移ったロバート大佐は、うしろにしたがうポオ助教授と帆村とのほうへ手をふりながら、ギンネコ号の人々にあいさつをした。

そこは三重の扉を通りぬけたあとの、ふつうの大気圧の部屋であつたから、ギンネコ号の人たちはふつうのかっこうをしていた。かれらは日本人ばかりではなかつた。むしろ日本人はすくなく、その他の国々の人が多く、まるで人種の展覧会のようにも見えた。「そのきゆうくつなカブトをおぬぎなさい。それからその服も……」

そういつたのは、やせて背の高い白毛の多い東洋人だつた。どこからくだに似ている。

「いや、はなはだ勝手ですが、このままの服装でお許しねがいます。脱いだり着たりするには、はなはだやっかいな宇宙服ですから」

と、ロバート大佐は釈しやくめい明めいをしてから、じぶんの名を名乗り、ふたりの随員ずいいんを紹介した。そして、

「あなたは艇長でいらつしやいますか」と聞いた。

するとらくだに似た東洋人は、首を左右にふつて、

「いや、わしは艇長ではありません。事務長のテイイです」

「ははあ、事務長のテイイさんですか。それで艇長に、お目にかかりたいのですが……」

「艇長はこのところ病びようしやう床しょうについていまして、お目にかかれんです。それで艇長はその代理をわたしに命じました。ですからなんなりとわたしにいつてください」

そういうテイイ事務長のことばに、ロバート大佐はふまんの面

持でうしろの随員のほうへふりかえった。

「すると、ご持病で苦しんでいられるのですか」

そういつて聞いたのは帆村だった。

「ええ、そうなんです」

事務長は、するどい目でちらりと帆村の顔をぬすんで答えた。

「胆石病なんですね」

「胆石病——ああ、そうです、胆石病です。あの病氣、なかなか苦しみます」

事務長のことばに、なぜかあわてたようなところがあつた。

そこでロバート大佐は『宇宙の女王』号のことについて、事務長の知っているかぎりのことを話してくれとたのんだ。

「当局からの依頼の無電によつて、わがギンネコ号は、ばくだいなる損失をかえり見ず、指定されたその現場へ急行したのです。それには正味しやうみ三十五日かかりましたよ。しかもそれからこつちずっとこのあたりを去らないで、あなたがたのおいでを待ったわけですから、本艇はじつに二百日に近いとうとい日数を、なんにもしないでむだにおくつたのです。この大きな損失は『宇宙の女王』号の持主か当局かがかならず弁償べんしょうしてくれるんでしょうね」

テイイ事務長の話は、女王号のことから離れて、じぶんの艇のうけた損失にたいするつぐないを要求する強い声にかわつた。

ロバート大佐は、不快をしのいで、それはとうぜん弁償される

でありましようかと答え、そしてこのギンネコ号が現場へきて何を見たかについて話してくれるよう頼んだ。

「それは話さんでもないがね、弁償のことが気になってならんだ」

と事務長はうたがいぶかい目で大佐を見すえてから、

「この現場へきたが、わたしたちは『宇宙の女王』号の姿を発見することができなかつたし、そのほか、その遺留品いりゆうひんらしい何物をも見つけることができなかったのです。とって、けっして捜査の手をぬいたわけではない。いく度もいく度も、おなじところをくりかえし探したのだが、さっぱり手がかりなしだ。まことに
お気の毒です」

この話によると、ギンネコ号は何の手がかりをもつかんでないことになる。大佐の失望は大きかったが、気をとりなおし、

「レーダー《無電探知器》で探してみられなかったですか」と聞いた。

すると事務長は、ぴくりと口のあたりを動かし、ちよつといいよどんだ風に見えた。

「レーダーによつても手がかりなしだった。しかし大佐どの。われわれはレーダーを儉約したのではなく、当局から捜査依頼のあった日からきよう貴隊にあうまでの二百日ほどの長期間にわたつて、レーダーを一秒間たりとも休めないで捜査をつづけたのですぞ。そのけっか、本艇では高価なるブラウン管を二十何本、いや

三十何本かを、とにかくたくさんのブラウン管をだめにしてしまった。この代価もぜひとも払ってもらわねばしようちできんです」どこまでいっても、よくばった話ばかりであった。

黒バラの目印^{めじるし}

大佐は随員と協議した。

とにかく、きょうはこれで引きあげることにはしようではないかと決まった。

そこで帆村から、お土産の贈り物である新雑誌と果物のかごとを事務長にわたして、席を立った。

このとき事務長は、喜びの顔をするまえに、ふあんな目つきで新聞のページをぱらぱらとめくった。

「では事務長。またおじやまにあがるかもしれませんから、よろしく。なお、今から二十四時間は、ぜひともいっしよに漂泊ひょうはく

していただきたいのですが、——これは国際救難法にもとづいての申し入れなんです、もちろんごしやうちねがえましようね」

ロバート大佐は、最後の重要事項をあいてに申し入れた。

「本艇の行動は自由です。しかしいまの件は、わたしがしやうちしました。二十四時間たったあとは、どうするかわかりませんよ。

もつとも本艇はできるだけ貴隊の捜査に協力する決心ですから安心してください」

テイイ事務長は、このように答えた。

これで会見はおわって、三人の使者は引きあげたのだが、そのとちゆうで、どうしたわけかポオ助教授が「あつ」と声をあげた。すると、帆村が、

「これは失礼。うっかりして足を踏んで、すみません。どうもすみません」

と、助教授のからだを抱えるようにして、ひらあやまりにあやまった。

まもなく三重扉であった。それを一つ一つ開いてもらい、気圧

の階段を通りぬけて三名は外に出、螺旋はしごを下りて円板ロケットの中へかえりついた。

機関員たちは、螺旋はしごの電気を切り、はしごを中へとりこんだ。そのときには、円板ロケットはすでにギンネコ号の艇壁からはなれて、また周囲に火花のような光りを散らしながら、暗黒の空を大きく切って飛んでいた。

円板ロケットのなかで、三人の使者がめいめいの席についたとき、

「帆村君。さつきはどうしたの。ぼくのほうがおどろいたよ」

と、ポオ助教授が、待ちかねたという顔つきで、そういった。

帆村はにやりと笑った。

「あのようにならないと、相手にかんづかれるおそれがあったからです。ポオ助教授。あなたは、あのときギンネコ号の室内に意外なものを発見して、おどろきの声をあげられたのですね」

「ほう。これは気がつかなかったが、いったいどういうことかね」
ロバート大佐が、からだをまえに乗りだしてきた。そのときポオ助教授は、椅子にふかくもたれて、さっきのことを思い出そうとつとめるのか、しばらく目をとじていたが、やがて目を開いて、意外なことを語りだした。

「まったく帆村君の想像のとおり、ぼくは意外なものをあの部屋のなかで見つけたのです。それは発光式の空間浮標フイです。はじめその上にキャンバス布ぬのがかけてあって見えなかったのですが、ぼく

たちが帰るとき、テイイ事務長の身体がカンバスにさわって、その布が動いて横にずれた。それで下にあつた空間浮標が見えたんです」

「ほう。それはもしや『宇宙の女王^{クイーン}』号のものじゃなかったのか」

大佐は先をいそいで、質問の矢をはなつ。

「そうなんです、あの器具は、ぼくが五十箇だけ用意をして女王号にとどけたんです。そしてそれに書きこんでおいたしるしは、黒いバラの花でした。さつきぼくが見たとき、カンバスの下から出ているあの浮標のうえに、たしか、その黒いバラのしるしのあ

るのをみとめました」

この話は、大佐をおどろかした。

「すると、ギンネコ号は、女王号の空間浮標をひろって、知らぬ顔をしているんだな」

「そうなりますね。ごしようにちでしようが、あの空間浮標は、宇宙の一点にいかりをおろしたように動かないで、その一点をしめす浮標なんです。しかしもう一つの使い道があります。それは遭難したときなど、その遭難現場を後からきた者に教える役もします。そういうときには、艇から外へほうりだすまえに、重大な遺書の中へ入れるのがれいになっています」

「では、ギンネコ号は、女王号の遺書をぬすんで、知らん顔をしているのか。じつにけしからんことだ。いったい、なぜこんなこ

とをするのか。よし、これから引き返して持ってこよう」

「まあ、お待ちなさい、ロバート大佐」と、帆村は大佐をとめた。

「だが、このまま本艇へもどっては、わたしの責任がはたせない」

「いやいや、相手はとつてもすなおにもどすとは思われません。

というのは、あのギンネコ号にはゆだんのならぬ連中が乗組んで

いると思われるからです。とても一筋縄ひとすじなわではゆきませんまい」

「しかし帆村君。きみの知っている人格者が艇長をしているとい

う話だったじゃないか」

「そうなんです、その鴨艇長かもがきようは姿を見せなかつたので

すから、ふしぎです。かれは病気でも、こんな重大なときには、

われわれを病床へでも迎えて、会うほどの責任感の強い人物なん

です。それがきようはでてこないのですから、ゆだんはなりません」

帆村のことばが、たしかめられる時がまもなくくるのだ。あやしむべきギンネコ号の行動。

ギンネコ号と怪星ガンとは、なにか関係があるのであろうか。

残念がる助教授

ポオ助教授は、司令艇へ帰ってきてきても、こうふんをつづけてい

た。

帆村莊六は、助教授をなだめるのに一生けんめいだった。三根夫少年は、三人の使者がかえったと知って帆村のところへとんできたが、その場のようすに、三根夫自身も息のつまるような緊張をおぼえたことであつた。この息づまるような空気は、救援隊長テッド博士をまん中にした幹部会議の席にまでもちこまれた。

三人の使者のなかで、一番上席のロバート大佐が、ギンネコ号に使いにいったけっかわかつたことについて、一通りの説明をし、そのあとでポオ助教授の肩へ手をおいて、

「……そこでポオ助教授から、見おぼえのある『宇宙の女王』^{クイーン}号の空間浮標^{ブイ}がギンネコ号の隅にあつたことについて、くわしく

話をしてもらおう。ポオ君、おちついて話したまえ」

と、助教授に発言をうながした。

待っていましたとばかり、助教授の長身が席からぬつくと立ちあがった。

「あれは、わたしが試験して『宇宙の女王』号へ届けた空間浮標にちがいないのです。形も見おぼえがあり、塗りの色もそうでしたし、さらにまちがいないことは黒バラの目印がついている。黒バラは、『宇宙の女王』号のマークなんですからねえ」

助教授はそういつて、テーブル卓子のうえを、とんと一つたたいた。

ならんでいる人たちの中には、大きくうなずく者もあつた。隊長テッド博士は上半身をまえへのりだした。

「そういうたしかな証拠があるかぎりは………」

とポオ助教授はいよいよこうふんの色をしめし、

「ギンネコ号はうそをついていると断定しないわけにはいかない。ギンネコ号は、現場へかけつけたが『宇宙の女王』号を一度も見なかったといっている。うそです、それは。……ギンネコ号はたしかにわが『宇宙の女王』号に出会っている。あるいはその漂流物かもしれないが、それを手に入れている。しかし相手はそれを白状しないのです。まったく、許しておけないゴロツキどもです。幹部たちには、助教授のことばの中にある重大性がよくわかった。

「だからです」とこのときポオ助教授はロバート大佐のほうを指

し、

「なぜわれわれがギンネコ号のなかにいる間に、あなたはそつてんについで、相手に質問してくださらなかったのか。まったく、大事な機会を逃がしたと思う。あのとき問いただせば、なまずみたいにぬらりくらりしたテイイ事務長といえども、顔色をかえて、泥をはくしかなかつたと思う。しかるに大佐は、それをしなかつた」

助教授のとなりには帆村が立つて、隊長に発言の許可をえたのち、口をひらいた。

「いまポオ助教授が大佐にたいしふまんをのべられました、それについて、じつはわたしも責任があります。それはわたしは

『空間浮標』のことは、われわれが知らないでギンネコ号を引きあげていったと、相手に思わせる必要があると思つたからであります。もし、それをいいだせばギンネコ号の連中は、ロバート大佐をはじめわたしたち三名を、やすやすと引きあげさせなかつたでしょう。わたしはギンネコ号が、秘密をもつたいやな宇宙艇であることを、艇内にはいると同時にさとつたのです」

帆村は、横の椅子に腰をおろしたポオ助教授を気の毒そうにながめながら、

「ですから、ポオ助教授が、あの黒バラ印の空間浮標を見つけて、おどろきのあまり声をたてようとされたとき、それをさせてはたしへんと、わたしは失礼をもちかえりみず、ポオさんの足を踏み、

それをわたしがおわびするさわぎでもって、ポオさんがおどろきの声をあげたのをごまかしてしまつたのです。いや、助教授、あのときは失礼いたしました」

そういつて帆村はわびた。

「……それからわたしはいそいでこのことを大佐に知らせ、そしてこの場は、知らんふりをして引きあげるのがいいと思うと申しあげようとしたんですが、さすがに大佐は、さつきからのことも、またわたしの申しあげようとしたこともさとつておられ、余よにまかせておけと合図をされたのです。ですからポオ助教授のふんがいされることはもつともながら、いま申しあげた事情によつて、どうかわかつていただきたい」

と、帆村はいきつをして、席にもどった。

助教教授は、まだじゆうぶんにのみこめないといった顔だ。

そのとき隊長テッド博士は、あらたまつた口調になつて、次のとおりのべた。

「このたびの処置は正しかったと思う。そしてギンネコ号にたいしては、いろいろと対策をかんがえておかなければならない。そして黒バラ印の空間浮標の一件については本国へ向かつての報道を禁止する。事態は重大である」

この部屋の隅で傍聴をしていた三根夫も、このとき思わず身ぶるいがでた。たがいに助けあう友だちの艇と思つたギンネコ号が、意外にもゆだんのならないゴロツキ艇であるらしく、それが身ぢ

かにいる間は、いつこつちに害をくわえるかもしれず、ほかに警察力もないこの宇宙の一角において、生き残りの九台の救援艇隊にふりかかる運命は、どんなにきびしいものであろうかと心配されるのだった。

ギンネコ号りだつ離脱

その夜、帆村と上下のベッドにはいった三根夫は、上のほうから下へ声をかけた。

「ねえ、帆村のおじさん。ギンネコ号はゆだんのならないゴロツキ艇だつてね」

「まあ、そうとしか思えないね」

帆村の返事は、ぶつきら棒だ。なにか帆村は考えごとをしていてにちがいない。そこへ三根夫が声をかけて、じやまをしたから、帆村はぶつきら棒の返事をしたのであろう。

「でも、まえにおじさんは、あの船には鴨艇長かもがのっている。鴨艇長はいい人だから、あの宇宙艇はいい人ばかり乗っているんだらうといったでしょう。おぼえているでしょう。その話とゴロツキ艇の話とは正反対ですね」

「そのことだ」と帆村は低くうなるようにいった。

「とにかく鴨艇長が乗っているかぎり、正義と親切の艇であるはずだ。だからおかしい。艇長は病気をしているとテイイ事務長の話だったが、病気をしているくらいで、乗組員があんなゴロツキみたいに悪くなるはずはないんだがなあ」

「ギンネコ号は、『宇宙の女王^{クイーン}』号の遺留品をしこたまひろつて、知らん顔をしているんじゃないですか。そういうことをするのを、『猫ばばをきめる』というでしょう。なまえがギンネコだから、きつとネコばばをするのはじょうずなんだろう」

「ははは。ギンネコだからネコばばはじょうずか。これは三根夫クン、考えたね。ははは」

笑わないことひさしい帆村がかかるく笑ったので、三根夫もうれ

しかった。

「とにかくもうすこしギンネコ号のようすを見たうえで、『宇宙の女王』号とどんな関係にあるかをつきとめるしかない。そうだ、もう一度テッド博士にご注意をお願いしてこよう」

そこで帆村は、またベッドから起きあがると、服を着かえて、隊長のところへでかけた。

さてその夜のことであるが、救援艇隊はひそかにギンネコ号の行動を監視していた。

監視といってもテレビジョンでのぞいているのを主とし、そのほかに、ほんのわずかだけ弱いレーダー電波をギンネコ号にむけて、その位置を注意していた。レーダー電波を、あまり強くかけ

ると相手が気をわるくする。ことにギンネコ号をおこらせ、現場から遠くへ離脱りだつするこうじつを相手にあたえてはこっちの大損であるから、電波でギンネコ号をさぐることはなるべく目だたないようにしていた。

夜にはいつて一時間ほどすると、（時計の針のうえだけでの夜だ、その時間には当直のほかはみんなねむることにしていた）当直の監視員がさわぎでした。

「たいへんです。ギンネコ号がわれらの艇団からはなれてゆきま
す」

まずはじめに、テレビジョンでそれを見つけた。すぐさまレーダーでも探知してみると、なるほどギンネコ号は、さつきまでこ

うちの九艇の中心あたりにいたのに、いまはどんどん前進してそこからはなれていく。

「うむ。たしかにギンネコ号は動きだした。国際救難法により二十四時間は救援隊から離脱できないことになっているのに、ギンネコ号は、法規をやぶるつもりか」

このことは、すぐさま幹部にまで報告された。隊長テッド博士をはじめ、みんな起きてきた。そして協議がはじまった。

「法規にはんするから、ギンネコ号に反省をもとめようか」

「まあ、もうすこしようすを見てからにしたほうがいい」

隊長は、そういつて、ふんがいする部下たちをおさえた。

ところがギンネコ号は、だんだんに速度をはやめて、はなれて

ゆく。刻々おたがいの距離はひらいていった。

時計をじつと見ていた隊長は、三十分して無電でもつてギンネコ号に連絡させた。

それにたいしてギンネコ号は、返事をうつてこなかった。

それから三十分して、テッド隊長は、いよいよたがいの距離を大きくしたギンネコ号にたいし法規をたてに、警告をこころみた。ところが、それにたいしてもギンネコ号は返事をしてこなかった。そしてますます速度をまして、こっちの救援隊の位置からはなれていった。

救援隊員のなかには、ひどくおこりだして隊長はすぐ全艇に命令をだし、最高速度でギンネコ号のあとを追わせるべきだと論じ

た。最高速度で追いかけるなら、追いつける自信がじゅうぶんにあつた。

だが隊長は、それを命令しなかつた。

ギンネコ号が、こつちへ返事の無電をうつてきたのは、五回目の警告のあとだつた。その返事は、人をばかにしたようなものだつた。

「本艇は、貴艇団のまん中において安眠することができない。また、いうまでもなく、本艇の行動は自由である。されど貴艇団にやくそくする、明日九時、本艇はふたたび、貴艇団のまん中へ引きかえすであろう。ギンネコ号艇長」

貴艇団のなかでは安眠することができないとは、よくもぬけぬ

けといえたものである。

すずはく
錫箔のかべ

それにしても、この返事がギンネコ号から発せられたので、救援隊としては、これいじょうに文句がいえぬ。で、そのままにして、引きつづきギンネコ号の位置に気をつけていることにした。そしてテッド博士以下の幹部も、またベッドへかえった。

帆村莊六はベッドにかえらなかつた。そして監視班の当直がつ

めている部屋の中へはいった。三根夫少年も、帆村につよくねだつて、そのうしろへついていった。

四名で当直をしていた。

テレビジョンへ一人、レーダーへ一人ついていた。あとの二人のうち、一人は電源などに気をつけていたし、もう一人は記録をとっていた。

「たいへんですね。なにかあれば、ぼくと三根夫が伝令になって、隊長でも誰でも起こしてきますからね」

と、帆村は当直の人びとにいった。

あいかわらずギンネコ号は、遠くへはなれつつあった。

「帆村のおじさん。ギンネコ号は、うまいことをいって、にげて

しまうんじゃない」

三根夫は心配でしかたがなかった。

「さあ、何ともはつきりしたことはないが、さつきあのよう
に返事をよこしたんだから、まさかほんとうにげはしまい」

そう答えた帆村も、レーダー手が新しい距離を測定してそれを
曲線図にかいたのを見るたびに心配に胸がいたんだ。

それは十二時近くであった。

「あッ、たいへんだ」

と、レーダー手が、おどろきの叫び声をあげた。

帆村はすぐ椅子からとびあがって、レーダー手のところへいっ
た。

「どうしたんですか」

するとレーダー手は、ブラウン管の膜面におどるエコーの映像を指してダイヤルをまわしながら、

「これごらんなさい、ギンネコ号がおびただしい電波妨害用の金き属箔んぞくはくをまきちらしたようです。このへんいつたい、そうとうひろく、エコーがもどつてきます」

「なるほど。とうとうみようなことをはじめたな」

ギンネコ号がまきちらしたらしい電波妨害用の金属箔というのは、よく飛行機などが敵の戦闘機に追いかけられたとき空中にまきちらす錫箔すずはくなどをいう。これをまくと、レーダーの電波は錫箔にあたって反射し、レーダー手のところへかえってくる。そし

てそのむこうにいるかんじんの飛行機は、空中にひろがる錫箔のかげを利用して、うまくにげてしまうのである。

だからギンネコ号がそれをまけば、かなりひろい空間にわたって錫箔のかべができてしまい、ギンネコ号はそのかべの向うでにげてしまうことができる。つまり、こつちがその錫箔のかべをむこうへつきぬけないかぎり、とうぶんレーダーは何のやくもしなくなるのだった。

テレビジョンの方も、視界がうんと悪くなって、ギンネコ号の姿を見うしなつてしまった。

まさに一大事である。

やっぱりギンネコ号はにげるつもりだったんだな。

帆村は隊長テッド博士のところへとんで行って、きゆうをつげた。

「ふーむ。これはもうほうつておけない」

隊長はついに命令を発し、救援艇の第三号と第五号と第七号の三台に、全速力をもってギンネコ号のあとを追いかけて、電波妨害用の金属箔のむこうへ出、状況をよく見て報告するようにと伝えた。

そこで三台のロケット艇は、隊列からぬけると、うつくしい編隊を組んで、ギンネコ号のあとを追いかけた。

だが、彼と我との距離は、いまはもうかなりへだたっていた。

だからこの三台の追跡隊が、金属箔のかべのところまでいくには、

四時間もかかって、午前五時となった。

ようやく金属箔のかべをつきぬけたのはいいが、そのむこうにまた金属箔のかべがあつた。何重にも、それがあつたのである。だからそのうるさいかべの全部をつきぬけるには、それからまた二時間もかかった。

「何かご用でもありますか。いそいで本艇を追つかけておいでになつたようだが……」

とつぜん追跡隊へ無電がかかつてきて、ギンネコ号からのいやみたつぷりな問いあわせであつた。

「ええッ」

といって、追跡隊の人たちも、この返事にはつまつた。じつに

間のわるい話であった。

こつちをからかいながら、ギンネコ号は、いぜんとはうってかわって、いやにきげんがいい。

ふしぎなことであった。

覆^{ふくめん}面の怪物

さすがのテッド博士以下の救援隊幹部も、また名探偵といわれたことのある帆村莊六も、ギンネコ号がひそかにやってのけたは

なれ業^{わざ}には、まだ気がついていない。

そのはなれ業のことを、ここですこしばかり読者諸君にもらしておこうと思う。

ギンネコ号が金属箔のかべを作ったあとのことであるが、流星かと見まごうばかりの快速ロケットが、救援隊とは反対の方向からギンネコ号にむかってどんどん距離をちぢめてくるのが、ギンネコ号にわかった。

テイイ事務長などは、そのしらせを受けると、大満悦^{だいまんえつ}であった。そしてギンネコ号を、そのほうへ最高速度で近づけるとともに、うしろにはたえずレーダー妨害用の金属箔の雲をまきちらした。

快速ロケットはだんだん接近し、午前三時半頃には、ついにギンネコ号といっしょになった。たくみなる操縦によつて、その快速ロケットは、ひらかれたるギンネコ号の横よこはら腹のなかに収容されたのであった。

見かけは古くさいギンネコ号には、意外に高級な仕掛けがあったのだ。

そしてこの快速ロケットは、銀色の葉巻のような形をしたもので、全長はギンネコ号の十百分の一しかなく、せいぜい一人か二人乗りのロケットらしかった。

テイイ事務長に迎えられて、快速ロケットのコスモ号から姿をあらわしたのは、身体の大きな緑色のスカーフで顔をかくした人

物だった。

「間にあつたんだらうな」

その覆面の人物は、きいた。

「はあ、見事におまにあいになりました。やっぱり親分はたいしたお腕まえで……」

「これこれ、親分だなんていうな。きょうからスコール艇長とよべ。おおそうだ。艇長室はきれいになつてゐるだらうな」

「はいはい。それはもうおいでを待つばかりになつております。

ええと……スコール艇長」

スコール艇長はマフラーの中で顔をゆすぶつて笑つた。

「よし、満足だ。あんちやくいわ安着祝いに、みんなに一ぱいのませてやれ」

「え、みんなに一ぱい？」

「おれの乗ってきたコスモ号のなかに、酒はうんとつんできけてや
つたわい」

「うわッ、それはなんとすばらしい話でしょう。さっそくみんな
に知らせてやりましょう」

「ちよつと待て。顔の用意をするから、おまえもうしろを向いて
くれ」

やがて、もうよろしいと、スコールの声に、テイイ事務長がふ
りかえってみると、そこには顔全部が灰色の髭ひげにうずまつたとい
いたいくらいの人のよい老艇長がにこにこして立っていた。

「あッ」と事務長はおどろいた。

「ふふふ、これならおれだという事はわかるまい。重宝ちようほうなマ
スクがあるものだ」

このへんでおさっしがついたことであろうが、快速ロケットの
コスモ号で今ここについたスコール艇長こそ、社会事業家のガス
コ氏によく似ており、またスミス老人が宇宙の猛獣使いと呼んだ
怪人物にもよく似ていた。

いや似ているどころか、まさにその人であったのである。

素性すじようははつきりわからないが、どうやらすごい悪漢あつかんらしい。

救援隊の第六号艇を爆破させたのも、またほかの僚艇に時限爆弾
をなげ入れていったのも、この人物のやったことである。

何故なにゆえに、かれスコール艇長は、そのようなひどいことをする

のか。またかれのいまかぶっている仮面マスクの下には、どんな素顔があるのか。それはともに一刻もはやく知りたいことではあるが、もうすこし先まで読者のごしんぼうをお願いしなくてはならない。

さて、朝の午前九時から、ギンネコ号は針路をぎやくにして、救援艇隊の主力が向かってくるほうへ引つかえしていった。

「なあんだギンネコ号はやくそくどおり、ちゃんと引つかえしてきたじゃないか」

テッド隊長も、気ぬけがしたように、近づくギンネコ号の姿を見て、指先をぴちんと鳴らした。

「きようはひとつわしがギンネコ号へでかけて、れいの空間浮標の件をかたづけしてしまう。帆村君、きみもついてきてくれ」

なにも知らないテッド博士は、そんなことをいって、きげんがよかった。その日こそ、じつは驚きょうてんどうち天動地の一大事件が救援艇隊のうえに襲いかかろうとしているのに、まだ誰もその運命に気がついていないらしい。あぶない、あぶない。

宇宙線レンズ

ギンネコ号の事務長テイイは、じぶんの机のまえで、うつらうつらしていた。昨夜らいのガスコ氏いや、いまではスコール艇長

のもつてきたふるまい酒をのみすぎて、ねむくてたまらないのだつた。

「事務長。ちよつとこつちへきてもらいたいね。相談したいことがある」

いきなり戸があいて、ひげだらけの老人がはいつてきた。スコール艇長だった。

「はい。ただ今」

事務長テイイは、ともかくもへんじだけをして椅子からとびあがつたが、よろよろとよろけて足を机の角かどでうって、ひっくりかえった。

「事務長。だらしがないね。きようはさつそく重大行動をとらね

ばならないのに、そんなふらふらじや困るね。よろしいわしがすぐなおしてやる」

そういったかと思うと、スコール艇長はいきなり事務長のえりがみをつかんでかるがると宙吊りにした。ちゆうづそしてとなりの浴室の戸をあけて、中へつれこんだ。

それからしばらく、生理的なテイイの声がげえげえと聞こえていたが、そのあとで水がばちやばちはねる音がした。と、戸があいて艇長が事務長を猫の子のようにぶらさげてあらわれ、長椅子のうえにほうりだした。

テイイが死にかかっているようにぐったりしていると艇長はどこから取り出したか、いばらの冠かんむりみたいなものを手に持って事務

長の頭にかぶせた。そしてその冠のうえについている目盛盤をうごかした。すると事務長は、電氣にふれたように、ぴくツとなり、棒立ちになつてとびあがつた。かれの頭髪は箒ほうきのように一本一本逆立ち、かれの目は、皿のように大きく見ひらかれている。

「あ、あ、あ、あ、あッ」

かれは唇をぶるぶるふるわせたあとで大きいくしやみを一つした。するとかれの頭から冠がぼんとはねあがつた。スコール艇長はそれをすばやくじぶんの服の中にかくしてしまった。

「ふふふ。人間というやつは、あわれなもんだて、脳や神経の生理について、なんにも知っていない。ふふふ」

艇長ははや口で、ひとりごとをいった。

「艇長、いまなにかおっしゃいました」

「おお、きみの気分はよくなったかと聞いたんだ」

「そうでしたか。おかげさまで、気分がはつきりしました」

事務長は、そういつて満足してしまった。もしスコール艇長のあのひとりごとを、他の人間が聞いていたら、さぞふしんに思ったことであろうに。

そこで事務長は、怪艇長のうしろにしたがつて、艇長室へはいった。ふたりは、せまいが、ふかぶかとした弾力をつよい椅子に腰をおろして向きあつた。その椅子は重力に異常のあつたときに、からだを椅子にしばりつけるための丈夫なバンドがひじかけのところに付いているものだった。

「さて、事務長。あのテッド博士のひきいる残りの九台の救援口ケツトは、すこしもはやく破壊してしまわなくてはならない」

「はあ、なるほど」

あんまりはつきりした話なので、さすがの古^{ふるだぬき}狸のテイイ事務長も、かந்தんな返事しかいえなかった。

「わしがこんど持ってきた器械に、宇宙線レンズというのがある。これは太陽をはじめ、他の大星雲などからもとんでくる強烈な宇宙線を、みんな集めてたばにするんだ。そうしてたばにした宇宙線を、地球じようで一番かたい金属材料としてしられているハフニウムG三十番鋼^{こう}にかけると、どんな場合でも、まず百分の一秒間に、まっ赤に熱し、たちまち形がくずれてどろどろになり、そ

してつぎの瞬間に全体が一塊のガス体となつて消え失せる。どうだ、宇宙線レンズはすごい力を持っているだろう」

「へへえッ、それがほんとうなら、大した破壊力を持っていますね」

「破壊力だけで感心してはいけない。またかなり遠方まできくんだ。原則からいうと、無限大の距離でもとどくんだが、まだすこし集めて一本にする技術が完全というところまでいっていないので、まず、四、五千メートル以内なら有効にはたらく」

「四、五千メートルまでなら、じゅうぶん使い道がありますよ。やくに立ちます」

「やくに立たないものなんか、わしは持つてこない。そこでだ、

この宇宙線レンズの力を借りて、きょうはテッド博士のひきいる九台のロケットを全部焼いて、九つの煙のかたまりにしてしまおうと思うんだ。しっかりやってくれよ」

「きょうのうちにですか。それはどうも」

と、事務長が艇長の気ばやいのおどろいてるおりしも、外から電話がかかってきた。

「艇長ですか、テッド博士外一名が、これから二十分後に、こつちへきて、面会したいといって無電をかけてきました。どう返事をしましょうか」

「ふん、そうか」と艇長はちよつと考えて、

「わしのほうからうかがいますといつてくれ。なにしろきのうは

失礼しましたから、きようはわしのほうがでかけますというんだぞ」

艇長は、電話を切ったあとで、

「ちようど、都合がいい。これから向うへ行って、相手のようすをよく見てきてやろう。うまくゆけば、テツドのやつ頭を変に
してやろう」

と、平気な顔で、そういった。

いよいよ救援隊にとってゆだんのならない事態になってきた。

あやしい、あやしい。

猫かぶりの客

救援隊ロケットの司令艇では、とつぜんのお客さんをむかえる準備にいそがしい。

なにしろあの傲慢で、やくそくもなんにも平気でやぶって、かってなふるまいをしてはばからないゴロツキ艇ギンネコ号の首脳部が、きのうとはうってかわり、わざわざこつちへくるといふのであるから、テッド隊長以下の面くらったのはあたりまえだ。

「ギンネコ号から、形の小さいロケットが発射されました。大きくなわって、こつちへ近づきます」監視員が、艇内へ放送した。

なるほどテレビジョンの幕まく面めんに、それがうつつっている。石油やガソリンを積む貨車に似たロケットだった。背中に、こぶのよ
うなものがとびだしているのが、かわっていた。あつというまに
三度ばかり司令艇のまわりをまわったが、あとになるほどスピー
ドをおとして、四回目には母艇ぼていギンネコ号の探照灯をうけて胴どうな
中かをきらきら輝かしながら、司令艇の出入り口のうえに、こぶ
のよなものががすいついていた。あざやかな投とうび 錨よう ぶりだ。
それから五分すると、そうほうの打ち合わせがうまくいって通
路が開かれ、ギンネコ号の乗組員が五名、どかどかと司令艇のな
かへはいってきた。

先発は、ひげの老艇長スコール。そのあとに長身でやせぎすの

事務長テイイがらくだのような顔をこうふんにふりたててしたがつた。そのあとに空気服とかぶとをつけた武装いかめしい三人の部下がついていた。三人とも目ばかりぎよろつかせ、みような形の機銃らしいものをかまえている。

テッド隊長は、副隊長のロバート大佐をしたがえて出迎えた。そのうしろにポオ助教授の神経質な顔と帆村莊六の面白い顔とがのぞいていた。

「わしがギンネコ号の艇長だ、テッド博士はあなたかね」
スコール艇長は、ぶつきら棒にものをいう。

「わたしがテッド隊長です。よくおいでくださいました。部下の一部を紹介します」

と、テッド博士は礼儀ただしく副隊長以下の接伴員たちを紹介した。そして、こちらへと客間にみちびいた。

帆村はスコール艇長を迎えたときに、大きいおどろきにぶつかった。ギンネコ号の艇長といえば、かれがなじみの鴨艇長だとばかり思っていたのに、それが意外にも、別人の髭もじやの老人だったので、もうすこしで「あッ」と叫ぶところだった。

その帆村は、一番おくれで客間にはいった。そのまえにかれは、いつも影のようにかれについている三根夫少年の手をにぎり、指先を使ってなにごとかを三根夫に伝えたのであった。

三根夫は、帆村からの信号をりようかいすると、さつと青くなり、それからこんどはぎやくに赤くなった。そして目立たないよ

うに帆村のそばをはなれて、どこかへ行ってしまったのである。

客間では、テッド博士が、スコール艇長にむかい、きのう部下たちが訪問して親切にあつかわれたことについて礼をのべ、また目下の運命の知れない『宇宙の女王^{クイーン}』号について情報をもたらしたことを感謝した。

「なあに、助けあうのはあたりまえのことだ。ましてや外に生物もないこの宇宙のはてにおいて、人間同志はしたしくするほかない。仲よくしましょう」

スコール艇長のことばはよかった。しかしかれの本心からでているかどうか、うたがわしい。

これにたいしてテッド隊長は、どこまでもまじめに相手に礼を

いった。そしてこつちもギンネコ号のためにできるだけのべんぎをはかりたいが、もし水や食糧品でもたりなければ、もつとおゆずりしてもいいといった。

「そんなものは、じゆうぶん持っている。おお、そうだ。協力で思い出したが、わしはこのロケットのなかを見たことがない。いきかいだ。これから案内して、見せてもらいましょう」

ロバート大佐が、スコール艇長の申し出にあるふあんをおぼえ、テツド隊長に注意をしたとき隊長はにっこり笑って、むぞうさにスコール艇長に答えた。

「ええ、それはおやすいご用です。さあわたしがご案内します」といって立ちあがった。

これはたいへんと、ロバート大佐が隊長に耳うちしようとするのを、しっかり抱きとめた者があつた。ふりかえると、それは帆村だつた。

「いいのです。そのままにしてお置きなさい」と、帆村は目で大佐に知らせた。

そこでギンネコ号の五名のお客さんを案内して、テッド博士をはじめ、ロバート大佐、ポオ助教授、帆村の四名が、その部屋をでた。まず操縦室から案内することになった。

スコール艇長は、ひげだらけの顔を上きげんにゆすぶりながら、上下左右へしきりに目をくばり、このロケットの構築こうちくぶりをほめるのであつた。それは、かりそめにも害がいしん心のある人物に見え

なかつた。

しかし帆村はもちろん、ロバート大佐もポオ助教授も、ゆだんはしていなかつた。だがこの三人がスコール艇長、じつは怪人ガスコ氏の兇きようぼう暴なる陰謀を知りつくしているわけではないから、危険は刻一刻とせまってくる。

三根夫の活躍

艇内を案内されてスコール艇長のガスコ氏が、とくに目を向け

ていたのは、このロケットの壁の厚さと材料と、その構造についてであった。宇宙レンズで、強力なる宇宙線の ほんりゆう 奔流をこのロケットにあびせかけたとき、どうなるかをひそかに診察しているわけだった。

（ふむ。だいたいわかったぞ。あとは、一番艇内でたいせつな機関室の金属の壁のぐあいを調べることができれば、それで下調べはすむ）

怪人ガスコは、ほくそ笑んで、足をいよいよ機関室にうつした。（よし。この部屋がすんだら、あとはすきを見て、まえにゆくこのテッド博士の脳を電波でかきみだしてやろう。ふふふ、もうしばらくだて……）

一同の一番最後から、帆村が機関室にはいった。テッド博士は、そこにならんでいるたくさんの器械器具について非常にくわしく説明をはじめた。

「ああ、どうも暑い。この部屋は暑いですなあ」

そういったのは、テイイ事務長で、ハンカチをだして、額に玉のようにうかびでた汗をぬぐうにいそがしい。

事務長の外のお客さんは、そんなに暑がっていない。スコール艇長も、平気である。

このとき三根夫少年は、たいへんいそがしかった。かれは作業服を着て、一段高い配電盤のまえに立って、一同のほうに背中を見せ、しきりに計器を見ながらハンドル型の調整器をまわしてい

るのだった。誰が見てもそうとしか見えないが、じつは三根夫は反射鏡でお客さんたちのほうを見ながら、エンジンの間にすえつけてある赤外線放射器から、かなり強烈な熱線をだして、スコール艇長の顔へあびせかけているのだった。その熱線のおこぼれが、うしろについているテイイ事務長にあたり、それで事務長は「暑い、暑くてかなわん」とさわいでいるのだ。

しかるにスコール艇長は、平気のへいぎでテッド博士の話に注意力のはんぶんをさき、のこりの注意力を機関室の壁や床や天井のほうへそそいでいるのだった。——と、とつぜんみようなことが起こった。スコール艇長の長い髯ひげがばさりと下に落ちた。つづいて右の頬ひげが脱落した。それから右の口ひげも、顔からはな

れて足許あしもとに落ちた。

赤外線のりの熱で、つけひげの糊がとけはじめたのである。ひげの下から現われた顔は、画にも文章にもかけない醜悪な顔だった。どんな悪魔もこれほどのすごい顔を持っていない。

「おや、ひげがこんなところに落ちている」

と事務長テイイが、やっと気がついた。そしてぎくりとしてスコール艇長に追いついて、その顔をのぞきこむと、さあたいたへん、秘密じがにしておかねばならないはずの恐ろしい地顔じがおがはんぶんほど現われているではないか。

「艇長。あなたの顔が——」

と、テイイの叫ぶ声に、はっとしてスコール艇長は気がついた。

かれは「しまった」とうなると、手をポケットに突込み、それから緑色のマフラーをつかみだし、くるくるツと自分の顔にまきつけた。

まえばかり向いて説明をつづけていたテツド博士が、このとき気がついて、うしろにふりむいた。

「どうかされましたか。おや、あなたはガスコ氏！」

博士は、ガスコ氏をいいあてた。が、博士の声は、あんがいあわてていなかった。あわてているのは、当の怪人ガスコだった。

「なにをいう。わしはガスコなんて者ではない」

緑色のマフラーのなかで怪人の口が大きく動いた。と、とつぜんかれは、服の下から、針金を輪にしたようなものを取りだし、

頭上高くあげた。そしてそれを高く持ったかれの右手はねらいをつけるためか前後へゆれた。その輪こそ、かれがテッド博士の顔めがけて発狂電波を投げかけようとするおそろしい発射器であった。と、かれの左手が服の下へはいった。そこには電波をだすためのスイッチがあつた。

かれはそのスイッチをおした。ああ、博士があぶない。

ほえる怪人

とつぜん、この機関室が鳴動した。

電灯がすうーと暗くなつたかと思うと、天井につるしてあつた二つの大きな金属球の間に、すごい音を発して、ぴかぴかツと電光がとんだ。

その電光の一部は、ガスコ氏が高くさしあげた輪の上にもとんだ。

「あッ」

と叫んで、ぱったりたおれた者がある。電光のとびつく輪を持つて立っている怪人ガスコのうしろにいた事務長テイイが、悲鳴とともにたおれたのだ。

たおれたと思つたテイイは、すぐはね起きた。そしてげらげら

と、とめどもなく笑いだした。

「ちよッ、二度目の失敗だ」

いまいまして、怪人ガスコは舌打ちして、電波をだす輪を足許へなげすてた。

すると、いままで部屋じゅうを荒れくるっていた電光がぱつたりと停り、電灯がもとのように明かるくなつた。

「わははは。これはいいおもてなしを受けたもんだ。稲妻いなずまのご

ちそうとは、親善の客にたいして無礼きわまる」

電波が発射されるまえに、三根夫が大放電のスイッチを入れ電光をとばしたので、さしもの電波もテッド博士のほうへは向かわず、かえってあべこべに後へ吹きつけられ、テイイ事務長の頭を

おかして、かれの頭を変にさせたのであった。

「おかえりになる道は、こつちであります」

と、ロバート大佐が怪人ガスコにたいし、わざとていねいにいつて腕をのばした。

「ふん。わしは礼をいう。いずれ後から、たんまりお礼をするよ。おい、事務長。みつともないじゃないか。さあ、早くこい。引きあげだ」

怪人ガスコは、げらげら笑いの事務長を横にして抱えると機関室をでてどんどん走りだした。そのあとから三人の空気服を着た部下が、おくれまいと追いかける。

帆村とポオ助教授も、それにつづいて走っていく。

あとにはテッド博士とロバート大佐とが残っていて、顔を見合
わせた。

「ロバート君。よくまあだんどりよく、あいつの仮面をはぎ、そ
してあいつの害心を叩きつぶしてくれたね。お礼をいう」

「幸運でした、隊長。帆村君とポオ君とそれから三根夫少年が、
すぐれたチームワークを見せてくれたのですよ。しかし、あれは
やっぱりガスコ氏ですかな」

「それにちがいないと思う。あの緑色のマフラー、あの口のきき
方、顔を見せないで、変装してきたことなど、ガスコ氏にちがい
ない。しかしふにおちないのは、飛行場に残ったはずのガスコ氏
が、いつの間にギンネコ号にはいりこんだのか、それがわからな

い。

「怪しい人物ですね。あれはいったいどうい^{すじよう}う素性の人ですか」
「それは帆村君にも調べさせたんだがはつきりとはわからない。
わかつていることは——」

といいかけたとき、警^{けいれい}鈴のひびきとともに壁の一方にとりつ
けてあつたテレビジョンの幕面に本艇をはなれてゆく怪人ガスコ
の乗ったロケットがうつりだした。

「隊長、ごらんなさい」と、高声器の中から帆村の声が聞こえた。
「スコール艇長は、かれの部下のひとりだが、最後に乗りこもうと
して片足をかけたときに艇をだしたので、かわいそうに、かれは
ハッチから外へほうりだされて、あれあれ、あのとおり宙に浮い

て流れています」

「おお、かわいそうに。非常警報をだして僚艇から救助ボートをだしてやれ」

テッド隊長はむずかしいとは思ったが、いやなギンネコ号の乗組員ながら、ひとりの人命を救うために、重大命令を発した。

怪人ガスコは、ぶんぶん怒って、ギンネコ号にもどってきた。

出迎えた艇員の誰もが怪人ガスコのスコール艇長のそばに寄りつけない。

ガスコは、艇長室へはいった。

それからかれの部屋から、ベルがたびたび鳴った。入れかわりたちかわり、いろいろな人が呼ばれたが、いずれも頭や顔に大き

なこぶをこしらえて、ほうほうのていで艇長室から逃げだしてきた。

「ちよツ。やくに立つやつはひとりもない。これつきりで、わしがぐずぐずしていた日には、女王クイーンから、どんなお叱りをうけるか、たいへんなことになる。こいつはなんでも早いところ、すぐさま宇宙線レンズで、テッド隊のロケット九台を焼き捨ててしまふにかぎる。そうだ。それしか手がない」

怪人ガスコは、卓上のマイクを艇内全室へつなぐと、それに向かって命令のことばをどなった。

「砲員の全部は、宇宙線レンズのあるところへ集まれ。宇宙線レンズ係りは、すぐ使えるようにいそいでレンズを艇の外へ突きだ

せ。わかっているだろうが、これからテッド隊のロケットをぜんぶ焼きはらうんだ。わしはすぐ、そこへいく。それまでに用意をしておけ」

マイクのスイッチを切ると、怪人ガスコは両の拳こぶしでじぶんの胸をたたきわらんばかりに打った。そしておそろしい声でうなった。それはどうしても野獣の叫び声としか思われなかった。

大だい異い変へん

ギンネコ号では怪人ガスコの命令により、宇宙線レンズ砲が、むくむくと動きだし、艇外へぬつと砲門をつきだした。

あとは、ガスコの「焼け」という号令一つで、このレンズ砲が偉いりよく力を発し、たちどころに救援隊ロケット九台を火のかたまりとしてしまうことができるのだ。

それぞれの宇宙線レンズ砲についている砲員たちは、ガスコの号令をいまやおそしと待ちうけた。

ガスコは、レンズ砲の用意のできたという報告を受取った。よろしい、いまやテッド博士以下を赤い火焰かえんと化せしめ、『宇宙の女王』クイーン号の救援隊をここに全滅せしめてやろうと、かれは覆面の間から、ぎよろつく目玉をむきだし、相手をにらんで「焼け」

という号令をマイクにふきこむために、その方へ口を寄せた。

ああ、テッド博士以下の救援隊員の生命は風前の灯である。全滅まえのたった一秒まえである。ガスコが、のどから声をだせば、すなわちテッド博士以下の生命はおわるのだ。

「ややッ！」

おどろきの叫び声！ 叫んだのは、余人でない、怪人ガスコだった。

かれは両手でじぶんの大きな頭をおさえ、はあはあと、あらい呼吸いきをはずませた。

「ちえッ、おそかったか……」

と、ガスコが二度目のおどろきを発したそのときには、ギンネ

コ号の全体はうす桃色の光りで包まれていた。

そればかりか、艇の外へつきだしたばかりの宇宙線レンズが、まるで飴あめのように、だらんと頭をさげて曲がり、それからそれはろうろ蟻がとけるようにどろどろととけて、なくなってしまった。なんというふしぎであろう。

これでは、怪人ガスコがものすごい声をだしてぎんねんがるのも、むりはない。いったいだれが宇宙線レンズをこんなにかしてしまったのであろうか。いや、そればかりでない。ギンネコ号をうす桃色の光りが包んだときから、ギンネコ号は航行の自由を失ってしまったのだ。つまりいくらかじ舵をひねっても操縦はきかなくなり、いくらガス噴射を高めてみても前進しなくなったのだ。

怪人ガスコは、頭をおさえたまま、どうと艇長室の床にたおれた。

このギンネコ号の異変は、救援隊ロケットがやったことであろうか。

いや、そうではないようだ。というわけは、テッド博士のひきいる救援隊ロケットにおいてもギンネコ号の場合にゆずらない異変がおこっている！

九台のロケットは、やはり艇全体がうす桃色の光りでつまれていった。

操縦がさっぱりきかなくなり、前進もできなくて、まるで宇宙の暗礁あんしやうへのりあげてしまったようなことになった。

「故障！ 原因不明！」

「航行不能におちいった。原因不明」

そういう報告が、僚艇から司令艇のテッド博士のところへ集まった。

ところがその司令艇も、ふしぎな故障で、航行不能におちいつているのであった。しきりに尾部びぶからガス噴射をしているんだが、スピード速度計の針はじつと一所に固定してしまつて、一目盛も前進しない。

「これはきみようだ。こんなに猛烈にロケット・ガスを噴射しているのに、すこしも前進しないとはおかしい」

「外力がこのロケットにくわわっているわけでもないのに、完全

に動かなくなるとはおかしい」

「しかしそれでは自然科学の法則にはんする。やっぱり外力が本艇にくわわっているのではないか」

「だってきみ、そんな外力を考えることができるかね。本艇のロケット推進力を押しかえしてゼロにするとという外力が、どうしてもあるだろうか。外を見たまえ。本艇の正面も尾部も異常なしだ。

他のロケットで、本艇を押しもどしているようすなんかはないものかね」

「ふしぎだ。わけがわからない。いったいどうしたんだろう」

司令艇の機関部員たちは、あらゆる場合を考えて、この謎を解こうとしたが、謎はさっぱり解けない。

テッド博士も、さすがにこれにはこままって、腕をこまぬいてうなるばかりだった。

（この異常現象はどういうわけで起こったか。それがわからないうちは処置なしだ）

博士は、その異常現象が、九台の救援ロケットの破壊をすくつたことさえ知らなかった。

「あッ、ふしぎだ。空から星が消えていく。隊長、あれをござんなさい」

叫んだのは帆村莊六だった。

操縦席のまえの硝子窓ガラスをとおして、無数の星がきらきら輝いているひろい大宇宙が見えていたが、その星が、左のほうからだん

だん消えていくのであつた。まるで大きなひさしが天空を横にうごき、星の光りをかくしていくようであつた。

すわ、大異変！

暗黒化

「おお、なるほど。星の光りがだんだん消えていく」

テッド博士もおどろいた。いったい星の光りをさえぎっているものはなにか。

「なにかしらんが、大きなひろいものが星と本艇の間にあつて、星の光りをさえぎつていくのですね」

帆村の声が、いつになくうわずつていゝる。かれはなかなかおどろかない男だが、きょうばかりは大おどろきの中にほうりこまれてゐるらしい。

「そうだ。通信当直。レーダーで調べてみるんだ。あのおそろしいじやまものはいったい何だかわかるかね。あれは本艇から、どのくらいの距離にあるのか、すぐ調べてくれ」

テッド博士は叫んだ。

「だめなんです、隊長」

「だめとは何が？」

「今、ご報告しようと思っていたところですが、いますこしまえから、とつぜん僚艇との連絡通信が不可能になりました」

「やッ」

「こつちからいくら電波をだしても、僚艇から応答なしです。じつはレーダーもはたらかしてみました。ところが、これもだめなんです。つまり本艇の電波通信はさっぱり用をしなくなりました」

「レーダーも応答なしか」

「はい。困りました」

「困ったね。そしてわけがわからん。おお、ポオ助教授。きみにわかるかね、本艇の電波通信が用をしなくなった理由が……」

テッド博士は、そばにポオ助教授が立っているのに気がついて、

そういつてきいた。

「ちようど、非常にひどい磁気嵐じきあらしにでもあたったようですね。しかしいまのところぼくにも本当のことはわかりません」

助教授も、さじをなげた。

その間にも、帆村は、星の光りが消えていくありさまをじっと見まもっていたが、このときおどろきの声を発して、隊長テッド博士に呼びかけた。

「隊長。もうしばらくのうち星の光りは全部消えてしまいそうです。残っているのはあそこだけで、ふしぎだなあ、残っている星の群れは、円形の中にはいつています」

「なるほど。これはまた奇妙だ」

「ほら、ごらんなさい。円形の窓から眺めるような星の光りが、だんだん小さくなつていきます。窓がだんだん小さくしぼられていくようだ。ポオ君、見ていますか」

「見ているとも、帆村君」と助教授は帆村の肩へそつと手をかけた。

「まったくふしぎだね。こんな異変が天空に起こるといふ報告を、これまでに一度も読んだこともなければ、聞いたこともない。じつにふしぎだ。しかしこれは夢ではない。われわれは皆で、さつきからこの天の涯はての異変をたしかに見たのだ」

「ねえ帆村のおじさん。ぼくは、とても大きい黒い袋のなかに包まれていくような気がします。おじさんは、そう感じないですか」

さつきから、だまってこの異常なできごとを見まもっていた三根夫少年が、このとき帆村の服のはしをひいてこういった。

「なに、黒い袋のなかに包まれていくようだ。……うまい。ミネ君。うまい表現だ。うまいいいあらわしかただ」

と、帆村が感心していった。

「なるほど、そのような感じだ」

隊長も、うなずいた。

「ああ、黒い袋の口が、ついに閉まる。みなさん見ていますか」

「見ているとも……」

一同は、いいようのない気味わるさをもって、てんくう天空にのこされた最後のせまい星の光りが消えていくのを見まもっている。

「あ、消えた」

「とうとう消えた。完全な暗黒世界だ」

「暗黒の空間なんて、はじめて見知ったよ。ああ、おそろしい」
「大宇宙が、消えてしまったんだろうか。地球へもどるには、どうすればいいのだろうか」

恐怖のことばが人びとの口からほとばしった。こんな異変は、テッド博士も経験したことがなかった。

「ああ、もうだめだ。本艇の噴進もきかなくなり、昼の光りさえ見えない暗黒世界へ閉じこめられてしまったのだ。わたしたちは、もう何をする力もない」

「そうだ。われわれを待っているものは燃料の欠乏だ。食料がな

くなることだ。そしてみんな餓死がしするのだ。ああ、おれは餓死するまえに頭が変になりたい」

もはや『宇宙の女王』号の救援どころではない。じぶんたちのうえに、おそろしい死の影がさしているのだ。

もうじぶんを救うみちはないか。

奇怪なるこの大暗黒の秘密は何？

真相不明

司令艇の操縦席が、会議場になってしまった。

最高幹部と、本艇内において、科学技術をたんとする十二人の博士などが集まって、これからどうしたらよいか。そしてこの奇怪な現象はなにごとであるかの協議をはじめた。

帆村もこれにくわわっていた。三根夫もいた。三根夫は帆村からいつけられて会議を聞きながらも、本艇の周囲にたいしとくに注意をしていることになっていた。少年は、テレビジョンの六つの映写幕へ、かわるがわるするどい視線を動かした。

「まず、いまわれわれがどういう目にあっているんだか、意見をのべてもらいたい」

隊長がいった。

「宇宙塵うちゅうじんのかたまりのなかに突入したのではないかと思ひます。だから星の光が見えなくなつた」

博士のひとりが意見をのべた。

「いやいや、そうでないと思う。宇宙塵のかたまりというものがあつて、その中へ突入したものなら、本艇はその宇宙塵につきあたるから、手ごたえが感じられるはずですよ。しかしそんな手ごたえはないではありませんか。また宇宙塵の中といえども、本艇は噴進することができずであるが、実際本艇は一メートルも前進することができないのです。ですから宇宙塵の考えは正しくない」

「では、きみは何と考えるのですか」

「わたしは暗黒星^{あんこくせい}へ突っ込んだのではないかと思えますよ」

「それはおかしい。暗黒星のなかへ突っ込んだものなら、そのときにはげしい衝突が感ぜられ、本艇は破壊するでしょう」

「いや、暗黒星には、ねばっこい液体からできているものもあると思うのです。そういうものの中へ突っ込めば、かならずしも破壊が起こりはしない」

みんなの議論がかっぱつになった。

「諸君は、もつとも大切なことを見のがしておられる。それは星の光りが消えはじめるまえに、本艇はうす赤い光りで包まれていることだ。あの光りはなんであろうか。あのふしぎな光りの謎をまず解かなくてはならない」

「おお、それはいいところへ目をつけられた。きみは、どう解くのか」

「わたしの考えでは、本艇は、なにかの外力をうけて、あのきみのような放電現象となつたのであろうと思う。その外力はなにものか、それはまだわかつていないが、ともかくもその外力は、非常に大きな力を持っていると思われる。あのきみのような放電現象によつて、本艇の外がい廓かくのうえには、黒いペンキのようなものが塗られた。そのために外が見えなくなつた。この考えはどうですか」

「なるほど、その説によると、外がい界かいが見えなくなつたことは、説明できるが、しかし本艇がガスを噴射しているにもかかわらず、すこしも前進しないのは何故かという説明がつかない。それとも、

このうえにもっときみは説明をくわえますか」

「その黒いペンキのようなもの——それは非常にねばねばしたもので、われわれにはちよつと想像もできないが、それはしつかり本艇を宇宙のある一点へとめているのではなからうか。つまり蠅はえがとりもちにとまって動けなくなつたとおなじように、本艇は、そのねばねばしたまっ黒いものに包まれ、そして動けなくなつたのではないですか」

「その考えはおもしろいが、しかしそれは想像にすぎない。想像ではなく、もつとはつきりした事実をつかまえ、そのうえに組立てた推理でなくてはならない」

「ですが、地球のうえならばともかく、このように宇宙の奥まで

入りこんでいるのですから、ここではだいたんなものさしで測る必要があります。地球のうえだけで通用するものさしで測っていったんではだめだと思います」

「そういう議論はあとにして、もっと実際の問題を論じてもらいたいね」

と、テッド隊長は注意した。

すると一同は、だまつてしまった。

どう解こうにも、さっぱり手がかりがないとは、このことだ。さすがの救援隊のちえ袋といわれる博士たちも、いいだすことがなくなった。

「なにか考えをいつてもらいたい」と、隊長はさいそくした。

しかし一同は、たがいに顔を見合わすばかりだった。

やっと口を開いた者があつた。それは帆村莊六だった。

「さつぱり手がかりのないことを、いくら論じてみても、むだだと思ひます。それよりはもうすこし時間のたつのを待たうえで、なにか新しい手がかりのみつかるのを待ち、あらためて論ずることにしてはどうでしょうか」

「まあ、そういうことになるね」

隊長は、帆村の説にさんせいした。

「では、しばらく待とう。会議はひとまず解散だ」

そういつて隊長テッド博士が椅子から立ちあがったとき、三根夫がとつぜん大声で叫んで、テレビジョンの幕面を指した。

「あッ、光った棒のようなものが、下のほうからこっちへ伸びてきますよ。あれはなんでしょう」

光る
怪塔かいとう

光った棒のようなものが、下のほうからこっちへ伸びてくるとは何事であろう。

三根夫少年が指すテレビジョンの映画へ、隊長以下の視線があつまる。

ほんとうであつた。たしかに光る棒が下方から伸びあがつてくる。春さきの筍たけのこが竹になるように伸びてくるのだつた。

それまでは四方八方が暗黒だつたから、テレビジョンの幕面にはなんの明かるいものも見えなかつた。ところがいま、三根夫の発見により、はじめて艇外に、目に見えるものが現われたのである。

「なんだろう。やっぱり棒かな」

「棒ともちがう。割れ目のようでもある」

「割れ目？ なんの割れ目」

「割れ目ができて、となりの空間のあたりが割れ目からさしこむと、あのようになるではないか」

「なるほど」

「ちがう。光りの棒でも割れ目でもない。光る塔だ」

「光る塔！ なるほど塔みたいだ。そうとう大きなものだ。しかし宇宙のなかに塔があるとは信じられない」

「だめだ、そんな風に、地球上だけで通用する法則だけにとらわれていては、この大宇宙の神秘はとけないですよ」

「また、さっきの議論のむしかえしか」

「いや、そうとつてもらっては困る。とにかくわれわれは、頭のなかを一度きれいに掃除しておいて、そのきれいな頭でもって、われわれの目のまえに次々にあらわれる大宇宙の驚異きょういをながめる必要がある。そうでないと、その驚異の正体を、はつきり解く

ことができないからねえ」

「おやおや、すてきに大きい塔だ。どう見ても塔だ。わたしは気がたしかなのであろうか」

白光につつまれたその巨大なる怪塔は、下からぐんぐん伸びあがってきてやがて本艇と同じ高さにたっした。本艇の窓という窓には、艇員の顔があつまり、びっくりした顔つきでその光る怪塔を見まもる。

「帆村のおじさん。あの塔はなんでしようか」

三根夫は、このときやつとわれにかえり、帆村に質問をかけるほどのよゆうができた。

「はつきりはわからないが、あれは相手がわれわれに、一つの交

通路を提供しようというのじゃないかなあ」

「なんですって」

三根夫にとっては、帆村のいうことがさっぱりわからなかった。交通路の提供だの、相手だのというが、なんのことだろう。

「つまりだ、相手は、われわれに会いたいのだ。会うためには、あのような塔の形をした交通路を、本艇のそばまでとどかせてやらないとはならない、相手はそう考えたんだろう」

「塔が交通路なんですか。どうしてですか」

「もうすこし見ていればわかるのではないかなあ。ほら、塔の先から、こんどは横向きに、籠かごのようなものが伸びてきたではないか」

「あッ。ほんとだ」

伸びるのがとまった塔のてっぺんは、すこしふくれていたが、そこから籠のようなものが横向きにぐんぐん伸びて本艇の方へ近づいてくるのであった。

「おそろしい相手だ」

帆村が、ひとりごとをいった。

それを聞きとめた三根夫は、

「帆村のおじさん。さつきから、おじさんは相手がどうしたとかいいますがね、相手とはだれのことですか」

「あの塔の持主のことさ。ああして塔をぐんぐんと、われわれのほうへ伸ばしてよこすのはだれか。それがおじさんのいう相手さ」

「だれなんですか、その『相手』は」

「本艇をすっかり暗黒空間でつつんでしまった『相手』だ。本艇の電波通信力をなくしてしまった『相手』だ。いくら本艇が噴進をかけても、一メートルも前進させない『相手』だ。これだけいえば、ミネ君にもわかるだろう」

「わからないねえ」

三根夫は、ため息とともにそういった。

「わかりそうなものではないか。宇宙を快速で飛ぶ力のある本艇とりこを捕虜にすることができる『相手』だ。ただ者ではない。もうわかったろう」

「あッ。すると、もしや……」

三根夫はがたがたとふるえだした。

帆村がなにをいつているか、ようやくわかってきた。が、もしそれがほんとうならこれは大変なことだ。

「やっとわかったらしいね」と帆村は青白い顔にかすかな笑みをうかべた。

「ミネ君われわれは本艇とともに、ついに怪星ガンにとらえられたのだ。もはやわれわれは、怪星ガンの捕虜でしかないのだよ」

怪星ガンの捕虜になってしまった！ ああ、なんとという意外、なんとというおそろしさよ。テッド博士以下の救援隊員の運命は、これからどうなるのであろうか。おそるべき怪星ガンの正体は何？

怪星の正体

怪星ガンの捕虜とりこになつてしまつたというのだ。

これが、日ごろ深く尊敬し信用している帆村莊六のことばであつたが、三根夫は、こればかりは、すぐに信用する気になれなかつた。

なぜといつて、あまりにだしぬけすぎる。とつぜん『怪星ガン』がとびだしてきて、しかもじぶんたちは、そのなかにもはやとり

こになつているといふのだ。

そのまえに三根夫は、怪星らしいものの片影へんえいすら見なかつた。だから、その怪星のとりこになつたなどといわれても、さつぱりがてんがいかない。それに、星がロケット隊をとりこにするなんて、そんなことができるのであろうか。いったい、どんなにして、それを仕とげるのだろうか。

もつとも、わがテッド博士のひきいる救援艇ロケット隊が探している『宇宙の女王クイーン』号が、さいしよに打つた無電によると女王号もどうやら怪星ガンのとりこになつたらしくは思われるが。

三根夫の頭のなかには、花火が爆発したときのようなにぎやかさで、たくさんの疑問が入りみだれて飛ぶ。

「帆村のおじさん。怪星ガンというやつは、どこに見えるのですか」

三根夫は、ついに質問の第一弾をうちだした。かれの唇は、こうふんのために、ぴくぴくとふるえている。

「どこに見えるといって、われわれは怪星ガンの腹の中にはいつているんだから、外を見て見えるものはみんな怪星ガンの一部分だと思うよ。これはいまのところわたしだけの推理だがね」

帆村莊六の顔は、死人の面のように青く、こわばっている。

「では、あの塔みたいなものも、怪星ガンの一部分なんですか」

「それはたしかだと思う」

「でも、へんですね。星というものは、ふつう表面が火のように

燃えてどろどろしているか、あるいは表面が冷えて固まっているものでしょう。ところが、怪星ガンはそのどちらでもないようですね。なぜと行って、火のように燃えている星なら、ぼくたちもたちまち燃えて煙になってしまおうでしょうが、このとおり安全です。おじさん、聞いています？」

「聞いているよ」

「また、怪星ガンが表面が冷えかたまっていて、地球や月のような星なら、その星の腹へ、ぼくらのロケットをのみこむといっても、できないじゃありませんか。だから、怪星のとりこになつているといわれても、ぼくは信じられないや」

そういつて三根夫は、帆村の返事はどうかと、顔をのぞきこん

だ。

「きみは信じないかもしれないが、きみがのべた二つの星の状態のほかにも、星の状態というものはいろいろあると思う。そしてわたしたちは、その一つの実例を、いま目のまえに見ているのだ。そう考えることはできるだろう」

帆村のことばがむずかしくなる。かれもおそらく、じぶんの小さい脳髓のうずいだけでは持ちきれないほどの推理こんらんになやんでいるのだらう。

「とにかく、さつききみは見たらう。星がどんどん姿を消していったのを。最後に窓のように残った凶形の星空、それが見えているうちに、まわりがだんだんちぢまって、やがて星空は完全に消え

てしまった。そして大暗黒がきた。そうだろう」

「そのとおりですけれど」

「つまりね、あの大暗黒が、怪星ガンの一部分なんだ。われわれは怪星ガンにすっかり包まれてしまったんだ」

「すると怪星ガンは霧のようなものですかねえ。それともゴムで作った袋みたいなものかしらん」

「そのどっちにも似ている。けれども、それだけではない。そのうちに、もつと何かあるんだと思う」

帆村は、謎のような、ぼんやりしたことをいう。

「もつと何かあるって、何があるの」

「あれだ。あのようなものがあるんだ」

と、帆村は下からのびてきた光る怪塔を指した。

「あれはなんでしよう。高い塔のようなもの」

「つまり、怪星ガンのなかにはあのよう^に、しつかりした建造物があるんだ。霧かゴムのようにふんわり軟い外郭^{がいかく}があるかと思うと、そのなかにはあのよう^なしつかりした建造物がある。いよいよふしぎだねえ」

「まるで謎々ですね」

「そうだ、謎々だ。しかし、この怪星ガンの構造がどうなっているか。その謎をとくには、もつともつといろいろ観察をして、条件を集めなくてはならない」

「ぼくは、なにがなんだか、さっぱりわけが分からなくなった。く

るなら、こい。なんでもこい、よろこんで相手になってやる」
三根夫は、かたい決心を眉まゆのあいだに見せて、ひとりごとをい
った。

扉をたたく者

そのころ、怪塔の頂上から横にのびていた籠かご型がたの高架通路こうかつうろの
ようなものが、ぴったりとこっちのロケットの横腹に吸いついた。
それは、わが司令艇の出入口の扉のあるところだった。

その扉が、どんどんと、外からたたかれた。そこに当面していた乗組員たちは、ぶるぶるツと身ぶるいした。かれらは、さつそくこのことを司令室の隊長テッド博士のところへ報告した。そして特別のマイクを、扉のところへもって行って、外からたたかれる音を、テッド隊長の耳に入れた。

「おわかりになりますか。隊長。あのはげしい音を……」

「よくわかる。外で何かしゃべっているようだね」

「え、しゃべっていますか。どうせ怪しい奴のいうことだ、ろくなことではあるまい」

出入口当直員は、耳をすまして、扉のむこう側の声を聞きとろうとした。

と、そのとき、外の声が一段と大きくなった。

「この扉を開いてください。お話したいことがあります」

そういうことばが、いくどもくりかえされていることがわかった。

ていねいなことばだ。しかしいったい何者がしゃべっているの
だろう。

その声は、司令室や操縦室のこうせいき高声器からもはつきりでしたので、いあわせた者は、みんなそれを聞くことができた。

「帆村のおじさん。本艇の外へやってきたのは誰でしょうね」

「誰だと思うかね」

「あれじゃないでしょうか。ほら、おそろしい顔をしたガスコ。

ギンネコ号の艇長だといって、きのうここへはいつてきたあのいやな奴」

「そうではないと思うね」

帆村は三根夫の説にはさんせいしなかった。

「おじさんは、誰だと思うんですか」

「怪星ガンの住人じゆうにんじゃないかと思うね」

「えっ、怪星ガンの住人ですって。それはたいへんだ。いよいよぼくらを牢ろうへぶちこむか、それとも皆殺しにするために有力な軍隊をひきいて乗りこんできたのでしようか」

「ミネ君は、このところ、いやに神経過敏しんけいかびんになつているね。それはよくないよ。もつとのんびりとしていたほうがいい」

「だって、こんなふしぎな目、おそろしい目にあつて、えへらえへらと笑つてもいられないですよ」

「とりこし苦勞はよくないのさ。ぶつかったときに、対策を考へるぐらいでいいのだ。一寸さきは闇というたとえがある。先のところはどうなるかわからないんだから、それを悪くなつた場合ばかり考へて、びくびくしているのは、神経衰弱をじぶんで起こすようなもので、ためにはならないよ」

「じゃあ、あの扉をあけて、外に立つている怪星ガンの人間の顔を見たらうで、対策を考へろというんですか」

「それくらいでも、この場合は、まにあうのだ。なにしろぼくたちは、すっかり自由というものをうばわれているんだから、ふつ

うの場合とちがうんだ。とにかく相手は、あのようになっていねいなことばで呼びかけているんだから、ぼくたちを殺すとかなんとか、そういう乱暴は、すぐにはしないだろう」

そういつているとき、テッド隊長が、帆村のほうへ声をかけた。「帆村君。いまみんなの意見を集めているんだが、きみはどう考えるかね。扉を開いて、相手の申し出におうずるかどうか、きみの考えは」

帆村はうなずいた。

「わたしは、すぐ扉をあけて、相手と交渉にはいったがいいと思います」

「ほう。きみもやっぱりそのほうか。扉をあけるのはいいが、艇

内の気圧が、いつぺんに真空に下がるだろうと思うが、このてん考えのなかにはいつているかね」

「わたしは、そのてんも心配なしと思います。つまり、扉の外は、じゅうぶんに空気があるんだと思うのです。なぜなら、外から声をかけられるんですから、外に空気があり、相手は空気を呼吸しながら立っているんだと推察すいさつしているのですが、隊長のお考えは、いかがです」

「うん。きみのいまの説によって、完全に説明しつくされた。そうすれば、外部に空気があることが信じられる。しからば、わしもさっそく扉をあけて、相手に面会する決心がつくというものだ」
「では、どうぞ、しかし、びっくりなすつてはいけませんよ」

「なんだって。びつくりするなどは、何が？」

「それはだんだんわかってきましたよ。いまのところわたしの想像にとどまりますが、なにしろ相手は怪星ガンの一味と思われるますから、ずいぶんわれわれをふしぎな目にあわせるかもしれませ
ん」

「うん。覚悟はしているよ」

このあとで、テッド隊長は命令を発して、ついに本艇の一番大きい戸口の扉をひらかせた。

「やあ。とうとう扉を開いてくださいましたね。みなさん。よく、ここまでいらっしやいましたね。これから仲よくいたしましょう」
相手の声が、はつきりと聞こえた。だが、ふしぎなことに、そ

の相手の姿はどこにも見えなかった。姿なきものの声だ。なんとなく気味のわるいことであろう。

魔か人か

テッド博士は、救援隊の幹部とともに、開かれた扉のほうへわるびれもせず、進んでいった。博士は、ここしばらくの間が救援隊全員にとって、もっとも重大なときだと感じていた。

相手は鬼か、神か、魔物か怪物か、なにかは知らない。しかし

いかなる相手にもせよ、博士は身をもって隊員たちの生命の安全をはからねばならないと、かたく決心していた。

なるほど、空気のことには心配ないようだ。そのまま呼吸にさしつかえない。いったん空気を身体につけた者も、ぼつぼつそれを脱ぎはじめた。帆村の判断は正しかったのだ。

それにしても気味のわるいのは、声のする相手の姿が見えないことであって、それにおびえてだれも返事をする者がいない。

姿なき声は、べつにきげんをそこねたようすもなく、ひきつづいて、こつちへことばをかける。

「どうか、みなさんは、この橋を利用してください。ごらんのとおり、この橋はまっすぐに伸び、やがてはしに達します。そこに

はエレベーターがあつて、上り下りしています。それに乗つて、下までおりてごらんになるよう、おすすめします。みなさんはそこで、なつかしい市街しがいをごらんになることでしょう。いろいろな飲食店もあり、生活に必要な品物をも売っている店もございます。どうぞごえんりよなく、ご利用ください」なんとということだ。まるで大きな百貨店の玄関で案内嬢から店内の案内を聞くような気がする。

だが、姿なき声のべたてる案内は、とても信じられなかった。こんなへんぴな天てん空くうに市街などがあつて、たまるものか。飲食店や売店があるといつてもだれが信じるだろうか。いや、それどころかエレベーターのついでに塔が、下から上へ伸びあがつて

きたことさえ、たしかに目で見たにちがいないのに、信じられないのだ。夢を見ているとしか考えられない。

こういう感じは、テッド隊長以下、すべての乗組員の頭のなかにあった。

「ご親切なることばに感謝します。ですが……」と隊長テッド博士は、あいさつをはじめた。

「ですが、われわれはいま、どういうところにいるのでしょうか。またあなたは、どういう方ですか。われわれには、あなたのお姿が見えないのです」

こつちからの話が、相手につうずるかどうか、博士には自信がなかったが、それはともかく、いいただけのことをいってみた。

すると、相手が返事をした。

「いろいろ疑問をもっておいでのごことは、よくわかります。今、それについて完全なるお答えをすることができません。それは、わたしどもが秘密事項をあなたがたに知られたくないというのではなく、完全なるお答えをして、あなたがたにわかつていただくには、かんたんにはいかないからです。つまり、かなりの時日じじつをかけないと、おわかりになれないと思うのです。ですから、質問のすべてを一度にとくのはおやめになって、これから毎日すこしずつ、市街を散歩するなりだれかと会って話しあうなりして、だんだん疑問をといっていかれたがよいと、それをおすすめます」

相手は、ますますねんのいった話しかたで博士にこたえた。相

手のいうことは、ようするにこの国には、きみたちの常識では解けないような、いろいろなふしぎがある。それを一度にとこうとすると、気がへんになるかもしれない。だからゆっくりこの国に滞在して、ゆっくりと疑問をといていらつしやいといっているのだ。博士は、かるくうなずいて、相手がいったことを頭の中で復習した。これはぜひおぼえておかなくてはなるまい。

「ただ、いまのおたずねについて、これだけはお答えしておきましよう。このところが、どんなところであるかを知るには、橋をわたりエレベーターで下り、市街を歩いてごらんになると、まず、早わかりがするでしょう」

「ああ、そうですね」

「それから、わたしの姿が見えないことです、これはちよつとしたからくりを使っているのです。こつちから説明しないでも、やがてみなさんのほうが、なあんだ、あんなからくりだったかと、気がおつきになりましょう。それはとにかく、いずれそのうち、よい時期がきたらわたしどもは、みなさんの目に見えるように、姿をあらわします。それまでは、私どもの姿が見えないほうがよいと思うので、決してわたしどもは姿を見せません」

「そうおっしゃれば仕方ありませんが、もしわれわれのほうで、あなたさまに連絡したくなつたとき、どうすればいいでしょう。あなたのお姿が見えなければ、あなたを探すことができませぬ」

すると、姿なき相手は、おかしそうに声をたてて笑い、

「これは失礼しました。連絡の必要のあるときは、あなたがたは『もしもし、ガンマ和尚おしょう』と一言おつしやればいいのです。するとわたしは、すぐご返事するでしょう」

「ガンマ和尚？ ふーむ、ガンマ和尚とおつしやるお名まえですか」

「そういえば、通じますから」

偵察団出発

ふしぎなガンマ和尚おしろうの声は消えた。

テッド博士以下は、たがいに顔を見合わせて、すぐにはことばもでなかつた。さつきから、思いがけないことの連続であつた。なにから話し合つていいやら、けんとうがつかない。

「帆村のおじさん」と、三根夫が、帆村莊六の服の袖そでを引く。

「なんだい」

「おもしろいことになってきましたね。たいへんめずらしい国——いや、めずらしい星の国へきたようですね」

「ミネ君、きゆうに元気になったね。どうしたわけだい」

「だって、この下に町があるというのですもの。それから飲食店があつたり、めずらしい品物を売っている店があつたりする。は

やくいってみたいものだ」

「ははは、そんなことで、ミネ君はうれしがっているのかい。だがね、飲食店や商店があつたとして、きみはこの国で通用するお金を持っていないから、どうにもならないじゃないか」

「あッ、そうだ」三根夫は、いまいまして舌打ちをした。なあんだ、あのガンマ和尚め、とんでもないかつぎ者だ。

このときテツド博士が、ガンマ和尚の話によつて、第一回の偵察団を出発させることを決めた。

そしてその人選を発表したが、人数は五名であつた。まずテツド博士。それからポオ助教授に帆村莊六。射撃と拳闘の名手のケネデー軍曹。それから三根夫。

この発表で、三根夫はじぶんが第一番に見物にいけるとい
うので大よろこび。

そこで一行五名は、すぐ出発した。空気服も脱いで、散歩に
でるとおなじ軽い服装だった。

だが、みんなの胸のなかには、もつと重苦しいものが、つか
えていた。それは不安であつた。

ガンマ和尚のことはおだやかであるが、ここはまさしく怪星
ガンの中だ。『宇宙の女王』^{クイーン}号が、悲痛な最後の無電をもつて
警告していった怪星ガンの内部である。

ただ、どうしても腑^ふにおちないのは、『宇宙の女王』号の場合
は、気温の急上昇があつたりなどして、乗組員はかなり苦しんだ

ようであるが、本艇の場合には、それがなかつたことだ。これはなぜだろう。まだ解くことのできない謎だ。

さて偵察団の一行五名は、おそるおそる橋へ足をかけた。もしこれが妖怪屋敷ようかいやしきのなかのまぼろしの橋だったら、あつという間に身体は奈落なごくへ落ちていくはずだった。

「大丈夫だ。きたまえ」テッド隊長はさすがにひと足さきにみずから試験をしてみても、大丈夫であることをたしかめると、つづく者に渡れと合図した。そこで残りの四名も橋を渡りだした。横から見たところはなんだかひよろひよろしたあぶなつかしい橋であったが、こうして渡ってみるとすこしもゆれず、きしむ音もなく、しつかりしたビルの廊下を歩いているのとかわりがない。

「この橋の材料は、なんでできているの」帆村がポオ助教授に聞く。

「さつきから目をつけているんだが、これはめずらしい金属だ。われわれの知らない合ごうきん金らしい」

助教授は、ざんねんそうに答えた。橋を渡り切ると、なるほどエレベーターがあつた。それはコンベヤー式になつていて、上つてくるものと下るものが、左右に並んでいっしよに動いている。扉もない。そしてメリーゴーラウンドの箱車みたいになっている。ちようどまえにきたときに、その箱車へとびこめばいいのだ。一つの箱に十人ぐらいは乗れる。

テッド博士とケネデー軍曹が先頭を切つて、とびのつた。ポオ

助教授と帆村と三根夫は、その次の箱車に乗った。エレベーターははずんずん下へおりていく。外は窓がないので、どんな景色になっているのか見えない。

この道中はかなりながく、十二、三分間もかかった。そしてついにホームのようなところへ箱車はいった。博士の合図で、みんなホームへとび移った。

「たしかに、これはしつかりした地面のようだがね」

博士はそういつて足あしもと許を見ながら足ぶみをした。ホームのむこうに、大きなアーチが見え、そのアーチのむこうには明かるい街並が見えた。みんなはそのほうへ歩いていった。たしかに見事な街路だった。きれいに並んだ商店街。街路樹がいろじゆもゆらいでいる。

なんだか狐きつねに化ばかされたようだ。

「よう、テッド君じゃないか」隊長の肩へ手をかけた者がある。

老探検家

わが名を呼ばれ、テッド隊長はびっくりしてうしろをふり向いた。

「あッ、あなたはサミユル先生」

隊長がおどろいたのもむりではない。かれの肩をたたいた者は

余人ならず、『宇宙の女王』号にのつてでかけた探検隊長のサ
ミュル博士だった。その『宇宙の女王』号が、悲壮なる無電をと
ちゆうまで打って、消息をたつた。それでテッド隊が、『宇宙の
女王』号のゆくえを探すために地球をあとにして、困難なる大
宇宙捜査ちゆうそうさに出発したのであった。ところが、サミュル博士一行
の六十名をのせた『宇宙の女王』号の消息はまったくわからず、
テッド隊は不安のうちにも捜査をつづけているうちに、怪星ガン
の捕虜ほりよとなつてしまったわけだ。ところがこんなところで、ぼつ
たりとサミュル博士と出会うとは、なんときえんいう奇縁であろうか。

「ほんとに、あなたは、サミュル先生」

テッド隊長は、ほんとになんべんも目をこすつて、まえに立つ

半白はんぱくの老探検家を見なおした。

「ふしぎなところで会ったね。どうして、こんなところへきたのかね」

老探検家は、健康色の顔に、ほおえみを見せて、テッド博士にきく。

「わたしたちは、先生のご一行を救援するためにこつちへやってきたのです。不幸にして、このとおり怪星ガンの捕虜となつてしまい、われらの目的ももう達せられないかとなげいていましたのに、とつぜんここで先生にお目にかかるなんて、ふしぎというか何というか、びっくりいたしました」

テッド博士の話をお探検家はうなずきながら聞きとつた。そし

て強く博士の手をにぎりかえした。

「ありがとう。よく捜しにきてくれた。これまでに苦勞をたくさんかさねたことだろう。くわしい話を聞きたいが、わしの家まできてくれないか」

「はい。どこへでもおともをします。あ、それからご紹介します。これが隊員のポオ助教授。それからケネデー軍曹。帆村探偵、三根夫君です。どうぞよろしく」

「おお、みなさん、よくはるばるきてくださって、ありがとう。隊員もどんなによろこぶことでしょう」サミュエル博士のことばに、三根夫は、

「先生。すると、『宇宙の女王^{クイーン}』号にはいつていた隊員は、み

んな無事なんですか」

と、きけば、博士はちよつと表情をかたくし、

「まあ、いまのところ無事です。もつとも、一時は隊員のはんぶんが重傷を負うやら、なかには死ぬ者もあつたが、いまはみんな元気です。このことはあとでゆつくり、お話ししよう」

と、ここではそれから先のことを話したからなかつた。一同はサミュエル博士の家のほうへ歩きだした。三根夫は、目をみはり、耳をそばだてて、町の両側に注意し、いきあう人にも注意した。

広場といい、道路といい、地球のうえで見る広場や道路にかわらないようであつた。道路の両側にならんだ店や家も、地球の上で見るそれらとあまりかわつたところがなかつた。もつとも店は、

たいへん美しく飾りたてられてあり、商品は豊富であつた。料理店が店頭にかかげてある料理の品目も、おなじみなものばかりだつた。だが、三根夫は、ついにかわつたことを発見した。

「ねえ、帆村のおじさん。このへんの店は、へんですね」

帆村に話しかけた。帆村はにやりと笑つて三根夫を見おろした。

「何に気がついたのでかね」

「だって、へんですよ。店には、だれも店番をしている者がないじゃありませんか。どの店もそうですよ」

「なるほど。それから……」

「それから？　まだ、へんなことがあるんですか」

三根夫は小首をかしげて考えこむ。

「ああ、そうか。帆村のおじさん。お客さんがひとりもいません。へんですね」

「客の姿が見あたらない。よろしい。それから……」

「それからですって。まだへんなことがあるんですか」

三根夫は立ちどまって、店をまじまじとながめる。

「あ、これかな。帆村のおじさん。店の出入り口の戸が、ばたんばたん、開いたり閉まったりしますね。まるで風に吹かれているようだけれど、そんな強い風が吹いているわけでもないのにへんだなあ。おじさん、これでしよう」

「なるほど。それから……」

「えッ、えッえッ。まだ、それからですって」

三根夫はあきれてしまった。へんなことが、そんなにたくさんあるのだろうか。帆村莊六がからかっているのかしらと、三根夫は帆村の顔をちらりと見た。

帆村は、そのとき小さい手帖に、いそいでなにごとかを書きこんでいた。

りんごの買物

「どうだい。わかったかい」

「いや、わからないです」

「三根クン。きみはあの店にならんでいるりんごがたべたくないかい」

「あれですか。りんごはめずらしいですね。それにたいへんおいしそうだ。あれを買えないでしょうかね」

「さあ、どうかな。三根クン。きみはあの店へはいつていつて、『りんごをいくつ、ください』といつてみたまえ。するとどうなるか。ただし三根クン、おどろいちやだめだよ」

「おどろきやしませんか誰もない店へはいつて、誰もいないのに、りんごを売ってくださいというのですか」

「そうだ。ためしに、そういつてみたまえ」

三根夫は帆村からへんなことをすすめられて、はじめは帆村がいたずらはんぶんぶんにそれをいつているのだと思つていたが、そのうちにどうやらそれは帆村がしんけんけんになつて、知りたいと思つているのだとさとつた。それで三根夫はゆうかんかんに、すぐまえの果実店かじつてんの戸をおして、なかへはいつた。

「もしもし、このりんごをください」三根夫は、はいると同時に叫んだ。

「はいはい、いらつしやいませ。りんごはどれを、何個さしあげますか」

やわらかい女の声がひびいた。若い美しい声であつた。それは三根夫のすぐまえのところに聞こえた。だが、ふしぎなことに、

声の主の姿は見えなかった。

三根夫はきよろきよろあたりを見まわし、気味がわるくなつて、
唾つばをのみこんだ。

「りんごは何個さしあげますか」ふたたび美しい声が、たずねた。
「ええと、十個ください」三根夫は、あわててそういった。

「はい、かしこまりました」その声につづいて、きみのような現象
がはじまった。紙の袋が一つ、ものかげからとびだしてきて、り
んごの並んでいるところから五十センチほど上の空間に、ぴった
り停止した。と、ばりばり音がして、紙袋は口を開いた。

「あッ」三根夫は、目を見はつた。すると、下に並んでいた紅い
りんごが一つ、すうつと宙に浮きあがった。と思うと、がさがさ

と音をたてて、紙袋の開いた口の中へとびこんだ。りんごにたましいがあつて、いきなり身をおこして紙袋の中へとびこんだようだ。まもなく、もう一つのりんごが、仲間からはなれて、またもや紙袋の口へとびこんだ。こうしたことが、三根夫のあつけにとられてゐるまにくりかえされ、紙袋は十個のりんごで大きくふくらんだ。

「さあ、どうぞ」れの女の声とともに、りんごのはいつた紙袋は三根夫の胸のまえへきて、ぴったりとまった。三根夫はびっくりして、思わずひと足うしろへ後退した。

「ほほほ。どうなすつたんですか。さあどうぞりんごをおとりください」

「はいはい」三根夫は、りんごのはいった紙袋を両手でつかんだ。とたんはずっしりと十個のりんごの重さがかれの掌てのひらを下におした。「お代はいくらですか。このりんごの代金はいくらになりますか」三根夫は、そういつてしまつてから、はつと気がつき、耳のつけ根のところまで赤くなつた。なぜならば、三根夫は、この奇怪な世界において通用するお金を、びた一文も持つていないことに、今になつて気がついたのである。

（しまつた。つい、買物をしてしまつたが、たいへんな失敗だ）店のかまえといい、姿は見えないが売り子の調子のいい応待といい、地球におけるサービスのいい店とおなじようであつたために、つい気軽に買物をしてしまつたわけだ。

「代金ですつて。そんなものは、いりませんのです」

「えッ。りんご十個が、ただもらえるんですか」

「はあ、この店では、みんな無料でお渡しすることになっていま
す」

「それでは損をするばかりではありませんか」

「いいえ、市民の健康を保つために、市民がたべたいと思う果物
を市民に渡すことは、公共事業ですから、損ではありません」

「ついでにおたずねしますが、この町で売っているもので、りん
ごのほかにもただのものがありませんか」

「ございます。衣食住にかんするすべてのものは、みんな無料で
市民に提供されます」

「衣食住にかんするすべてのものですって。それはうらやましいことだなあ。しかしぼくは市民ではありませんよ」

「いいえ、市民です。この町にいる者は、みんな市民です」

「もう一つおたずねしますが、あなたはどのようにして姿を見せないのですか」

三根夫が、調子にのって重大な質問をしたとき、入口の戸が歩いて、帆村が顔をだした。

「三根クン。すぐこつちへでてきたまえ。サミュエル博士がお待ちかねだ」

三根夫は、おしいところでその店をでた。

値段札
ねだんふだ

町は美しく、ならんでいる店はにぎやかに飾られているのに、人通りはまったく見えない。歩いているのは一行五名だけだ。そのように見えるけれど、帆村の推定によると、この町なり通りなりには、大ぜいの怪星ガン人が往来して、ざつとうをきわめているにちがいないという。

帆村と三根夫は、あいかわらず一番うしろにらんで歩いていた。

「ねえ、帆村のおじさん。この町は、地球上のどの国よりも進歩したところですね。だって生活費がただなんだから、暮しに心配いりませんもの」

「生活費がただで、らくに暮らせるところなら、地球のうえにだってあるよ」

帆村がいがいなことをいった。

「あるものですか。日本はもちろんのこと、アメリカだってソ連だって、生活費はただではないですもの」

「それはそうだ。しかしじつさい生活費がただであるところは、地球上にすくなくない。れいをあげよう。熱帯の島々に住んでいる原住人たちのほとんど全部が、衣食住に金をかけていない。か

これらの食物はタピオカやタロ芋やバナナやパイヤヤ、それから魚などだ。それらは自然に島にたくさんなっている。酋長のゆるしさえあれば、かつてにそれをたべることができ。着るものは木の葉や木の皮で身体の一部をかかせばいい。もちろんこれはただで手にはいる。住む家は、いくらでも生えているびんろう樹などを切ってきて、その木を柱にし、葉をあんで柱の間にはりめぐらすと家がでける。すべて無料で手にはいる。どうだね、三根クン」

帆村の話に、三根夫はうなつた。なるほど未開地の原地人は、たしかに衣食住に金を払っていないようだ。原地人のほうが文明人よりも幸福といえるのだろうか。いやいや、どうもすこしちが

うようだ。このことは、ゆっくり考えてみよう。

「衣食住のものは無料でも、ほかの品物はお金をださないと買えないんでしょうか」

「そういうものもあるらしいね。たとえば、ほら、あの店に並んでいる額がくにはいつている油絵。あれには値段をかけた札がつけてあるよ」

「あ、なるほど。三十五ドルと、値段がついていますね。地球の値段より高いですね」

「ほら、あのとなりには人形を売っている。あれにも値段の札がついている」

「ええ、ついていますね。これはおどろいた」

「三根クン。ぼくたちの目には見えない品物が店に並んでいるとは思わないか」

「えっ、なんですって」

ふしぎなことを帆村がいったので、三根夫は目をぱちくり。

「たとえば、この店にだね、本がならんでいるが、それは店の棚の一部分だ。ほかの棚はがらあきだ。しかしはたしてがらあきなんだろうか。そこには、ぼくらの目には見えない本がぎっしりならんでいると考えてはどうだろうか」

「そうですね。そうも思われますね。本のならんでいるぐあいへんてこですからね」

「もう一つ、きみは気がついていないか。店には、ぼくらには姿

の見えない客が大ぜい、でたりはいつたりしているということを」
「なんですつて。姿の見えない客ですつて」

「そうなんだ。その証^{しょうこ}拠^こには、入口の扉を注意して見ていたまえ。ひとりでに、開いたり閉まったりしている。風もないのに、へんじやないか。あれは、ぼくたちには見えないけれど、客がさかんにあそこから、でたりはいつたりしているんだと解釈できやしないか」

「それは、りっぱな推理ですよ。きつと、それにちがいありません。なぜ、姿の見えない人間——人間でしようか、とにかく、どうしてそんな姿の見えない者がたくさん動いているのでしようか」
「それはかんとんにわかるじやないか。この町の住民たちなんだ。」

つまり怪星ガン人だ」

「怪星ガン人？ ああそうか。怪星ガン人は姿が見えないんですね。そういうば、あのなんとか和尚おしょうという人も、姿を見せなかった。みんなどうして姿が見えないんでしょうか。くらげみたい

に、透明なんでしょうか」
三根夫の頭のなかには、たくさんの疑問がわいてきて、とまらなかつた。

「それは大きい謎だ、その謎がとけると怪星ガンの秘密もすつかり解けてしまうのだろう。ぼくたちは、これから推理の力をうんと働かせて、一分でもはやくその謎を解いてしまわなくてはならない」帆村の顔には、真剣な色がうかんでいた。

五分間の機会

「なにをしていたの」テッド隊長は三根夫にたずねた。そこで三根夫は、ありのままを答えた。

この町の衣食住にかんするものはすべて無料であるとわかったことも話した。

「それはけっこうだ。しかし、いらぬものまで買わないほうがいいね」

と、かるくいましめた。人間は慾が深くていらぬものまでかきよせるくせがある。無料で、衣食住にかんするものを市民にわけているこの町では、おそらく市民たちがひつようなものだけを手に入れ、いますぐにひつようでないものはほしがらないから、このように生活費が無料になっているのであろうと、テッド隊長はさつしたのであつた。一行は、またおなじ方向を歩いていてだれにも衝突しなかつた。たいへんふしぎである。よく考えてみると、こつちからは怪星ガン人の姿が見えないが、ほんたいにガン人のほうからは三根夫や帆村たちの姿がよく見えていて、ガン人のほうで道をゆずるから、突きあたることもないのであろうとも思われるのだった。

サミュエル博士の家へついた。それは原のなかに一つさびしく立っている四角な白い建物だった。外から見ると、かぎりもなんにもない殺風景さつぷうけいな建物であったが、玄関からなかへはいつてみると、家具などがなかなかりっぱであった。

家の中には、誰もいなかった。さつするところ、博士ひとりが住んでいるらしい。

りっぱにかざられた広間に、一同は腰をおちつけた。

「ハイロ君、ちよつときてくれたまえ」

「はい、ただ今」誰もいないと思ったのに、となりの部屋と思うあたりで男の声があった。

緑のカーテンが、奥に面したところにかかっていたが、それが

さつと一度だけ動いたのを三根夫は見た、と、かすかに足音が近づいて、やがてサミュエル博士の横で声がした。

「ご用でございますか、はい」

「お客さまがたに、ちよつと一口、何かおいしいものをさしあげてください」

「はい、かしこまりました。さつそく用意をいたします」
姿が見えないハイ口は、そういつてさがっていった。

「いまだ、テツド君。時間はいくらもない。ハイ口がコーヒーなどを持つてくるまでの五分間ほどが、ほくたちが自由に話ができる時間なのだ。重要なことからだけを話しあいたいのだ」

サミュエル博士は、テツド隊長の腕をつかんで、はや口にいった。

老博士の額には 脂汗あぶらあせがねっとりとうかんでいた。これにはテツド隊長も緊張のてっぺんへほうりあげられた形だ。

「わかりました。サミュル先生。あなたがたもやはり捕虜生活をつづけていらっしやるんですか」

「そのとおり」

「この怪星ガンの正体は、いったいどんなになっているものですか」

「それは残念ながら、まだ知りつくすことができない。しかしわしたちのさっするところでは、人工の星ではないかと思う」

「人工の星とは？」

「天然の星ではなく、人じんりよく力ちからというか何というか、とにかく現

にこの怪星に住んでいる智能のすぐれた生物が、——あえて生物という、人間だとはいわないよ——その生物がこしらえたものじやないかと思う」

「だって、この大きな星を人工でこしらえあげるなんて、できることでしょうか」

「われわれ地球人類の想像力の範囲では、とてもこの怪星の秘密を知りつくし、解きつくすことはできないであろう。われわれは一つでもいいから、じっさいに存在するものを観察して、その上にだいたんな結論をたてるのだ。そういう結論をいくつもいくつも集めたうえで、それらを組合わせるのだ。すると、そこにこの怪星の正体が、おぼろげながらもだんだんはつきりしてくるのだ

と思う」

さすがに世界的な老探検家サミュエル博士のことだけあって、しつかりした考えを持っているのに、テッド隊長は心から感動した。「それはそれとして、この怪星はいつたい何者が支配しているのですか」

「れのいの生物のなかで、智能のすぐれた者が、この怪星をしつかりおさえているんだと思う」

「われわれを捕虜にして、これからどうしようというつもりなんでしょう」

「それは——」と、いいかけてサミュエル博士は口をつぐんだ。奥からコーヒ^かーの香がぷーんと匂^かつてきたからである。三根夫は見

た、カーテンがゆらいで、銀の大きな盆ぼんのうえに、湯気ゆげの立った
コーヒー茶碗が、宙をゆらゆらゆれながらこつちへ近づいてくる
のを……

「あつはつはつはつ。まあまあ、ひとつ呑気のんきに愉快に暮らしてい
こうじゃないか」

老博士は、とってつけたようにいった。

「コーヒーをどうぞ」

ハイロの声が、近くに聞こえた。おだやかな声だった。コーヒ
ーは一同にくばられた。

そのときだった。銀の盆が大きく床に鳴った。ハイロのおどろ
いた声。

「あッ、怪物。あんなところに怪物が！　たいへんだ」
ハイ口は足音もあらく奥へとびこんだ。警鈴らしいものが鳴りだした。はて何事が起こったのであろうか。

怪獣 かいじゆう 南京 ナンキン ねずみ

どんな大事件が起こったのであろうか。このときばかりは、テッド隊長も青くなつたし、帆村莊六さえ、まっさおになつてしまつた。

(しまった。さつきサミュエル博士との秘密の会話が、怪星ガンの支配者に聞かれてしまったのかな。やっぱり目に見えない密偵がわれわれをいつも番していたんだな。秘密の話なんかして、よくなかった)

ポオ助教教授は、きよとんとしている。ケネデー軍曹は、服の中にしのばせたピストルへ手をのばした。三根夫少年は、どうしていたか。

かれは椅子からさつとすべりおけると、ハイロがわめきさげんでいる奥へかけこんだ。

すると、こんどは、またいつそうハイロのさげび声はげしくなった。そして家具ががたんとたおれ、食器ががらごとくわれ

るたいへんな物音がした。

「た、助けてくれ、助けてくれ」警報にまじって、ハイ口のいまにも死にもうな叫び声がつづく。

「これはたいへんだ」テッド隊長は、ケネデー軍曹に目くばせをすると椅子から立ちあがって、三根夫のあとを追おうとした。

「お待ち、テッド君。ここが重大なときだ、かるはずみしてはいけない。動いてはならない」

サミユル先生が、ふたりをとめた。

「ですが、先生。奥のほうに何か騒動が起こっているに、ちがひありませんもの」

「いいや、ほっておきなさい。よけいなおせっかいはすると、ガ

ン人はよろこばないのだ。われわれは捕虜ほりよなんだから、ひかえていなくてはならない」

「しかし、先生。あのとおり死にそうな声をだしている。それに三根夫君もとびこんでしまった。少年を見殺しにできません。助けてやりたい」

テッド隊長は、居ても立ってもいられない思いに見えた。

「隊長。わたしがかわりにいつてきますから、おまかせください」
「ああ、帆村君、きみがいくつて……」

「たいしたことじゃないと思います。この一件でしょう」帆村は、卓上を指した。それは三根夫の席があるところの卓上だ。そこに小さい虫かごのようなものが一つおいてあった。

「なんだい、これは……」

「この籠の中にいたものが、騒動をひきおこしたんでしよう。サミュエル先生。この国には人間以外の動物は、たくさんいますか」

「あまりいないねえ」

「ねずみなんか、どうですか」

「ねずみ。ああ、ねずみか。ねずみは見かけないね」

「それでわかりました。隊長、三根夫君がこの籠にいて飼っていた白い南京ナンキンねずみが、この中からにげだして、奥へとびこんで、ハイ口をおどろかしたのだらうと思いますよ」

「まさか。そんなかわいい小ねずみにおどろくようなことはないだらうに」

だが、それはほんとのことだった。帆村が奥へいつてみると、料理場にちがいない部屋で、三根夫がはらばいになって、一ぴきの南京ねずみを一生けんめいに追いまわしていた。

その小ねずみが、つつーと走るたびに棚の上から食器やなんか
が、がらがらとおちたり、カーテンがベリベリと破れて、床の上
へ大きなものが落ちたような物音がしたり、それからまたひとり
で^{ほうき}箒が宙をとんだりした。

これらのふしぎな現象は、みんなハイロがにげまわって、さわ
いで起こすところのものであった。

「ハイロ君。こわがらなくていいよ。その小さい白い動物は、わ
たしたち地球の世界では、一番かわいがられる動物なんだ。一番

おとなしくて、かしこいのだ。きみはすこしもおそれることはない」

帆村が落ちついた声で室内の見えぬ姿へ話しかけた。

その効果はあった。ハイ口の声があった。

「ほんとに大丈夫ですか。わたしに危害をくわえるようなことはありませんか。魔ものではないのですね」

「そうだとも。いまもいったように、地球の世界では、みんなにかわいがられている一番おとなしくて、かしこい動物なんだ。ナンキンねずみというのだよ。三根夫が飼っていたのだ。それがさつき籠からにげだしたのだ。見ていたまえ。三根夫がああ南京ねずみをつかまえたら、きみのために、いろいろとおもしろい芸当

をあの南京ねずみにさせて見せてくれるだろう。そのときは腹をかかえて大笑いをしたまえ」

「そうですか。ほんとですか」ハイロの声は、安心のひびきを持つていた。

宇宙戦争の心配

テッド博士一行は、そこをひきあげることにして、サミュエル先生にあいさつをのべた。

「では先生、またお目にかかりましょう。一度わたしの艇までおいでを願いたいと思いますが、いかがでしょう」

「ありがとうございます。それは相談をしたうえのことにしましょう」

「誰に相談なさるのですか」

「そりやきみ、わかっているだろう」サミュエルろうし老師は悲しい目つきをした。

そこでテッド博士は、心ひそかに思った。

（なるほど。この怪星ガンの国は、われわれにとって極楽世界のように見えるが、よろこんでばかりもいられないんだな。先生はなにかもつと重大なことを知っていていられて、わたしに話したいと思っているんだが、それが話せないらしい。よろしいそれではわ

れわれの手で、怪星ガンの秘密を一日もはやく探しあててやりましょう。先生、もうしばらくしんぼうしてください」

テッド博士は老師にたいして、心の中でそういった。

いよいよ別れの握手をしたあとで、博士はもう一言いった。

「先生のひきいていられる『宇宙の女王』^{クイーン}号をぜひ見せていた
だきたいものです。あすあたりいかがでしょう」

「ぎんねんながら『宇宙の女王』号をきみに見せるわけにいか
ない。あれはもう、この国へ寄附してしまったのだ」

「寄附ですって。それはおいしいことをしましたね。それでは先生
や隊員たちは、地球へもどるにも乗り物がないではありませんか」
「そうだ。わしはふたたび地球へかえるつもりはない」

「えッ。それはまたどうして……」

「わしは、この国でずっとながく暮らすつもりだ。きみたちもそのつもりでいたほうがいいと思うね」

「いや、わたしどもは、どうしても地球へもどります。それに、このようなふしぎな怪星ガンの国を見た上からは、一日も早く地球へもどって、全世界の人々に報告をしてやるのです。そしてそれは同時に警告でもあります。地球の人々は、宇宙で人間がもつともすぐれた生物だと思つて慢心していますからね。それにたいして一日でも一時間でもはやく、怪星ガンの存在することを警告してやるひつようがあります」

「待ちたまえ。きみの考えはむりではない、しかしきみはまだこ

のガン人の国について、ほんのすこし知っただけだ。そんなことでは、ガン人の国の真相を地球へ伝えることはできないではないか」

「それはそうですが……」

「まちがったことを知らせたりすると、誤解が起こって、かえって大事件をひきおこすことがある。宇宙戦争なんかは、どんなことがあっても起こしてはならないからねえ」

サミュエル先生は、熱心を面おもてにあらわしていった。

「でも、このような警告は一分でも一秒でもはやくなくてはなりません。地球人類が、もし不意をつかれるようなことがあつては、負けですからね」

「ほう。きみはもう、怪星ガンと地球とのあいだに宇宙戦争が起るものと考えているのかね」

「はい。考えています。たしかにその危険があります。困ったことですが、どうにもなりません。やくそくされた運命というのでしよう」

「いや、わしはそうは思わない。きみはもつと考えなおすべきだ。そしてガン人というものをもつと深く理解しなくてはならぬ」

「もしもし、そんな話は、もうそのくらいにして、やめた方がいいでしょう。テッド博士たち、もうおかえりなさい」

とつぜん頭の上で、われ鐘のような声がした。

「あッ。きみは誰？」

「ガンマ和尚おしょうですわい」

「おお、ガンマ和尚」テッド博士は、しまったと思った。しかし声だけのガンマ和尚は、別に怒っているようにも思われず、おなじ調子の声で、

「くよくよしないで、街でたのしいものを見つけることですよ。つまらない話はしないのがいい。あすは、あなたたち全員を、わたしたちが招待して、たのしい歓迎会をひらきます。そのことを帰ったらみなさんに知らせてください」

「わたしたちのために、そんな会を開いてくださるのですか」

「あなたがたがその会にできれば、わたしたちの気持ももつとはつきりわかってくれるでしょう。さあさあ、にこにこ笑って、ここ

をおひきあげなさい」

大食堂の異風景

その翌日の大歓迎会は、まったくすばらしいものであった。また珍妙なものでもあった。

テッド隊長以下三百名にちかい隊員全部が、この町の大宴会場キング・オブ・スターズに招待せられたのである。その招待の正式のあいさつは、いつどこから忍びこんできたのかわからないが、

姿は見えぬながら声だけのガンマ和尚おしょうから、九台の宇宙艇内へ手おちなく伝えられた。

「へえーッ、おれたちを招待するというぜ。なにをたべさせるのかな。気持ちがわるいね」

「なあに、その心配はないさ。怪星ガンは大きな世帯らしいから、まさかわれわれの口にあわない彗星料理や星雲ビールなんかをだすことはないと思う」

「なんだい、その彗星料理だとか星雲ビールというのは。いったいどんなものか」

「さあ。どんなものかおれもしらないが、おまえは、そのへんてこなものがでるか心配していると思つて、ちよつと試つてみたの

だ」

「ははは。なにをでたら目をいうか」

一同がなによりも喜んだのは、艇をでて、外を足で歩けるといふことだった。まったくながい間せまい艇内にこもってばかりいて、あきもあいたし、足がつかえてしまった感じだ。とてろがいま招待によつて艇をでて、外をてくてく歩くことができるなんて、こんなうれしいことはなかった。それは招待日の当日は病人がひとりもなくなつたことによつても知れる。

そのまえに、三根夫少年はみんなから引^ひつ張^ばり^だつた。三根夫が一日はやく怪星ガンの町を見てきているので、町のようすについて三根夫はくわしく答えることができた。

「いろいろなものを売っているんだよ。たべものやのみものや服のない者は、ただで買えるんだ。そうでないものは金をださないと買えない。それからね、ガン人はたくさん歩いているらしいんだが、ぼくらの目にはまったく見えないんだ。これには面くらうよ。それからガン人たちはぼくらより高等な人間らしいところもあるけれど、地球の上のことをじゅうぶん知っていないらしい。だから、ぼくの持っていた ナンキンねずみ 南京鼠をガン人が見て非常警報をだしたくらいだ」

「へえーッ、あきれたもんだね。うわッはッはッ」

「はやく町へいってみたいなあ。出発はまだかしらん」

出発命令がでて、一同はそろそろと艇を出、横にのびた橋を渡

り、れいの光る高い塔をおりていった。そして町へはいった。

みんなは、小学生の遠足のようにはしゃいでいた。歩くことだけでじゅうぶんうれしいところへもつてきて、うつくしい商店のならば町を見、ただで手にはいるというおいしそうな果物や菓子をながめ、まったく夢のなかにいる感じだった。

大宴会場キング・オブ・スターズは、すぐ目のまえに高くそびえて、昼間だというのに、七色のうつくしい光りの束でかざられ、テッド博士以下を歓迎するという光りの文字がつづられては消え、消えては綴つづられた。会場へはいつていくと、たえず頭のうえに案内人の声がして、一同は席につくまで、すこしもまごつくことがなかった。その大食堂というのが、これまた変っていて国技館の

ように円形になって卓がならば、そして外側は高く、内側へいくほど低くなっていた。

どこで調べたものか、隊員たちの名まえがはつきりと席の上にあるカードにしるしておいてあった。そこで席についてみるとふしぎなことがわかった。隊員たちは一つの空席をおいてとなり合つて席をとるようになっていた。

「みようなことをしたもんだね。間に一つずつ空席があるじゃないか。そっちへ席をうつして、きみのとなりへすわることにするよ」そういつて隊員のひとりが、じぶんの席をたたいて、友だちのとなりの空席へうつそうとした。すると、とつぜんその空席の椅子がひとりできしぎしと鳴り、そして空席のところから若い女

の聲がとびだした。

「あッ、この席にはあたくしがおりますのよ」これには面くらつて、うしろへさがった。

「ええッ、なんとおっしゃる」目をさけるほど見はつたが、となりの席はやっぱり空席だった。

「そんなにこわい顔をなすつちやいやですわ。どうぞあなたの席におつきくださいませ」

「はい。しようちしました。しかしあなたの声はすれどもお姿はさっぱり見えないのですがね」

「そうでございますか。ご不便ですわね。ほほほほ」

「いや、笑いごとではありませんよ」そのときガンマ和尚の聲が

ひびいた。

「みなさんに申しあげます。みなさんをお招きしたわたしどもの姿が見えませんでしたために、いろいろとおさわがせさせてすみませんでした。それでただいまよりわたしどものつけております衣裳だけを、見えるようにいたしますから、それによってわたしども主人側の市民たちが、どのようにたくさん、そしてどのように熱心にみなさんを歓迎しているか、お察しください」

といったかと思うと、ああらふしぎ、この大食堂の中は一時に百花が咲いたように、美しいとりどりの衣裳が、隊員と隊員の間の空席に現われた。

「おお、これは……」

「どうぞよろしく」

衣裳だけのへんてこなものが、左右へあいさつをした。まったく珍妙な光景だった。

変調眼鏡めがね

宴会はそれから軽快な奏樂そうがくとともにはじまって、でてくる飲みものや食べるものの豪華なことといったら、隊員たちのどぎもをぬくにじゅうぶんであった。

隊員たちは、はじめは気味がわるかったが、口に入れたものがおいしかったので、それからあとは飲み、そして食べ大きげんであった。歌を歌うものもあり、ダンスを見せるものもあった。

「もうこのへんで、主人側の美しい顔を見せてくれてもいいじゃないか」

酔っぱらった隊員のひとりが、席に立って腕をふっていた。

「いや、いづれ見ていただく日がきましよう。それまでお待ちください」

「もう待ちきれませんね。衣装だけのお化けと酒もりしているのはやりきれませんからね」

「ごもつともです。しかし、物事には順序というものがあること

を、みなさんもごぞんじでしょう」

とガンマ和尚おしょうはいった。

「なにが順序だつて……」

「とにかくわたしどもの希望しますのは、みなさんは長途ちやうとのお疲れもあることとて、すべての心配と危惧きぐをすててとうぶんはゆつくりとお好きなものをたべ、お気にいったところを散歩して、健康を回復していただきましょう。そのうえで、わたしたちはさらに新しいことをお話いたすであります。とにかく、みなさんの生命はぜつたいに安全なのでありますから、安心していただきます」

「なぜ、わしらを大切に扱ってくれるのかね。あとで請求書せいきうしょがく

るんだろう。こわいね」

「あははは。なかなかきびしいおことばです。そうです。みなさんがじゆうぶんに元気になられたら、わたしどもはみなさんがたに、ぜひ相談にのっていただきたいことがあるのです。それはな
のであるか。ただいまは申しません」

「やつぱり、そうだったか。丸々と太ってから、おまえの肉をたべさせろというのだろう」

「トミー。酔っていても、ことばをつつしみたまえ」テッド隊長が聞きかねて注意をした。かれもじつは、さつきからトミーとガンマ和尚の対話に熱心に耳をかたむけていたのだ。

「ああ、いいですとも。わしは何も気にしていませんから。さあ

さあ、みなさんどうぞ盃さかずきをおあげください。テッド隊員のご健康を祝します」それがきっかけで、宴会はまたもとのように大にぎやかになっていた。とにかくこの宴会は大成功のうちに幕を閉じた。

その日くらい、隊員たちは誰も彼も元気をくわえたようだ。自由に散歩ができ、無料で飲んだり食べたりでき、音楽を聞いたり、ダンスを楽しむこともできた。

三根夫少年も、毎日のように町を散歩した。いつでも帆村といっしょに歩くことにしていたが、その日は帆村がテッド博士からよばれて、艇内で会議に列席するため外出ができないので、三根夫ひとりが町へでた。

「もしもし、三根夫さま」かれはうしろから呼ばれた。

誰だろうと思つてふりかえつたが、誰もいない。しかしかれはもうこの頃は勘^{かん}ができて、姿は見えなくても、そこにはぜんぜん誰もいないのか、ガン人がそこにいるのかを感じわけることができるようになっていた。

「ああ、そうか。きみはハイロ君ですね。サミュエル博士のところにいるハイロ君でしょう」

「はっはっはっ。そうですよ。あなたのおいでを待っていたのです」

「どうかしましたか」

「じつは、わたしはお入り入つてあなたにおねだりしたいものがある

るんです。さつそく申しませんが、先日お持ちになつていた白い小さい、目の赤いねずみですな、あれをわたしにゆずつていただけないでしょうか。お待ちください。あのようなめずらしい貴重な生物をば、ただでくださいとは申しません。それと交換に、あなたの欲しいと思つているものをさしあげます」

「ふーむ、あの南京ナンキンねずみをねえ」

「あなたが大事にしていらつしやるものであることは知つています。しかしこの国には、あんなめずらしい生物はいないのです。ぜひともどうぞ、かなえてくださいまし」

三根夫としては、あんな南京ねずみなんでもなかった。いま百五十ぴきぐらいいるから、一ぴきや二ぴきやるのはなんでもない。

しかし、待てよ、ここが考えどころだ。

「ハイロ君、もしきみがほしいのなら、ぼくが目にかけて、きみたちの姿や顔が見える特殊の眼鏡めがねかなんかゆずつてくれたまえ。

それならあれをあげる」

「ははあ、そういう眼鏡ですか」

「ないのかね」

「いや、あることはあるのですが……」とハイロは困っていたが、やがて決心したように、

「よろしい、あす持つてきます。ねずみと引きかえにおわたしします」

三根夫はそれを聞いて、鬼の首をとったようなよろこびを感じ

た。

この南京ねずみと、変調眼鏡の交換は約束どおりに行なわれた。ハイ口は籠にはいった南京ねずみを見てよろこびの声をあげたが、「三根夫さま。この変調眼鏡をさしあげるとはさしあげましたが、あなたさまだけでごらんくださいまし。もしそうでないと、わたしはひどい罰をうけなければなりません。どうぞぜつたいに秘密に願います」

そういつてハイ口は三根夫に一つの箱をわたした。

三根夫はその箱をもって艇へかえると、じぶんの部屋にはいつて、その箱をあけて見た。なるほどへんな形をした双眼鏡式のものがあった。三根夫は、えびすさまのような顔になった。そ

してきつそくその『変調眼鏡』をかけてみた。さて、いったい何が見えたらうか。

奇妙なお面

三根夫は、どきどき鳴る胸をおさえて変調眼鏡をかけてみた。まず、じぶんの部屋をぐるっと見まわした。

「よく見える。しかし、おなじことだ」

眼鏡をかけても、かけないでも、じぶんの部屋のようにすは、か

わりがないようであった。バンドのついた椅子。有機ガラスをはめてある格子形こうしの戸棚。テレビジョン受影機に警報器。壁につつてある富士山の写真のはいつている額。その他、みんなおなじことであつた。

いや。ただ一つ、見なれないものがあつた。それは天井の隅の、換気用の四角い穴に、赤くゆでた平家蟹へいけがにをうんと大きくして、人間の顔の四倍ぐらゐに拡大したようなもの——それは見たことのない動物の顔をお面につくつたものであつた——が、それが換か気穴んきあなのところへはめこんであつたのだ。その顔のお面は、彫刻であるのか、ほりものであるのかよくわからなかつたが、おどけた顔つきに見えた。その色は、いまもいったとおりの平家蟹をゆで

たような一種独特の赤い色をしているのだった。頭がでかくて、顔がでかくて顔の下半分はすこしすぼまっている。だから、せんす形だ。大きな二つの目がある、それは人間の眼とちがって、たいへんはなれている。耳に近いところにあるのだ。望遠レンズのような感じのする奥深い、そして光沢こうたくをもった目玉だった。その下に、象の鼻を小さくしたようなものが垂たれさがっている。それが、このお面をおどけたものにしていた。口はその下にかくれているのか、よくは見えない。目の横に、顔からとびだしたしやもじ形の丸い耳がついていた。この耳も、愛嬌あいきょうがあつた。

しかし奇妙なのは、この動物が頭のうえに持っている角つのであつた。その角は二本であつた。そして短かい棒のさきに、棒の断面

よりもすこし大きい団子をつけたような、ふしぎな形をした角であつた。そして色は緑色をしていた。顔全体は、あまり小さいでこぼこはなく、ゆつたりとふくらんだり引つ込んだりして、感じはわるくないほうであつたが、三根夫をへんな気持ちにさせたのは、いったいそのお面はなんという動物なのかわからないことであつた。

動物というよりも、お化けといったほうがいいようにも思われる。いや、お化けというよりもそういうへんな顔をした怪神かいじんとも見える。したがって、どこか人間の顔に近いところもある。牛や熊に近いところもあるが、よく見ていると、それよりも、むしろ人間くさい顔に見える。

それはまあいいとして、なんだってあんな奇妙なお面をあそこへはめこんだのであろうか。誰がやったいたずらであらうか。

「ああ、そうか。帆村のおじさんのいたずらだよ。ぼくをおどろかして、笑いころげようという考えなんだろう」そう思うと、おかしさがこみあげてきて、三根夫は声をたてて笑った。

その笑い声を、途中で三根夫は、はつととめなくてはならなかった。

「おやツ」

例のお面の大きな目がぐるんと動いたような気がしたからだ。

（お面の目が動いた。あのお面は、すると、生きているのかな。

そんなことはあるまい）

三根夫は、ぞーツときむ気を感じた。

「よく、見てみよう」かれは折り尺おじやくを机の上からとって、それをのぼしながら、机の上にあがった。かれの考えでは、机の上にあがり、それから一メートルの長さにのぼした折り尺でもって、その奇妙なお面をつついてみるつもりだった。

三根夫は、机のうえに立った。そして折り尺の一端たんをにぎって、他の端はしを高くお面のほうへ近づけた。すると、お面の両耳が、ふるふるツと蝉せみの羽根のようにふるえた。

「あツ」

つづいて、二本の緑色の角が、にゅーツと前方へまがって、倍くらいに伸びた。象の鼻みたいな凸起とつきが、ぴーンと立ってその先

がひくひくと動いた。そればかりか、お面全体が奥へひっこんだ。

「待てッ」

三根夫は、このとき、やっとそのお面が、作りもののお面ではなく、生きている動物の顔であることに気がついたので、腹をたてて、長く伸ばした折り尺をとりなおして、ぷすりとお面ではない、その怪物の顔をついた。たしかに手ごたえがあった。

が、とたんにその顔は、換気穴から消えてしまった。そしてばしやんと音がして、かなあみ金網が穴をふさいだ。

「逃げてしまった」三根夫は、ざんねんでたまらず、歯をぎりぎりかんだ。

そのとき、入口の戸をノックして、扉をひらいてはいつてきた

者がある。

見えない怪物

「おや、三根クン。そんなところで何をしているんだい。おやおや、へんなものをかぶって、それはどうしたんだ」

それは帆村莊六だった。この部屋は、三根夫と帆村とふたりの部屋であつたから、帆村がはいつてきてもふしぎでない。

「今、へんな怪物が、あそこの穴から、こつちをのぞいていたん

ですよ」

と、三根夫は帆村のほうへふり向いてそういった。が三根夫はそのとき だいきようがく 大驚愕の顔になって、

「あッ。誰のゆるしをえて、この部屋へはいつてくるんだ」

と叫びながら、椅子からとびおり、帆村のほうへ向かってきた。

「おいおい、三根クン。どうしたんだ。ぼくだということがわからんのか。落ちつかなくちやいけない……」

と、帆村が三根夫をなだめにかかるのを、三根夫は耳にもいれず、両手をふりあげて突進してきた。

しかし三根夫は帆村にとびかかりはしなかった。帆村のうしろにまわった。そこには一ぴきの怪物が、かくれていた。ひそかに

帆村のあとについて、この部屋へはいつてきたのである。その顔は、さつき天井の換気穴から下をのぞいたとおなじようなふしぎな面がまえをしていた。背は帆村よりもずっと低く、三根夫ぐらいであるが、その身体は、三根夫がはじめてお目にかかる異様なものであった。大きな赤い顔の下には、枕ぐらいの小さい胴がついていた。それが胴であることに気がつかないと、この怪物は顔の下に、すぐ脚が生えているように見えたことであろう。

とにかくその小さくて短かい胴の下には、細いぐにやぐにやした脚が三本、垂直に立って床を踏みつけていた。脚の先には、足首と見えて、魚のひれのように、三角形になった扁^{へんぺい}平なものがついていた。脚の二本は、前方左右に並んでおり、もう一本の脚

は、うしろにあった。つまりカンガルーの尻尾とおなじところについていた。

腕も左右に二本ずつあった。つまり合計すると四本である。

そのうちの二本は、左へ一本、右へ一本とでて、そうとう太い腕に見えたが、これがまた鞭むちのようにぐにやぐにやして、たいへん長くのびていて、伸ばせば床にとどくのではないかと思われた。この太い腕が、れいの小さい胴中からでているところは、肩のような形をしていた。その肩のうしろにあたるところで、首のほうへよったあたりから、左右へ一本ずつの、細い腕がでていて、これはずつとぐにやぐにやしており、肩の上のところ、なまずのひげのように、宙におどっていた。それは腕というよりも、

触手しよくしゆ というほうがてきとうかもしれない。

とにかくその四本の腕の先は、細くさけて、五本ばかりの長い指になっている。

このような怪物が、帆村のうしろについてこの部屋へはいってきたのである。だから三根夫のおどろいたのもむりではない。

「さつさとでていってもらおう」

三根夫は、気味がわるかったが、その怪物につかみかかると、それを外へ追いだした。そして扉をばたんとしめた。三根夫の手に、怪物の奇妙な肌ざわりが残った。それは、いやにつるつるしているくせに、すうーツと吸いつけるような肌ざわりのものであった。

扉に鍵をかけて、三根夫は、ほつと息をついた。

「かわいそうに。いつから気がちがつたんだろう。これはたいへんなことになった」

と、帆村は、壁のところへ身を引いて、目を丸くして三根夫をながめた。

「はははは。はははは」

三根夫は、おかしくてたまらず、大きな声で笑った。帆村には、あの怪物の姿が見えないのだ。だから三根夫のすることが、さつぱりわけがわからず、三根夫は頭が変になったのだと思つたのだ。そのやさきに、三根夫が大きな声をあげたもんだから、いよいよ三根夫は頭が変になったにちがいないと思ひ、沈痛な面持になり、

大きなため息をついた。

帆村がすべてを知るまでには、それからしばらく時間がかかった。それと、三根夫のくどくどと説明のくりかえしがひつようであつた。変調眼鏡を見せられて、帆村はやつとすべてを了解したのであつた。それがなければ、帆村はその後もながい間、三根夫のことを変だと思つていたろう。

「やあ、安心したよ。ぼくは、絶壁の上へつきやられたような気がしていたよ。そうか、そうか。これを手に入れたとは、三根クンの一番大きいお手柄だ。フーン南^{ナンキン}京ねずみが、そんなに高く売れたとは、おもしろい」

三根夫の頭が変になつたのでなかつたことが、よほどうれしか

つたと見え、帆村のひとりしやべりはしばらくやまなかつた。

秘密の指令

三根夫がはるばる地球から持つてきて、これまで飼いつづけた南^{ナンキン}京ねずみは、このようにお手柄をたてた。そして、それはお手柄のたてはじめであつたともいえる。というわけは、それからも南京ねずみはたいへんよく売れた。みんなハイ口が買いとつていくのだつた。売り手も、もちろん三根夫ひとりであつた。

その南京ねずみも、はじめとはちがって、だんだんに、いいおそえものがつくようになった。それはかわいい南京ねずみの家であつた。赤や青や黄のペンキで塗られ、塔のような形をしたものもあれば、農家そっくりのものもあつた。それから南京ねずみくるくるとまわす車も、だんだんきれいな模様がつくようになった。ハイロのよろこんだことはいうまでもない。かれはそれを、いままでの分よりももっと高価に、ガン人たちへ又売りをすることができるのであつたから。

このだんだん手のこんできた美しいおそえものは、三根夫が作る作品にしては、少々できすぎていると思われた。そうであつた。これは三根夫が作ったものではなく、テッド隊の中に、こう

いう模型もけいものを作る名手めいしゅが三、四人いて、それが他の隊員にも教えながら、毎日ほかの仕事はしないで、南京ねずみの家と車ばかりを、えっさえっさと作っているのだった。

これは、ちよつとふしぎなことに見えた。だが、これにはわけがあつた。それは帆村が考へついたことであつて、いまではテツド隊長もしようちしていることだつた。それは、このおそるべき怪星ガンから、テツド隊が脱出する秘密計画に、密接なつながりがあるのであつた。

はじめ、帆村がテツド隊長に、三根夫がれいの変調眼鏡を手に入れたことを報告した。そしてその眼鏡を使つてみると、はたしてガン人の奇妙な姿がありありと見えることや、こころみに各部

屋をまわって、この変調眼鏡でみると、かならずといっていいほどのぞき穴が用意されており、そしてガン人がしばしばそこから首をつきだして、室内のようすをうかがっているのが見られたことを告げた。

「おお、なるほど、なるほど」

隊長テッド博士も、さすがにこれにはおどろいて、さつと顔色をかえた。

「そして、いまこの部屋には、顔をだしていないのかね」

それは大丈夫であった。帆村は、変調眼鏡を三根夫に借りてきて、頭からかぶって、天井の換気穴かんきあなに注意しながら、ガン人の覗いていないことをたしかめながらしゃべっているのであった。

「それで、隊長。わたしはこのさい、三根夫をつかつてどんどん南京ねずみを売りだし、あのふしぎな働きをする変調眼鏡をどんどん買いこみたいと思うのです。どう思われますか」

「それはいいことだ。そういうものがあるなら、われわれはそれを利用して、ガン人に対抗していききたいと思うね」

「では、さつそく、その用意をしましょう。南京ねずみも、大いにはんしよく繁殖させるよう飼育班しいくはんを編成いたしましょう」

「そうだ。そのほうのことはきみにまかせる。そしていまわしは、重大なることを思いついたのだ。もつとこつちへ寄りたまえ」テッド隊長はひきよせんばかり帆村をそばへ招き、

「われわれはこの国でいまたいへんよく待遇されているし、また

いろいろ観察したところ、ガン人はわれわれよりもずっとすぐれた、科学力その他を持っているように思う。しかしわれわれはこんなところについて、とまっていることはできない。われわれはできるだけはやい機会にこの国を脱出しなくてはならない。わしは、ずっとまえから、脱出の決心をして、いろいろとその方法を考えていたところだ。きみも、わしの気持はわかつてくれるだろう」

「は、もちろんですとも」

「そこで、脱出に必要ないろいろなものを、われわれは手にいれたいのだ。その変調眼鏡もその中の一つだが、そのほかにいろいろ必要なものがある。じつは、何がこの国から脱出するのに必要

なのか、その研究もまだじゅうぶんにできていない。これからみんなですべて研究しながら、必要な脱出道具を手に入れていきたい。これは表向きにいったんでは、手にはいらぬことがわかってる。ついては、これから先、三根夫君の手によって、それをやってもらいたいと思うんだ。どうだね、きみの意見は」

「隊長にあらためて敬意をささげます。そのかたいご決心と、ねん入りなご準備のことをうけたまわって、わたしもうれしいです」

「じゃあ、その方針で進むことにしよう。これは非常に困難な事業だが、われわれは全力をあげて成功させなくてはならないんだ」

テッド隊長と帆村莊六の手は、しっかりと握られた。

計画公表

「怪星ガンから脱出するんだ」隊長のかたい決心は、ひそかに隊員全部に伝えられた。

「しかし、そのことは、あくまでガン人にはさとられないように注意をする必要がある」

もつともなことだった。怪星ガン人が隊員の待遇をたいへんよくしているのも、結局隊員たちをながくここにためておきたいからなのであろう。だからもし、隊員がここから脱出する決意を知

ったら、ガン人はきつと怒りだすであろうし、待遇はわるくなり、自由はうばわれるにちがいない。隊長が、隊員たちに極力秘密をまもるようにといったのは、もっともだ。

「みんなは、それぞれ、脱出にひつような知識をうることに気をつけていること」

捕虜生活に、気をくさらせていた隊員たちは、隊長の決心がわかったので、困難ではあるが、大きな希望をつかむことができた。だから隊員たちは、目に見えて元気になった。

ガン人の監視がないと思われる真夜中に、ねんのために変調眼鏡であたりをよくしらべたうえで、隊員たちはベッドから顔をだして、それぞれの脱出計画の意見を交換することがはやった。

「おれの考えでは、なんとかして天窓をあけることだと思う」

「なんだ、天窓だつて。屋根に天窓をあけるのかい」

「そうじゃないよ。怪星ガンの天井に天窓をあけることをいってんのさ」

「ふん、怪星ガンの天井に天窓があげられるのかい。第一、天井とはどこをさしているのかね」

「わかつているじゃないか。本艇が、このまえ、怪星ガンの捕虜となったときに、ほら、空が四方八方から包まれていったじゃないか。あの包んだしろものが、怪星ガンの天井なんだ。その天井になんとかして、天窓をあける方法はないものかな」

「さあ。どうすればいいかな。とにかくその怪星ガンの天井まで

のぼらなくちゃならないね。その天井は、そうとう高いところにあるんだろう。どこからのぼっていけばいいか、その研究が先だね」

「そうとう遠いと思うね。飛行機にのっていかないと、あそこまでいきつけないのではないか」

「えっ、飛行機だって。そんなに高いところにあるのかい。何千メートルというほどの上にあるのかい」

「いや、はつきりしたことはわからないが、あのときの感じでは、そう思った」

「ぼくも、天井が何千メートルも高いところにあるという考えにはさんせいだが……」

と、別の隊員がいった。

「しかし、どうも分らないことがある」

「それは何だね」

「本艇から、あのけいりゅうとう繫留塔をおりて、街へいくが、本艇と街と、いったいどっちが、怪星ガンの中心に近いのだろうか」

「なんだって」

「つまり、ぼくははじめ、本艇のほうが、怪星ガンの表面に近くて、街は、それより深い所にあると思っていたんだ。ところがこの頃になると、そうではなくて、そのはんたいのように考えられるんだ」

「それはちがうよ。はんたいだね。きみのいうように、街のほう

が、本艇よりも、怪星ガンの外側に近いところにあると仮定すると、重力の関係がアベコベになるじゃないか。なにしろ足の方向に、重力の中心があるはずだからねえ。だから本艇よりも、街のほうに、怪星ガンの中心に近いのさ」

「いや、それでは、怪星ガンの構造がおかしくなるよ。街の上に、本艇がいまふわりと浮いている空間があつて、その外にまた何か怪星ガンの外側の壁があるというのは、おかしいと思うね」

「さあ、どっちかしらん」脱出方法を見つけることは、あとまわしで怪星ガンの構造のほうに、やっかいな問題を起こしてしまつて、討論ははてそうにもない。

このことについて、三根夫少年は、隊長テッド博士から秘密の

指令をうけて、非常にむずかしい行動にうつることとなった。もちろんそれには、帆村莊六がついていて、できるだけ手落ちのない計画をたて、準備をしたのであったが。

三根夫の冒険である。その冒険に、隊員たちの全部の運命がかかっていた。

その三根夫は、ある日、なにくわぬ顔で、サミュエル博士邸をおとずれて、れいのハイ口に会いにきた。三根夫は、紙でつつんで、赤いリボンをかけた四角な箱を抱えていた。その箱の中にはなにがはいつているのであろうか。三根夫はいまや冒険の第一歩を踏みだしたのである。

三根夫の変装

この日ハイロは、三根夫少年をつれて、この怪星の中の名所を案内するやくそくになっていた。ハイロは、三根夫のおかげで、ずいぶん富をふやした。そして三根夫とも仲よしになって、三根夫がたのむことについては、できるだけ便宜べんぎをあたえているのだった。

「ぼく、この国の名所を見物したいなあ。まだすこしも見ていないんだもの、ハイロ君、ぼくを見物につれていってくれない」三

根夫がそういういだしたとき、ハイ口は困った顔をして、

「それはできないことですよ。この国の人でないと、この国の中を自由に歩くことはできません。見つければ、三根夫さんはすぐとらえられて、牢の中へほうりこまれ、死刑になってしまうでしょう。だから、そのことばかりはだめです。あきらめてもらいましょう」と、はつきりいった。

しかし三根夫は、あきらめなかつた。なお、いろいろとハイ口にねだったり、質問してはかれの考えをいったりした。

「それじゃあ、ほくがきみたちとおなじような顔や身なりをしていれば、それでいいんでしょう。そんなことは、わけないや、ねえハイ口君。ほくのために、きみとおなじ顔つきのお面をこしら

えてくれたまえ。頭からすっぽりかぶれるような構造になっているのがいいね。それからきみの服を貸してくれたまえ。なるべくすそが長くて、足がかくれるようなのがいい。そして、他にきみたちの仲間がいるときは、ぼくは決して口をきかなければいいんでしょう。ねえハイ口君、そうしようよ」

そういわれて、ハイ口はしぶしぶしようちしてしまった。

「じゃあ、そうしますか。しかし、へたをしないとたいへんなことになるがなあ」

「大丈夫だよ、ハイ口君。ぼくは、へまなことをやりやしないよ」
「それでは、お面と服と靴は、わしが用意をしましょう」

そこで三根夫は、怪星ガンの名所見物をする事ができるよう

になったのだ。もつとも、この妙案は、三根夫が考えついたものではなく、あらかじめテッド隊長のまえで幹部があつまつて、ちえをしぼつたもので、主として帆村莊六の考えだしたものだった。さて三根夫は、サミュエル博士の家へハイロをたずねていった。ハイロは、その日はきげんがよくなかった。

「三根夫さん。あぶないから、見物はもつと先にのばしましょう」「いやいや、早いほうがいいよ。ぼくは、もうちゃんとお土産なんかも用意してきたんだもの。やくそくどおり、すぐでかけようよ」三根夫は、ハイロがまだ知らない品物をおくりものとしてかこれにあたえた。それはオルゴール人形だった。

箱の上に、美しい少女の人形が立っていた。箱の横にあるネジ

をまき、人形の背中についている釦ボタンに、ちよつとさわるときいなオルゴールの曲がなりはじめ、それと同時に人形がおどりはじめるのだった。このオルゴール人形は、三根夫が地球を出発するときに、買物をした三つの品物のうちの一つであり、そして一等高価なものだった。このおくりものは、たいへんハイ口の氣に入つた。オルゴールの音にあわせて、人形とおなじようになかつこうで踊りだしたほどだ。悪かつたかれのきげんも、すっかりどこかへ吹きとんでしまったようである。

「そのほか、ぼくはこの箱の中に、十ぴきの南ナン京キンねずみをいれて持ってきたんだよ。まんいち、途中でやかましくいう者があつたら、これを一ぴきずつあげて、きげんをなおしてもらおうと思

うんだ。ハイ口君、よろしくやってくれたまえね」

「ああ、それはいいことだ」

「もし、見物がおわるまでに、南京ねずみが残れば、みんなきみにあげますよ」

「おお、それはたいへんけっこうです。それではあなたの仕度をはじめましょう」

ハイ口は、三根夫のために、ちゃんとガン人のお面と、服と靴とを用意してあったのだ。まず靴をはいた。こうしておけば、ガン人とおなじ足あとがつく。それからお面をすっぽりと頭からかぶった。それは胸のところまではいった。そのうえに、服を着た。すると三根夫は、すっかり頭でっかちのガン人に見えるようにな

った。

「目のところは、よく合っていますかい」

「ああ、よく合っていますよ。これはありがたい、変調眼鏡もつけておいてくれたのね」

「そうですね。それがないと、わたしたちの仲間がどこにいるのかわらなくて、きつとへまをやるでしょうからね」

「これは便利だ。さあ、でかけよう」

「でかけましょう。留守番のカルカン君にあとをよく頼んできます。そうだ、この南京ねずみのはいつている箱は、わしが持つていつてあげましょう」

「あ、それはいいんだ。ぼくが持つていく」

三根夫は、卓^{テーブル}子の上においた箱のほうへいそいで両手をのばし、それを大事そうにかかえた。じつはこの箱には、南京ねずみが十ぴきはいつているほかに、この箱は秘密の写真機と録音機になつていたのであつた。その使い道は、いまさらいうまでもなく、怪星ガンの重要な場所を写真にとつたり、脱出方法の発見の手がかりになるような音響や、ガン人の話を録音してくるためだつた。

なるほど、こんな大切な箱包みなら、ハイ口に持つてもらふことはできないはずだ。

秘密の地階へ

ハイロは、三根夫をつれて、外へでた。

ちよつと見たところ、ふたりのガン人が歩いているとしか見えない。

うしろをふりかえつたり、横を見たりいそがしく身体を動かしているほうの、すこし背の高い方がハイロだった。三根夫は、ハイロよりもすこし低い。そして、なるべく見とがめられないようにと、かたくなつて歩いている。ハイロは、三根夫がいまままでに見たことのないところへ、案内してくれというものだから、まず

地下道へはいつていつた。

これまでテッド博士をはじめ、地球人間はこの地下道へはまったくはいることを許されなかつたものである。それは工場ばかりであつた。なぜこんなに沢山の工場がならんでいるのか、なぜそんな必要があるのか、三根夫にはわけがわからなかつた。それで、そつとハイ口にたずねた。

「そんなことはわかつているじゃありませんか。われわれの生活にいるものをじゅうぶんに作るには、これだけの工場がいるんです」生活必需品の工場ばかりだつた。家具をこしらえたり、器物をつくつたり、紙や衣料をこしらえている。食物の加工をする工場も、たくさんあつた。

三根夫は一つ質問を思いついた。

「ハイロ君。この国にはどこに畑があるのかしら。果物や野菜なんかつくるにはやっぱり畑がいるのでしよう」

「ふふふ。それは、もう一階下ですよ」

そういつてハイロは、三根夫を、さらにもう一階下へ案内した。地階へおりるには、動いている道路というものがあつて、それに乗っていると、やや爪つまさき先さがりにぐるぐるとまわっているといつの間にか地階へつくのであつた。エレベーターよりもいつそう進歩した仕掛けだと思われた。

「ほほう。これは温室村へきたようだ。うわあ、すばらしくひろい温室だ」

「しいツ。声が高い」三根夫は、ハイ口から注意をうけた。

まったくすばらしい温室式の農場であつた。いや、工場のような農場だといったほうがいいだろう。何段にも野菜の植わつたたな棚があつて、それがずらりと遠くまでならば美しいしま縞を見るようであつた。太陽はない。上から特殊な光線がこの野菜棚を照らして、太陽の光りにあたるよりもずっとよく育つのだそうだ。また肥料もそれぞれの野菜に合つたものがじゆうぶんにあたえられ、植物ホルモンがうまく利用せられ、そのうえに、生長をたすける電波がかけられているので、野菜のできはいいし、その生長もたいへんはやい。

三根夫は、べつのところ、くだもの果物畑を見た。これもきちんと

箱にはいつて、ならんでいる。木の太さの割合いには、すばらしくたくさんのみごとな実がなつていた。これも人工的の特殊の栽培法が行なわれているためである。おなじ階に、ひろびろとした牧場があつた。また養魚場があつた。どつちも三根夫をたいへんおどろかせた。というのは、牧場には、牛や豚の姿はなく、三根夫がはじめて見るふしぎな獣が飼われていたからだ。また、養魚場で見た魚も、地球上であまり見かけない種類のものであつて、なんだか気持がへんになつた。

そういうことについていちいち記していくと、きりがないので、あとはとくに重要なものについてだけ、のべておこう。もう一階下へハイ口が三根夫をつれこむとき、

「三根夫さん。これからは気をつけてくださいよ。この国の心臓にあたる重要な、そして秘密な場所ですからね。それは兵器工場なんです」と、耳うちした。兵器工場があるというのだ。

やっぱりそうであったか。怪星ガンも、兵器を作って、持っているのか。どんな兵器を作っているのかと、三根夫は好奇心を強くした。ハイロに案内されて、そこへ下りていってみると、その工場の大仕掛けなのにおどろいて、思わず「あッ、これは……」と叫んで、あわてて口をとじた三根夫だった。どうしてこんな大工場があるのかと、あきれるばかりだ。そこに働いているガン人の数も、おどろくほど数が多い。それにくるくるごうごうとまわる大小無数の工作機械が、どんどん作りだしていくそのスピード

の早いことといったら、目がまわるほどだ。

これを見ても、ガン人は、地球人類よりもずっと感覚もするどく、能力もすぐれていることがわかる。しかし、そこに作りだされる兵器はいは、いったいどうして、どのように使うものだかさっぱりわけがわからないものが多かった。三根夫は、それについて、いちいちハイ口にたずねたく思ったが、あいにくどこにもたぐさんのガン人の職工がいるので、三根夫はきくことができなかつた。なぜなら、三根夫は頭からガン人の首のつくりものをかぶっているのです、これは三根夫が口をひらいても、つくりもののほうは口をあけないから、すぐあやしまれてしまう。

そのかわり、三根夫は、れいの写真機と、録音機を中にひそま

せた四角い箱をさかんに活用して、生産されつつある兵器の写真をと、また職工たちがしゃべっていることばを録音した。

この広い兵器工場を見終ったときには、三根夫はすっかりくたびれてしまった。それで動く道路のそばにしゃがみこんでハイロに、しばらく休ませてくれといった。

すごい動力室

ハイロは笑って、

「それでは、これをたべなさい」と、青い餵玉あめだまのようなものを二つ、三根夫の手のひらにのせてくれた。

「これは、なあに」

「くたびれが、一ぺんにとれる薬です」

「それはありがたい。しかしこんなものを頭からすっぽりかぶっているから、たべられやしない。どうしたらいいかしらん」

「ははあん。それなら、わしの身体のかげで、そのかぶりものをぬいで、大急ぎでたべなさい」

「なるほど。それじゃあ頼みますよ」

三根夫は、ハイロのかげでガン人のお面を脱いだ。せいせいした。青い玉二つを口の中へほうりこみ、それからついにと思っ

て、お弁当に持ってきたパンをむしやむしや。それから水をがぶがぶ。そして目を白黒しながら大急ぎで、お面をもとのようにすつぽり頭からかぶった。

「三根夫さん。どうです。身体が軽くなつたでしょう」

「ああ、ほんとだ。さっきのくたびれが、どこかへいつてしまつた。よくきく薬だね」

三根夫は元気をとりもどして、ハイ口について名所見物をつづけた。

「もう一階下にあるところは、この国で一番重要な所なんです。ちよつと見るだけで、がまんしてください。何しろ監視の目が多くて、ひどく光っていますからね」

「そこは、何をするとところなの、この国の」

「動力室です。つまりこの国を動かしているあらゆる力を発生するところですよ。操縦室もあります」

なるほど、これは重要な場所だ。ふたりは、一階下へおりたが、まちがってこの階へおりたようなそぶりを見せ、五分ばかりでそこを引きあげ、上の階へもどった。

しかし三根夫は、その短かい時間に、はつきり見た。すごいエンジンがずらりとならんで、ごうごうと動いていたことを、また一段高いところに、透明なガラス張りのような台があつて、そこにはものものしい作業衣に身をかためたガン人が二十人ほど、複雑な機械の山のようななかにそれぞれ部署について、しきりに

手をふり、身体を起こして機械を調整していた。そこが怪星ガンの操縦室にちがいがなかった。なにしろすごい動力室であった。科学と技術の粋をあつめた大殿堂とでも、いいたいほどの大壮観であった。

「さつき見た大きなエンジンは、何を原動力にしているの」三根夫はハイ口にたずねた。

「いまのところ、旧式だけれど原子力エンジンを使っていますけどね。そのうちに、もっと能率のよいものに改造する計画があるんですって」

「へえ、原子力エンジンは旧式だというの」

「あれは消極的であるから、能率がよくないし、大きな装置がい

る割合いに、動力があまりでてこないといっていますよ」

「そうかなあ。原子力エンジンといえば、すばらしい動力をだすものだがなあ」

「この国の技術は、循環性じゅんかんせいの強力なエンジンを設計するといっているんです。つまり、出したものを、またもとへ入れて、まただすという仕掛けですよ。そうなれば、いままでのように原料を使いすてるというやり方は、損だといっています」

ハイロは、エンジンのことについても、そうとうの知識を持っているようだ。

「ハイロ君。この国は宇宙のなかを運行していくがその力はやっぱりあの動力室からでているの」

「そうですとも。この国は、恒星^{こうせい}や遊星^{ゆうせい}などちがって、われわれの手でつくったものですからねえ。宇宙を旅するには、もちろん動力がいるわけです。ですからあの動力室は、この国にとつてはひじょうに大切なんです」

動力室が非常に大切なものであることは、よくわかった。怪星ガンの大きさから考えて、こんな大きな物体が、宇宙のなかを快速力でとんでいくには、毎秒たいへんな動力をださなくてはならないであろう。地球人類の頭脳と科学力とでは、とてもやれないことだ。三根夫は、怪星ガン人の智能の深さと大いさに、いまさらながらおどろかされた。

（このようなガン人に打ちかって、われわれテッド隊員が、うま

く怪星ガンから脱出することがはたしてできるであろうか）それを考えると、三根夫は気がめいつてきた。

問題の天蓋てんがい

三根夫が、へんな顔をして、ふさぎこんでしまったので、ハイ口は心配して、声をかけた。

「誰でも、動力室を見ると、気がふさぐものです。それは、もし動力室がこわれたら、われわれはどうなるかなあという不安が、

誰の心にも起こるからです。まあ心配しないほうがいいですよ。この国にも、そのほうの専門家がたくさんいるんだから、動力室のことはその人たちにまかせておくことですよ。そしてわれわれは、もっと楽しいことばかり考えるのがいいんです」

そういうところを見ると、ハイ口もやつぱり動力室見学は、愉快なことではないらしい。

「ハイ口君のいうとおりだ。はやくここをでて、もっと愉快なところを見物させてくれたまえ」

「さあ、愉快なところというと、どこにしましょうか。映画見物か、それとも音楽会へいつてみますか」

「いやいや、そんなところは、いつでも入場できる。きょうは、

めつたに見られないところを見物したいのだよ」

「それでは、どこがいいでしょうね」

「そうだ。ずんずん上へあがって、この国の一番外側へでて見たいね。さあ、そこへつれていってくれたまえ」

「うーん。それは……それはちよつと厄やっかい介かいだなあ」ハイロは、

困ったという顔をした。しかし三根夫としては、怪星ガンの一番外側へでて、そこがどんなになっているかを見てくるのが、予定のなかにはいつていた。なんとしても、それを知る必要がある。「だって、ぼくはぜひ見物したいのだから。ねえ、ハイロ君。ぜひつれて行ってよ。はじめのやくそくで、どこにでも案内してくれるはずだったね」

「でも、あそこへいけば、かならずつかまって、取調べをうけるにきまつているんですからねえ、そうすると、化けの皮かわがはがれますから、えらいことになりますよ」

「ここに南京ねずみが十ぴき、そっくりそのままになっているから、これを使用すればいいさ。さあ、つれていってよ」

「天蓋てんがい見物けんぶつは、よしたほうが安全なんですけどねえ」

「テンガイだって。それは、どこのこと」

「つまり、天蓋ですよ。空よりもずっと上にあつて、この国を包んでいるものですよ。その内側には空気がありますが、外側には空気がないんですよ。つまり天蓋が、境さかいになっています」

「見たいね。そういう話をきくと、よけいに見たくなる。さあハ

イロ君。天蓋見物にすぐでかけようよ、ね」三根夫の熱心にまけて、ハイロはついにしようちをした。ふたりはもとのにぎやかな町へでた。その町をどんどん通り越して、町はずれといったところへでると、一つの妙な建物があつた。それはかさが開いた松茸まつたけみたいけな建物だつた。もつとも屋上はたいらであつた。

その屋上へでると、そこにはかわいいヘリコプターがあつた。腰かけに、小型のヘリコプターを仕掛けたようなものであつた。これに腰をかけ、肘ひじかけのところにあるいくつかの操縦そうじゆう鈕ボタンをおせば、空中を自由自在にかけまわれるのだつた。

ハイロは、ヘリコプターを二台借りた。もちろんその一台には三根夫をすわらせ、バンドでしばりつけた。ハイロはじぶんの身

体にも、もう一台のほうをしばりつけ、かんたんな操縦法を教え
た。

「こうすれば、立っていることもできるんですよ」

腰をかける座席のところをはずすと、そのまま立っていられた。
着陸のときは、こうして立ったままおりとぐあいがいいそうだ。

「さあ、のぼりましょう。ちよつと高いですから、目をまわさな
いように、わたしについていらつしやい」そういつてハイ口がと
び立った。そこで三根夫もつづいて操縦釦をおした。

「あ、これは愉快だ」身体がきゆうに軽くなった。スーツと空中
へとびあがっている。頭の上と座席のうしろとにプロペラがまわ
っているが、あまり大きな音がしない。ぐんぐんのぼっていった。

三根夫の感じで五千メートルぐらいのぼったとき、ハイ口が横へきて、上を指した。

「ほら天蓋が見えるでしょう。格子こうしの目のようになっていて、その上に何かのつているのが見えませんか」

「ああ、見える。なるほど、あれが天蓋か」

とうとう問題の天蓋のそばまできた。天蓋の構造がよくわかっていないと、とても脱出計画は成功しないのだ。三根夫は緊張の極きよく、身体がぶるぶるふるえだした。

巨大なる天蓋てんがい

三根夫の胸は、はげしくおどつた。見える！ 頭上、手のとどきそうなところに、謎の構造をもつた天蓋の、その裏側が見えるのだ。

はるかに下の町から仰いだところでは、天蓋は、灰色または青色の布を張つたように見えていたが、こうして近くにきて観察すると、そんなやすつぽいものではなかつた。それはすこぶる大きな軽金属製、あるいは樹脂製じゆしと見えるだだっ広い天井が、はてしも知れずひろがり続いているのだつた。それはたいへんしつかりしたものに見えた。

その天井の下には、やはりおなじ色の吊り橋が、網の目のように、縦横にとりつけられ、どこまでものびていった。吊り橋は、天井から十メートルほど下にあり、パイプを組立てたような構造ではあったが、なかなかの偉観であった。しかもこの吊り橋を、天井の偉大さにくらべると、まるで講堂の天井に、小さい蜘蛛の巣がかかっているほどにしか見えなかった。

「三根夫さん。もうちよつと向うへいったところで、あの吊り橋へ下りましょう。ゆっくり飛んで、ついていらつしやい」

案内者のハイロが、ひとり乗りの豆ヘリコプターを三根夫のそばへ近づけて、そういった。

「ハイロ君。あの天蓋を外へぬけられないのかね。ぼくは、天蓋

の外へでてみたいんだがね」

それは三根夫がじぶんの使命をはたすために、ぜひそうしなくてはならないことだった。

「それは、吊り橋へ着いてからあとのことにしてください。誰にも知られないで、あの吊り橋へあがることは、ひと苦労なんですからね。とにかく、わしのするとおりに、ばんじをやってください」

「さあ、速度をおとして……」そういつてハイ口は、きりきりと上へのぼっていった。

いよいよ天井は近くなった。吊り橋にヘリコプターのプロペラがぶつかりそうだ。ハイ口は、巧妙に飛んでいる。三根夫は、そ

のとき、一つの発見をした。

「ははあ、あれがさんぼし棧橋だな」

それは二、三十メートル前方に見えてきた環かんじょう状になつてい
る吊り橋だった。そこには、四方からのびてきた吊り橋が、丸い
環状の吊り橋をささえているのだった。どうもその環状になつた
穴のところへ、下からヘリコプターがのぼつてはいるのではない
かと思つた。

まさに、そのとおりだった。ハイ口はうしろへふりかえつて、
三根夫に合図をすると、ずうツとその環のなかへはいつてのぼつ
ていった。三根夫が見ていると、ハイ口のヘリコプターは、うま
く吊り橋にとりついたようであつた。そこでかれもまねをして、

そちらへ近づいていった。

環状の吊り橋は、かなり大きいものであつて、こんな豆ヘリコプターなら、同時に四、五十台が、はいれそうであつた。それをくぐつて、のぼつていくと、吊り橋の内側が、こういうヘリコプターがちよこんと乗るのにつごうがいいように、栈橋になつていた。ハイロの指図により三根夫は、ハイロのヘリコプターのすぐとなりに着橋した。そしてハイロに手つだつてもらつて、ヘリコプターにしばりつけていたバンドを解き、身体の自由をとりもどし、はじめて吊り橋の上に立つた。三根夫は、うっかり下を見た。「うわッ。目がくらむ」

ふらふらとして、らんかんにしがみついた。

「あ、注意をしてくださいよ。下へ落ちると、死にますよ。そして化けの皮がやぶれて、わしは陰謀加担者として罰せられますからね。さあ、手をとってあげます。下を見ないで、上のほうばかり見ているのです。こっちへいらつしやい」

と、ハイ口は三根夫の手をひっぱった。

「待つてくれたまえ。大事な品物を、ここへおいていつてはたいへんだ」

三根夫は、さつき目がまわったときに思わず下においた秘密のカメラと録音機のはいつている四角い箱包みを、いそいで手につかんで、腋わきの下したにかかえこんだ。

ハイ口は、前後へ気をくばりながら三根夫の手をとって、環かんじ

状ようばし橋の上を進む。

三根夫のほうは、注意をこの吊り橋と天井の構造にすっかり気をうばわれてそのほうへきよろきよるといそがしく目を走らせている。

(あッ、あそこに階段がある。やっぱりそうだ。あの階段をのぼると、天蓋の外へでられるんだな)

構築物は、みんなおなじ色をして、おなじ明かるさに照らされているので、よほどそばまでいかないと、階段や曲がり角や広間があることがわからない。なるほど、これでは下界から見あげても、天井や吊り橋などが見わけられないはずだ。

「ハイ口君。はやくあの階段をのぼろうじゃないか」と、三根夫

はずんずんと足を早めた。

「あ、お待ちなさい。これから先が危険なんですよ。あの階段の下までいったあとは、ぜつたいに、声をださないこと、それから足音をできるだけたてないこと、だまって上まであがり、それから一分間外を見てそれからまただまっておりてくるのですよ。いいですか」

「わかったよ、ハイロ君」

てんがい
天蓋の頂上
ちようじよう

ハイ口と三根夫は、あたりを警戒しながら階段に近づいた。さいわいに、誰もいないようすである。

「いよいよ、ここから階段をのぼりますが、ぜったいに声をだしてはだめですよ、いいですか」

ハイ口は、もう一度ねんをおした。そしてまんいち監視隊員に見つかったときは、三根夫は口がきけず耳が聞こえないということにし、ハイ口が監視隊員に口をきくから、そのつもりでと、三根夫にいいふくめた。それから階段をのぼりはじめたのである。

その階段は、螺旋形らせんけいにねじれて上へあがっていくようになっていた。階段のはばはかなり広がった。それをのぼりながら三根

夫は壁がどんな材料でつくつてあるのか注意して見た。その材料は、吊り橋や天井と同じ材料でできていると思われた。灰色だった。ちよつと指さきでさわつてみた。つめたいかと思いのほか、なまあつたかかった。そして弾力が感じられた。

(やはり、樹脂じゆし製らしい。しかしこんなに丈夫な樹脂にお目にかかるのははじめてだ)

地球にある樹脂とはだいぶちがつて、高級品だった。階段の高さは、三十メートルより低くはないと思われた。この三十メートルは同時にこの天蓋の厚さでもあつた。すばらしく厚い天蓋だ。

その天蓋が、するすると伸びていつて大空をおおつたのを見たのだ。こんな厚いものが、どうしてあのような速さで伸びていつ

たのであろうか。そのふしぎな謎は天蓋の構造にかかっているのだ。

（いったい、天蓋は、どんな構造になっているんだね）と、三根夫はハイ口にたずねたくなった。が、それはできなかつた。ハイ口のむずかしい目つきにぶつかつたからである。

（三根夫さん。一口も、口をきいてはいけませんぞ。さつき注意しておいたでしょう）

と、ハイ口は無言で三根夫をしかりつけているのだ。だからといって、三根夫はそのことをあきらめることはできなかつた。そこで、思い切つて、手まねでもつて、ハイ口にたずねた。通ずるか通じないかわからないが、壁をたたくまねをし、そしてその構

造はどうか、中はどうなっているかを教えてくれと、一生けんめいに手まねを工夫して、ハイ口にたずねた。

ハイ口は、はじめは、あきれはてたという顔つきで、目を白黒させていたが、やがて、ハイ口は手まねをもって答えだした。手まねというやり方を、ハイ口はおもしろく思ったから、三根夫に答えてやることになったのであろう。

(なるほど。そうかい)

三根夫は、やはり手まねであいづちをうった。ハイ口の手まねの全部がわかったわけではないが、そうしないとハイ口が手まねのおしやべりをやめてしまうおそれがあったから、ほどよくあいづちをうったのである。それで、ハイ口の手まねをかいどくして、

わかったように思うことは、この天蓋をつくっている壁体はすくなくとも三重になっているらしい。中は袋のようになっていて、その中に原子力であたためられた或るガスがたまっているらしい。そのガスは、ぎっしりと袋の中につまっているので金属おなじくらいに固く感ぜられる。その外に、あと二重に樹脂のような生地（生地）の袋がかぶさっていて、ガスが外へもれることをふせぐと共に、外部から砲弾などをうちかけられても、はねかえす力を持たせてあるものらしい。

らしい、らしいの話ばかりで、正確なことはわからないのが残念だが、いずれ町へかえつてから、ハイ口（ハイ口）にたずねなおせばいいであろうと、三根夫はがまんした。そして残りの階段をひと息に

のぼり切つていよいよ一番高いところに立つた。それは、丸い小こ天井てんじょうがはまつていた。その小天井は透明であつた。その証拠に、天井をとおして、星がきらきら輝いていた。

（ああ、きれいだなあ。ひさしぶりに星空を見るんだ。ああ、きれいだ）

と、三根夫は、いいたいことばを口の中へおしこんで、透明天井を通して大空を仰いだ。そしてその姿勢で身体をぐるつと回転して、ちようど百八十度ばかりまわったとき、かれはまつたく意外にも、すぐ近くに、ガスタンクほどの大きさの、銀色にかがやいたすばらしい球きゅうが、宙に浮いているのを発見した。遊星だ。なんとという大きい星だろう。かれは息をのみ、おどろきとおそれを

もつてその星の面を眺めたが、とつぜん三根夫は、心臓が破れるほどの第二の驚愕きょうがくにぶつかった。

というのは、その星の面には、模様のようなものがついていて、それは海と陸とが区別されて見えるのであった。三根夫がびつくりしたのはその模様の一つが、他のものよりもはっきりしていて、それが南アメリカの形によく似ていることだった。いや、似ているどころではない、南アメリカにちがいがなかった。すると、いま目のまえに見えている星こそ、地球なのだ。地球だ。地球がこんなに近くにあるうとは。

「うわーッ。地球だ。なつかしい地球だ。これはどうしたというんだらう！」

三根夫は感激のあまり、とうとう大きな声をだしてしまった。

ハイ口が、あわてて三根夫のそばへかけよつたが、それはもうおそすぎた。

意外な相手

（しようがないねえ。だから、あれほどやかましくいつておいたじゃありませんか）と、いたげに、ハイ口は三根夫の口をおさえつけ、そして三根夫の腕をしっかりとつかまえて、いそいで階段

をおりようとするのであった。三根夫は、なつかしい地球に見とれていて、その場を動くのがいやらしい。

（だめですよ。いまのうちに、さっさと逃げださないと、いまのあなたの声を聞きつけて、武装した監視隊員が逃げ路をふさいでしまいますぜ）

ハイ口は、そういいたい気持でいつぱいだった。ぎゅうぎゅうと力をこめて、三根夫を階段のおり口へひっぱっていこうとする。

「こらッ、何者だ。そこ動くな」

とつぜんひとりの大きなガン人が姿をあらわして、三根夫をつかまえた。

「しまった」三根夫は舌うちをした。それが、いつそういけなか

った。

「おや、おまえは地球人だな。地球人が、許可なしでこんなところをうろついているなんて、けしからんじやないか。おい、面をぬげ」ガン人は、三根夫のかぶりものの上から、ぼこぼこたたいた。じつに、するどく耳のきくガン人だった。

「まあ、待ってください」ハイロが、三根夫をうしろにかばつてまえにでた。するとガン人は、ハイロをなぐりつけようとした。ハイロは、あやういところでそれをさけた。

「まあ、待ってください。この者は、地球人ではなく、やはりガン人なんです。しかし口はきけなくて、そのうえに耳は聞こえないですから——」

「ばかをいうな。ごま化されんぞ。地球人にちがいない。その証拠には、そやつは地球人のことばで二度も叫んだじやないか。さあ、正体をあらわせ」

そういうと、ハイロよりも背の高いそのガン人は、ハイロの頭越しに両手をのばして、三根夫のかぶっているお面の両耳をつかむと、手前へひっぱった。お面はすっぽりとぬけて、下から三根夫のまっ赤かひたいな額いがあらわれた。

「やつ、きさまはテツドの部下の三根夫という子供だな。いよいよけしからんことだ。なにしにこんなところへきたか」

そのガン人は、三根夫を知っていた。間にはさまっていたハイロは、これはめんどうな事になったと思った。このガン人のた

めに三根夫がつきだされるとハイ口自身も、そうとう重い刑罰をうけなくてはならないであろう。そう思ったハイ口は、とにかくここで相手をうちたおし、その気絶しているまに三根夫の手をとって逃げるならば、あるいはじぶんの身柄をみがらかくすことに成功するかもしれないと考え、全身の力をこめて、大男のあごをつきあげた。

不意をくらった相手は「うツ」とうなると、うしろへよろめいて、仰向けあおむにどたとたおれた。すると意外なことが起こった。かれの頭部がはずれて、ころころと向うへころげたのであった。ということ、かれもまたお面をかぶっていたというわけだった。

「この野郎」くるつと一転すると、かれはすつくと立ちあがった。お面のかわりに、地球人のまつ赤な顔が、怒りと不安にゆがんでいた。その顔に見おぼえがある三根夫だった。

「やあ。ガスコだ。スコール艇長と名乗っていたガスコだ」

読者はおぼえていられるであろう。この物語のはじめにしゅつぽ出

没つした覆ふくめん面の怪人かいじんガスコであった。またギンネコ号の艇長

スコールだと名乗って、テッド博士座ざしやう乗のロケット第一号のな

かへ変装してやってきた怪漢だった。そのとき三根夫は熱線をか
れの変装のうえにかけ、つけひげなどをとかしてうち落とし、化
けの皮をひんむいてやったことがある。その怪人ガスコが、こん
な所にいたのである。

「ふふん。おれを知っていやがったか。ようし、そうなれば、なおさらきさまたちを許しておけないぞ。ここで、ふたりとも、息の根をとめてやるんだ。こら、動くな。手をあげろ」

ガスコの両手には、いつのまにか、二挺ちようのピストルが握られ、その銃口は三根夫とハイ口の胸もとに向いていた。もう、いけない。三根夫は両手をあげた。そのとき撮影録音機のはいつている包みがごとんと音をたてて下に落ちた。ハイ口も、三根夫とおなじように手をあげた。

信号灯

ガスコは、すつかりいばつてしまい、

「ははは。ざまを見ろだ。ここできさまたちふたりを片づけてしまえば、おれの立場は、ますます安全となる。おれは運がいいよ」と、みようなことをいった。

三根夫は、ちらりとハイ口のほうを横目で見た。するとハイ口は、首も手足もなく、服だけが両手をあげていて、ハイ口の表情を知ることができなかつた。これには困つた。

ガスコは、ハイ口のほうへ寄つてきた。そして一挺のピストルをポケットにしまい、そのあいた方でハイ口の頭を手さぐりして、

かれの大きな耳をつかんだ。

「やい。きさまも、はやくお面をぬぐんだ」

「あ痛た、たツたツたツ」ガスコは、ハイロが正真正銘のガン人であることにもつと先に気がついていなくてはならなかった。ハイロの頭や手足が見えなくなったときに、ハイロこそガン人のひとりだとさとするべきだった。ところがガスコは、はじめからハイロを、三根夫とおなじ地球人であると思いこんでいたために、この重大なまちがいをしでかしたのだ。

ハイロは、いやというほどガスコに耳をねじられたので、すっかり怒ってしまった。

「らんぼうなことをする奴だ。おまえさんは何者だ。見れば地球

人じゃないか。地球人のくせにガン人であるわしを殺すというのかい」

と、ハイ口にせまられて、ガスコは返事につまった。ガン人を殺すことは許されないので。まんいちそんなことをしたら、あとで極刑きよつけいになるのはわかり切っていた。

「いや。きさまはガン人なものか。地球人にちがいない。はやくそのお面をぬぐんだ。ぬがないと、このピストルがものをいうぞ」ガスコは、苦しまぎれに、ハイ口を地球人といはって、この場の不利をごま化そうとした。ハイ口は、ますます怒った。

「ばかなことをいうな。おまえさんじゃあるまいし、顔の皮をむいて、下からもう一つ顔をだすなんて、そんな器用なことができ

るものか。わしはガン人だ。見そこなってもらうまい」

「いや、ガン人なものか、地球人だ。引つ立てて、警備軍へ渡してくれろぞ」

さすがのガスコも、相手がガン人とわかつては、ピストルの引きひ金を引くわけにいかなくなり、こんどは警備軍へひき渡すといきかねいだした。

このとき三根夫がハイ口のところへ寄った。そしてハイ口の耳に、なにかをささやいた。ハイ口は大きくうなずくと、目を皿のようにして、ガスコのほうへ一歩前進した。

「わしはガン人として、おまえさんに聞きただすことがある。おまえさんは、何の理由があつて立入り禁止の天蓋をうろうろして

いるのかね」

「うむ。それは……」

と、ガスコは痛いところをつかれて、醜い顔をいつそうゆがめて、ことばにつまった。

「まだおまえさんに聞くことがある。おまえさんが、あそこへおいてきた長い筒は、あれはいつたい何に使うものかね。あれは強力な信号灯のように見えるが、おまえさんは、あんなものを持って、ここで何をしていたのかね」

「ちがう、ちがう。そんな大それたものではない。それに、あれはおれの持ちものではなくて、ここで拾ったものだ」

ガスコは、しどろもどろの返答をしながら、目を横に走らせて

三根夫をにらみつけた。

あの三根夫めが、ハイ口にちえをつけたなとうらめしくてならないのだ。

「拾ったものだって。よろしい。ガスコ君とやら。それでは、でるところへでてじぶんで説明するがいいだろう。わしは、きみを警備軍へひき渡してやる」

「いや、おれがきさまらを警備軍へひき渡すんだ。きさまたちこそ、こんなところへあがって、あやしい行動をとっていたことは明白だ」両方が、たがいにいい争っていたとき階段の下のほうにあたって、たくさんの足音が入り乱れて、こつちへ近づくのがわかった。

「きたー！」

「きたな。さあ、たいへん」

「ちえッ。しまった。きさまたちがぐずぐずしているから、こんなへまなことになるんだ」

三根夫とハイロ、それにガスコも、三人が三人とも、顔色をかえた。近づくあの大ぜいの足音は、監視隊附の武装ガン人たちが、あやしい者ありと知って、かけつけてきたのにちがいない。すると、あとは三人とも、この場で逮捕されるばかりだ。三人は、それぞれので、その場に足がすくんでしまった。

ところが、大ぜいの足音は、階段をのぼってはこず、意外にも階段下をかけぬけて、いってしまった。しかし次の一隊が近づき、

この一隊もまたかけぬけていった。そのとき警報が高声器からとびだした。

「第一級の非常事態が起こった。ガン人はただちに非常配置につけ！」

警報はくりかえし叫ばれた。第一級の非常事態とは何事であるうか。このときガスコが、にやりと気味のわるい笑みをうかべた。

恐怖きょうふの敵

「たいへんだ。これは、たいへんなことになりましたよ、三根夫さん」

ハイロは顔色をかえて、三根夫にいった。

「どうしたの。第一級の非常事態が起こったというが、それほどんな事態なの」

三根夫はたずねた。

「第一級の非常事態というのは、わたしたちがいまこうして住んでいる星が破壊の危険にさらされているということなんです」

「ガン星が破壊するって。それはなぜ破壊するの」

「なぜか、ここではわかりません。はやく下へおりましょう。わたしもすぐじぶんの配置につかなくてはならないんです」ハイロ

は三根夫をうながして、天蓋のところから階段をおりかかる。

するとうしろにガスコの声が聞こえた。

「わっはっはっはっ。ざまを見ろ。どいつもこいつも、泣き面なつらをして吠ほえられるだけ吠えろというんだ。宇宙第一の自由星だなんていばつていて、このざまは何だ」

三根夫はハイ口の腕をひきとめて、ガスコの無礼きわまる悪口をがまんして聞き入った。

「怪星ガンがなんだい。ガンマ和尚おしょうがなんだい。おれがちよつと宇宙の一角へむけて信号すればたちまちガン星は死相しそうをあらわす。ふふん、おれの力も、こうなるとなかなかたいたしたものだぞ」

ガスコは、好きなことをしゃべり散らしている。三根夫はたい

へん腹が立った。

「ハイロ。ちよつとここに待っていてくれたまえ」

「えッ。どうするんですか三根^{みね}さん」

「どうするって、大悪人ガスコをあのままにしておけるものか。

あいつはスパイを働いているのにちがいない。あいつはさつき発令された非常事態に深い関係を持っているのだ。ね、ほら。あいつの持っていた長い筒ね、あれは信号灯だよ。あれを使って、このガン星の中にもぐりこんでいる陰謀団に合図をしていたのにちがいない。すぐ取押えて、つきだしてやらねばならない」

三根夫は、ガスコが地球人のくせに、こんなところで地球人の面^{つら}よごしになるようなことをして、すこしも恥じないのをこのま

ま見のがしておくことはできなかつた。

「いや、それはよしたほうがいい。ここでガスコをおさえると、わたしたちがなぜこんなところへまぎれこんでいたかと、ぎやくにこつちが牢の中へぶちこまれますよ、それよりも、一刻もはやく下街したまちへもどることにしましょう」

ハイロのいうことは、理屈にかなつてゐる。三根夫は腹が立つて立つて、ガスコをなんとかしないと腹がおさまらなかつたが、このハイロのことばにしたがわないわけにいかなかつた。

二人は階段をおりた。吊り橋のような廊下には、ガン人たちが真剣な顔付になつて、あるいは左へ走りあるいは右へ走りして、大混乱をきたしている。

「さあ、はやくヘリコプターのところへいきつかないと、誰かに使われてしまうかもしれない。さあ、はやく」

ハイ口はそういつて、三根夫の手を痛いほど握ると、人波をわけて矢のように走った。

走りながら三根夫は、この非常事態がどうして起こったのか、どんな状況なのかを知りたいと思つて聞き耳をたてながら走る。その間にかれは切れぎれながら次のような短かいことばを耳にした。

「ぐんぐん追いついてくるそうな。こっちはスピードがでない。いずれ追いつかれてしまうよ」

「……また襲われるのか。あの賊^{ぞくせい}星とはもう縁がきれたと思つ

ていたんだがなあ」

「……このまえの賊星プシではないらしいっていうことだぞ。プシ星よりは十数倍も大きな構築星こうちくせいだつてよ」

「……分つた、わかつた。竜骨星りゆうこつせい星座生まれのアドロ彗星すいせいだ。

もうだめだ。あいつに追っかけられては、もうどうにもならん」

「アドロ彗星の尾に包まれてしまえば、一億五千度の高温に包まれるわけだからぼくたちの身体はもちろん、構築物も工場も何もみんなたちまちガス体となつてしまふだろう。ああ、おそろしい目にあうものだ」

「……そう悲観することはない。ガンマ王もそこはよく研究したいさくが考えてあるはずだ。ほら、耳をすましてあれを聞け。」

エンジンの音が強くなったじゃないか。わがガン星もいまずんずんスピードをあげているぞ」

「アドロ彗星に追いつかれるか、うまく逃げられるか。はあ、これはどうなることか。やっぱりアドロ彗星にくわれてしまうんじゃないかなあ」

「けつきよく、ちえくらべさ。ガン人のちえと、アドロ彗星人のちえと、どっちが上かということさ」

「それははつきりしているよ。けたちがいだ。まえからアドロ彗星人は宇宙を支配するだろうといわれているじゃないか」

急ぐハイロ

三根夫とハイロは、ようようにヘリコプターをつないであるところへいきついた。

ところが、三根夫のヘリコプターは、見えなかった。誰かが使つて、乗つていったものらしい。

「困った。一つしかない」ハイロが顔をしかめた。

「一つでもいい。ハイロ君。きみが乗りたまえ」

「だって、三根夫さんをここに残しておけないよ」

「いいんだ。ぼくはきみのヘリコプターの下にぶらさがっており

る。下街へつくまでぐらい、なんとかがんばりとおすよ」
したまち

「息がとまっても、しりませんよ」

「そのときには、降下ス皮ードをすこしゆるめてもらうさ」

「よろしい。それでは早くこれへ……」

ハイロはヘリコプターの座席にはいった。かれはじぶんの身体をゆわく皮バンド四本をじぶんの用には使わないで、外に垂たらした。そしてすばやく金具のところを結びあわせると、三根夫のほうを見て、皮バンドをたたいてみせた。

三根夫はりようかいした。そして尻ごみすることなく、そのバンドの中へ両脚をつっこんだ。

「よろしい。出発だ」と、三根夫はバンドを両手でつかんだ。

「でかけますよ」ヘリコプターは吊り橋をはなれて、すうすうと下へまいおりにいった。

それから下界へ到着するまでの時間の長かったことといったら、ハイ口は座席からのびあがって、下にぶらさがっている三根夫の息づかいや、顔色を見ながらスピードを調節していったんだが、マスクも酸素管もない三根夫にとっては、この降下も楽ではなかった。かれはしばしば息がとまりそうになり、心臓はその反対にめちやくちやにはやくうった。でもかれはがんばりとおした。もつとも半分ばかりおりたあたりで楽になった。それから下はもちろんたいへん楽であった。

「やれやれ、助かった」

と、三根夫はため息をついた。そしてれいの大事な撮影録音機の包みが、ちやんとじぶんの腰にぶらさがっているのをたしかめて安心した。下界げかいへおりると、さいわいにとがめられないで、地下へもぐることができた。すべり台式の降下路こうかろにとびこんですーいすーいと地階を何階も通り越して、おりていった。そうしてやつとじぶんたちの居住区きよじゆうくまでたどりついた降下路を街へでてみると、どうしたわけであろうか、人ツ子ひとり見えない。まるで、死んだ町のようにであった。

「誰もいないよ。これはいったいどうしたのだろうかね、ハイロ君」

「わたしはおくれてしまったんですよ」

「おくれてしまったとは……」

「市民たちは、すでにめいめいの配置についてしまったのです。

わたしは、大変におくれてしまった」

「でも、この町を空つ^{から}ぽにしておくことは危険じゃないかね。やはり警備員をおかないと安心ならないと思うがね」

「いや、こんなところなんか、どうでもいいのですよ。市民たちの多くは、機関区のほうへ行ってしまったんですよ」

「機関区だって」

「ほら、三根夫さんをはじめに案内していつて見せたじゃありませんか。最地階に近く動力室や機関室があつたことを忘れま

か」

「ああ、あれか。どうしてみんなあそこへ集まるのかね」

「だってそうでしよう。わが星は、いま最大のスピードまであげて宇宙を飛ばなくてはならないのです。スピードがあがらなければ、いつさい生物も機構も、そしてすばらしいガン星の歴史もまったく失われてしまうのです」いつもはのんき者に見えていたハイロが、深刻な表情を見せる。

「あれだね、さつきちよつと聞いたけれど、本星はアドロ彗星に追っかけられているんだそうだね」

「それを知っておいででしたか。三根夫さん。わたしはここでお別れしますよ。おくれればせながら、わたしは配置へいそがねばなりません」ハイロはかけだそうとする。

「おっと、ハイ口君。ちよつと待つてくれたまえ。きみの配置はどこなの。あとでたずねていきたいから……」

「だめです。とてこられませんよ。たとえきても、地球人の肉体では、生きていることができない場所です」ハイ口はおそろしいことをいう。

「へえーッ。地球人は生きていられないというのかい。まるで地獄みたいなところなんだね。そういわれると、ますます聞きたくなる。いったいどこなんだい」

「もうお別れです。さようなら、三根夫さん。あなたはわたしをかわいがって、いろいろおもしろいものをくれました」

「お別れなんて、そんなことをいうと心細くなるよ」

「地球人の生命はもろい。わたしたちにはたえられる熱にも電気にも、光りにも空気密度にも、地球人の体質ではたえられない。お気の毒でなりません」ハイ口は、さつきから妙なことをいつている。

「なにをいつているんだい、ハイ口君。そんなことよりも配置はどこなんだか、はやく教えたまえ」

「原子熱四百万度管区第十三区です。では三根夫さん。あなたの幸福と平安を祈ります」

「あッ、待ちたまえ」と、三根夫は、ハイ口のほうへ腕をのばしたけれど、ハイ口はもうふりむこうともせず、いそいでかけだしていった。そうしてその姿は、地階の下深くつうずる『動く道路』

の乗り場をしめしている傘^{かさ}状^{じょう}の塔のなかへ消えた。ハイロが
いったように、これがかれと三根夫のさよならとなつたことは、
後になつてそれと思ひあたるのであつた。

無人^{むじん}の辻^{つじ}

ひとりぼっちになつた三根夫は、街をどんどんかけていった。
無人^{むじん}の境^{きょう}だつた。ただどの店も、いつものように明かるい照明
の下に美しく品物をかざっていた。ふしぎな光景だつた。

「テッド隊長や帆村のおじさんたちはどうしているだろう」

一刻もはやくロケット艇ていへかえりつきたいものと、三根夫はねがった。辻のところまでくるとテレビジョン塔が、まえに聴衆もいないのに、ひとりでアナウンスをし、むだと見えるニュース画面を映写幕のうえにうつしだしていた。三根夫は、そのまえにちよつと足をとめた。

「……われらの敵アドロ彗星は、ただいま八十万キロの後方に迫っています。画面に見える白熱はくねつの光りの塊かたまりがそれでありませう」とアナウンスの声に、三根夫は映写幕に目をうつした、なるほど漆黒しっこくの大宇宙がうつっているが、その左下のところに、ぎらぎらと白熱光をあげている気味のわるい光りの塊がうつっていた。

光りの尾をひいているらしく、それがときどき方向をかえるのだ
った。そのたびに凄^{せい}惨^{さん}の気がみなぎった。

「……もしもわれわれが、ただいま以上にスピードをあげること
ができないとすると、あと約二時間三十分で、我々はアドロ彗星
に追いつかれてしまう計算となります。ただし我々の機関区はい
まなおこれいじょうにスピードをあげるために努力していますか
ら、それに成功すれば、この時間のよゆうは、もつと延^のびるはず
であります。まだ非常配置につかない者は、全力をあげていそい
で配置についてください」アナウンスは、心細いことを伝えてい
る。三根夫はガン人のために深く同情した。

が、ガン人に同情するなら同時に、この怪星にとらわれて心る

テッド隊長以下の地球人たちへも同情をそそがなくてはならない。ガン人が悲しい恐ろしい運命に追いつめられているいじょう、テッド博士以下の地球人たちも、また同じ悲運に追いこまれているのだ。

いや、地球人の立場は、ガン人よりももっと悪いのだ。危険なのだ。それはハイロがちよつと口をすべらしていったが、地球とこのガン星とは、まったくおなじ気候や空気密度などではない。地球にいま棲息している人間や動物植物は、地球の気候風土にたえられるものばかりであつて、それにたえられないものはとちゆうで死滅^{しめつ}し枯死^{こし}してしまつたのだ。

ガン星の気候風土が地球のそれと完全におなじなら、地球人は

ガン星のうえでも、ガン人とおなじように健康をたもって生きていられる。だが、じじつそうでない。地球とガン星とは、気候風土がかなりにかよっているとはいうものの、じつはだいぶんちがつているのだ。ガン人の身体は、地球人よりも、ずっとはげしい温度変化にたえ、寒さにも暑さにも強い。

ガン人は地球人が呼吸困難を感じはじめるくらいの空気密度の五十分の一の大気中で、平気で生きつづける。そのほか、地球人の目には感じない光りが、ガン人には見えるし、音のこと、電気のこと、磁力のことなどについても、地球人とガン人とは感じかたがたいへん違っている。

はやくいうと、ガン人にくらべて、地球人はもろい生物だ。そ

してまた下級の生物だといわなくてはならない。このガン星において、テッド隊長やサミュエル博士以下の地球人が、ガン人のためにおにお圧されて、手も足もでないのはいまのべたことにもとづいてゐるのだ。「人間は万物のばんぶつ霊れい長ちようである」といばっていた人間も、ここではあわれな二流三流の生物でしかない。

三根夫のきちやく帰着

三根夫が無事にもどってきた。艇内に大きな喜びの声がどつと

あがる。

帆村莊六がとびだしてきて、三根夫少年の肩を抱きすくめた。

「よく帰ってきてくれた。みんな、どんなに心配していたことか。どこにもけがはなかったかい」

「けがはしなかったですよ。でも、もうおしまいだなと、あきらめたことがあった」

「そうだろう。そして隊長から命ぜられた仕事は、どうした」帆村は、その仕事三根夫にとってはあまり重すぎるものだったから、たぶんうまくいかなかったのであると思うていた。

「できるだけ、やってきたつもりです。ほら、ここにある」

と、三根夫は撮影録音機のはいつている四角い箱を帆村に手渡

した。

「ほう。それはすごいや。で、天蓋^{てんがい}まであがつてみたのかい」

「ハイロ君が生命がけで、そこへ案内してくれました」

「そうか、ハイロがね。かれは途中でミネ君を密告しやしないかと、それを心配していた」

「そんなことはありません。ハイロ君はできるだけのべんぎをはかつてくれました。しかしかれは焦熱^{しょうねつ}地獄^{じごく}のような配置へいつてしまつたんです」

「そうかね。……や、隊長がこられた。ミネ君。テッド隊長が迎えにきてくださつた」

そのとおりであつた。長身の博士が大股で三根夫のほうへ歩い

てきて、大きな手で握手をした。

「おめでとう。たいへんご苦労だった。われわれは、三根夫君のお仲間なんだということに大なるほこりを感じる」テッド隊長は、いくども手を握つてふった。

「隊長。天蓋も写真にうつしてきました。そばへいってみると、大したものですよ。丈夫で、だんりよく弾力があつて、厚いんです。あれにむかつていっても、小さな蠅はえが蜘蛛くもの巣すにひつかかるようなものです」

「そうでもあろう。だが、われわれは、何としても小さな蠅の力で、その丈夫で弾力のある蜘蛛の巣をつき破る方法を考えださなくちやならんだ」

そのとき三根夫は、ふと気がついて、

「隊長やみなさんは、このガン星に、いま非常事態が発生していることを知っていますのですか」

と隊長にたずねた。

「ああ、知っているとも。だから、いつそうきみの安否を心配していたんだ。この星が、いまアドロ彗星に追いかけられているというのだろうか」

「そうです。どうしてそれがわかりました」

「さつきから、とつぜん本艇の無電通信機が働きだして非常事態放送の電波を捕えたんだ。ふしぎなことだ。われわれが怪星ガンの捕虜になった頃から、無電機は、さっぱり働かなくなっていた

んだがね」

「ふしぎですね」

「いろいろふしぎなことがある。いままでは通信がいつさいできなかった僚艇とも電波で通信ができるようになった。そればかりではない。『宇宙の女王^{クイーン}』号の通信室とも通話ができるようになった」

「どうしたわけでしょうね」

「わけなんか、さっぱりわからん。とにかくわれわれは、この事態を利用しなくてはならない。きみが持つてかえってくれた資料によつて、われわれはなんとしても脱出の方法を考えださなくてはならないのだ。諸君。すぐ仕事をはじめよう。きたまえ」

テッド博士は、首脳部の連中を呼びあつめて司令室へいそいだ。そこでは、三根夫の撮影してきたトーキー映画の映写ができるように、幕が用意され、発声装置もつながれていた。一同が席につくとまもなく、帆村が反転現像したフィルムを持って、この部屋へはいつてきた。そのフィルムは、さつそく映写機にかけられた。そして三根夫が苦心して秘密撮影してきた怪星ガンの要所所が一同のまえにくりひろげられていったのである。

フィルムは、いくどもくりかえし映写された。そして首脳部の人々は、脱出方法について熱心な討論をつづけていった。だがその結論は、思わしくなかった。三根夫が撮影録音してきたフィルムによつて、天蓋の堅牢けんろうさが、想像していたいじょうにすごい

ものであることがわかったのだ。本艇が持っているありとあらゆる爆発力をあつめて、あの天蓋にぶつけても、天蓋はけっして壊れないであろうという絶望的な計算がでたのである。

みんなは、がっかりした。絶望的計算に全力をふるったポオ助教授は、もちろんがっかり組のひとりであったが、彼はとつぜん立ちあがると、絶望に血走ちばしった目をみんなのうえに走らせて、

「みなさん。わたしの計算はぜつたいにまちがっていない。しかし、物事がわたしの計算どおりに実現するかどうか、それはわからないのだ。運命というものがある。機会というものがある。そういうものは、わたしの計算の中には、はいつていないのですぞ」と叫んだ。

帆村莊六が、やけに手をぱちぱちたたいた。それに釣りこまれたか、他の人たちも手をたたき、それからみんな顔をかがやかして、大きな声で笑った。

テッド隊長が立つて、ポオ助教授とかたい握手をした。そして声を大きくして演説をした。

「おお、あなたは真の科学者である。あなたは我々を死の淵ふちからすくいだした。我々は最善をつくし、それから運命の命ずるところにしたがい、そしてもし絶好の機会がくればそれを必ずつかむことにしよう。前途に光こうみょう明は燃えているのだ。元気をだせ諸君」さて、このあとに何がくる。

出航用意

「出航用意！」テツド隊長は、思い切った命令をだした。出航するといつても、本艇は自由がきかないのである。また、目指していくべきあてもないのである。天蓋は、堅牢けんろうである。本艇を繫け留いりゆう塔とうにむすびつけている繫索けいさくは、ものすごく丈夫である。いったい出航用意をしてどうするといふのだ。テツド隊長は、気がちがったのではなからうか。

しかしテツド隊長は、気がちがっているのではなかった。かれ

は、じぶんだけで、一つの夢を持っていた。ぜつこうのチャンス
の夢であった。まんいちその夢がほんとうになるならば、そのと
きは本艇はいつでも出航できるように準備ができていなくてはな
らないのだ。

さもなければ、あたらせつこうのチャンスをとりにがしてしま
うであろう。が、その夢が現実になる公算は、ほんとに万に一つ
の機会であった。いや、万に一つどころか、億に一つかも知れな
い。常識で考えると、いまは本艇やその乗組員の運命は絶望の状
態にあるとしか思えないのであった。

それにもかかわらず、テッド隊長は、『出航用意』を命令した
のであった。

乗組員たちは、この命令にせつして、目を丸くしない者はなかった。そして、それにつづいてかれらはこうふんのいろをあらわし、いつもとはちがって、年齢が五つも若返ったように元気づいた。

「うれしいね、出航用意だとき」

「出航用意か。いつ聞いても、胸がおどるじやないか。さあ、いこう」

「出航用意だぞ、出航用意だぞ」

機関室は、火事場のようないそがしさだった。全員は、本当に出航する顔つきになって、小さいエンジン類からはじめて、だんだん大きなものを起動きどうしていった。

出航用意の命令は、本艇だけでなく、僚艇りようてい八隻せきにも伝達された。

僚艇でも、みんな目を丸くし、そしてこうふんになげこまれ、それからみんないそがしく活動をはじめた。脱出不可能なことは、誰も知っていたが、なつかしい『出航用意』の号令は、なおかれらを立ちあがらせる力を持っていた。テッド隊長は、考えぬいたすえに、『宇宙の女王クイーン』号のサミュエル博士に連絡をとることをめいじた。無電は、サミュエル博士ていを呼びだした。しかし、誰もでてこなかった。

無電係が、それを報告してきたので、テッド隊長は、隊員ふたりをえらんで、博士邸へ走らせることにした。ロナルドとスミス

とが、えらばれた。どっちも元気で、常識に富んだ隊員だった。ふたりは、この危険な使いに立つことをおそれもなく引きうけ、そしてとなりの家へゆくほどの気軽さでかけた。もちろんふたりは、携^{けいたい}帯無電機を背負って、ひつようなときに、すぐ本艇と連絡がとれるよう、用意をおこたらなかった。ふたりが出発したあとで、テッド隊長からこの話を聞いた帆村莊六は、

「あ、それなら、『宇宙の女王』号へ無電連絡をとってみてはどうでしょう」といった。

「あそこは、無電連絡がきかないのだ。そのことはきみも知っているはずだが……」

と、隊長はいった。そのとおり『宇宙の女王』号は、本艇より

もずっとときびしい取締りをガン人からうけていた。あとでわかったことだが、ガン人は、はじめ『宇宙の女王』号を手に入れると、たいへんめずらしがって、その構造の研究と、そして地球人類の能力の研究のために、『宇宙の女王』号のなかは、いつも大ぜいのガン人の学者たちでごったがえしていたのだ。そして乗組員たちは、艇から外へでることを許されず、もちろん他の地球人類とのゆききも許されず、げんじゆう 厳重に捕虜の状態におかれてあった。ただれいがいとして、サミュエル艇長だけは艇からおろされ、町に住まわせられていた。そのわけは、かれが艇にいと、ガン人の仕事やりにくいからであつた。つまり艇長は外へだしておいて、ガン人は艇内を完全に自由にいじりまわしたかったのである。艇

長がいなければ、艇の乗組員はどうしていいか、困るのであった。「いや。いまは無電連絡がつくようになっていいるかもしれないですよ」

と、帆村がいった。帆村は『宇宙の女王』号の事情をうすうすさっしていたので、いまはもうガン人たちが艇から退去しているであろうし、それであれば、無電連絡もかいふくしているのではないかと思つたのである。

「なるほど。無電連絡をこころみる値打ちはあるようだ」

テッド隊長は、ふたたび無電係を呼んで、こんどは『宇宙の女王』号を呼びだすように命じた。

ガスコの最期さいご

連絡は、すぐついた。そしてサミュエル艇長の声が、すぐとびだしてきたものだから、無電係はおどろいて、大あわてにあわてて、テッド隊長の部屋に通信線をつないだ。

「やあ、テッド君。どうしたい」サミュエル博士のほうから声をかけた。

「いやア」とテッド隊長は面くらって、しばらくは口がきけなかった。

「先生は、いつそこへ帰られたのですか」

「あのさわぎが起こると、すぐ帰ってきたよ」

「なるほど。よくお帰りになられましたね。ところで、これからどうなさいますか」

「電話では、ちよつとしゃべれないね。とにかく万全の用意をととのえていることだ。死地に落ちてもなげかず、じゅんぷう順風に乗つてもゆだんせずだ。ねえ、そうだろう」

「はあ」

テッド隊長は、サミュエル博士も、じぶんたちとおなじように、機会をねらっているのだとさつした。博士も、そのうちに、こんらんの中からすばらしい機会が顔をだすかもしれないと思ってい

るらしい。

「先生。お目にかかりたいですね。至急にお目にかかって、打合せをしたいと思いますが、いかがでしょう」

「けっこうだ。それでは、あと五分もたったら、わしはきみのところへゆこう」

「えっ。先生がきてくださるのですか。それはありがたいですが、そこをおはなれになってもいいのですか」

「まあ、心配なからう。それに『宇宙の女王』クイーン号は、きみたちのところからゆずってもらいたいものもあるのでねえ。とにかく会ってから話そう」

「じつは、こちらから隊員のロナルド君とスミスとが出発して、

そちらへ連絡にうかがったのですが、それがついたら、どうかい
つしよになつて、こつちへおでかけください。それなら、わたし
も安心しますから」テッド隊長は、老博士の身の上を案じて、そ
ういった。

「ありがとう。それならば、ふたりが到着するのを待っていまし
よう」

そこで無電は、いったん切られた。その電話のおわるのを待ち
かねていたように、僚艇りょうていからの報告がどンドン隊長へとどけ
られた。『出航用意』が、もはや完全にととのつたと知らせてき
たものもある。また、すくなくともこれから五時間しないと、用
意が完了しそうなないと、なげいてくる艇もあつた。隊長は、そ

のような僚艇へは、用意完了の艇から応援隊をおくるように手配した。

時刻はうつつた。待ちうけているサミユル博士は、まだ姿をあらわさない。どうしたのであるうか。すると、三根夫が、テレビジョンの映写幕をさして叫んだ。

「あツ隊長。担架たんかが二つ、こつちへきますよ」

「なに。担架が二つとは……」見ると担架が二つ、ゆらゆらと揺れて、艇の出入り口に近づく。担架には誰か寝ている。しかし担架をかついでいる者の姿は見えない。ただ、長いシャツのようなものをひきずって、首も手足もない奇妙な形をしたものが、担架をとりまいている。そしてもう一つ、べつの奇妙な形をしたもの

が、担架のまえに立って、歩いている。それは、他のものたちが
つて、冠かんむりみたいなものがうえに輝いていた。

「先に立って歩いているのは、ガンマ和尚おしろうみたいですね」三根
夫がいった。

「ガンマ和尚がね。いったいどうしたというのだろう」隊長はい
ぶかった。三根夫は、ガン人の姿がはつきり見えるようになる変
調眼鏡を取りにじぶんの部屋へ走った。かれが、変調眼鏡を手に
とつて、もとの艇司令室のほうへ引返そうとする出合い頭がしらに、れ
いの担架が入口をはいつてきた。

「どうしたんだ」

「なんだ、なんだ」と、隊員はあつまってきた。

「テッド博士にお会いしたい。ふたりの勇士を送り届けにきたのです。わしはガンマ和尚でござる」

冠の下から、特徴のある声がひびいた。三根夫はこのとき変調眼鏡を目にあてることができた。三根夫は、ガンマ和尚の顔を見ることができた。れいのおり、小熊で豚で人間のようなガン人であったが、ガンマ和尚は、額にしわがより、眉の間にもたてじわが三本も深くみぞをきざんでおり、そして垂れた鼻の両わきから、長い白ひげがさがっていた。このガンマ和尚こそ、怪星ガンの最高指揮者であった。

ガンマ和尚は『ふたりの勇士』を送り届けにきたという。ふたりの勇士とは、

「おや。ロナルドとスミスじゃないか。大けがをしているね。いったいどうしたんだ」

「おい、すっかりしろ、ロナルド。どうしたんだスミス」隊員たちは、びっくりして担架のまわりに寄った。が、そこで、目に見えないぐにやりとした壁みたいなものにつきあたり「ひやツ」と悲鳴をあげて、うしろへとびのいた。それはかれらが、目に見えないガン人たちの身体につきあたったからである。そのガン人たちは、担架をかついでいたのだ。

大宇宙の秘密

ガンマ和尚おしょうとテツド隊長の会見は、劇的な光景をていして、
隊員たちをいやがうえにこうふんさせた。

司令室の卓テーブルをなかに、両雄は、しばらくぶりに会ったあいさつ
をしたが、

「どうしたというのですか、わたしのぶたりの隊員たちの大げが
は……」

と、テツド隊長は、悲しげな顔になって、ガンマ和尚にたずね
た。

「わしが、両君に力を貸してくださいと、むりをお願いしたので

す。相手はガスコと称しているすこぶる悪い奴で、やはり地球人類なんですわい」

「ガスコ？」ガスコの名がでてきたので、隊長のそばに立っている帆村莊六も三根夫も、はつと顔をかたくした。三根夫はあのにくむべき悪党に、天蓋てんがいのところでは出会って、あとでふり切つて逃げたが、あのあと、まだ何か悪いことをしていたのであろうか。

「そうです。ガスコです。あいつは、アドロ彗星のまわし者です。あいつは、立入り禁止の天蓋の所へでて、もう十何日間もアドロ彗星と連絡していたのです。アドロ彗星って、ごぞんじでしような、テッド博士」

「よく知りませんが、今、我々のほうへ向かってくる宇宙の賊ぞくの

ことですか」

「宇宙の賊！　ふうん、それはいい名称だ。あの悪魔星にはうってうけの名称だ。宇宙の賊ですよ、まったく」

「で、ロナルドとミスは、どうしたのですか」

「さあ、そのことです。われわれが、ガスコを取りおさえようとしたが、なかなか手におえない。こまっていたところへ、両君が通りかかったものだから、両君にちからを貸してくれるようたのんだのです。地球人類をおさえるのには、やはり地球人類にたのむのが一等いいのです。そのけっかわしたちの希望どおり、ガスコは、取りおさえられました。もうあいつは、アドロ彗星へ連絡することはできなくなりました。だが、お気の毒に両君とも、だ

いづけがをしました。われわれは地球人類の傷の手当をするのにじゅうぶんの自信はないのです。ゆえに、両君をいそいそでお連れしたわけです。はやく手当をしてあげてください。それから、われわれは両勇士およびあなたがたに、大きな感謝をささげるものです」ガンマ和尚は、ロナルドとスミスの働きについてそう語った。

両人は、すでに別室で医局員の手で手当がくわえられつつある。ガスコが死にもぐるいで刃物をふりまわしたので、両人は身体にたくさんきの斬り傷きずをうけていた。しかしさいわいに急所ははずれている。両人は、ガンマ和尚に協力することよりも、すこしもはやくサミユル博士のところへ行って、連絡任務をはたしたかつ

たのだ。しかし、ガンマ和尚たちの命令をきかないわけにいか
なかった。そこでガスコと決闘したのである。こんな傷を負い、連
絡にいけなくなつて申しわけないと、両人は、手当をうけながら
わびた。ガンマ和尚は、二勇士についての報告と感謝をすませた
あとで、あらたまつた態度でテッド隊長に相談をもちかけた。

「わがガンマ星が非常なる危機に立っていることは、もうござん
じのとおりです」和尚はガンマ星という名称を使った。

「たぶんこんどはアドロ彗星の攻撃から抜けだすことはできない
でしょう。しかしわれわれは、最後まで宇宙の賊とたたかう決心
です。アドロ彗星には正義感というものがすこしもないのです。
強大にはちがいないが、ゆるしておけない巨人です」

「アドロ彗星というのは、天然の彗星なんですか。それともこの怪星ガン——いや、失礼しました、ガンマ星のごとく、人工的に建造された星せいたい体たいなのですか」

「やはり人工的の星です。いまこの近くの宇宙において、人工的自動星がすくなくとも四、五万はとんでいるようです。アドロ彗星は、その中の一番巨大なやつで、銀河の暗黒星雲あんこくせいうんあたりからでてきたすごいやつです」

「ははあ、なるほど」テッド隊長は思わずため息をつく。

「そこでテッド博士。おり入ってお願いしたいことがあります。

それはあなたがた地球人類にお願いして、われわれがこれまで盛りあげてきたガンマ星文化というものを、できるだけたくさん、

ここから持って行っていただきたいのです。わしは、それがやがて地球上において、地球人類の手で研究される資料となることをのぞむものです」

「おどろいたご相談です。お引受けする気持はありますが、どうしたらいいか……」

「われわれは大宇宙の研究に乗りだして、もう五百年いじょう経っているのです。さいきん地球と地球人類に興味を持ちまして、このまえは『宇宙の女王クイーン』号をとらえたのです。まことに失礼なことをしたわけだが、あれはわしとして、どうしても手に入れたかったので、捕獲ほかくしたわけです。そして非常によるこんだ。そこへあなたがたがきたものだから、ますます喜んで、中へはいっ

ていただいたのです。が、失礼はおゆるしく下さい。一方的なやりかたで、すみませんでした。が、わしとしては、もうすこしさきになつたら、ここであなた方ときもちよく共同研究をする夢をいだいていたのです。だが、いまになって、そんな申しわけをしても何のやくにも立ちません。さあ、お願いしたことを引受けてください。わしは、部下たちにいいつけて、いままでの文化記録を大至急、あなたのところへはこびこませることにします。どうぞ、よろしく。もう時間もないのです」和尚は席から立ちあがった。

「待つてください、ガンマ和尚。あなたは、われわれが、ふたたび地球へもどれるものと思つていられるようだが、われわれはそ

んなことができようとは、考えられないのですがね」

「いや、機会はかならずきます。あなたがたは優秀な人たちです。あなたがたが、機会をつかまえそこなうということはないと信じます」そういったときガンマ和尚は、電気にうたれたように身体をびくつとふるわせた。かれは席をはなれた。

「わしはじぶんの部署へもどらねばなりません。では諸君の幸運と冷静と勇氣とを祈りますぞ」

ガンマ和尚とその部下は、風のように、部屋から走り去った。

大団円

その直後、事態はきゆうに重大となった。アドロ星の撃ちだす破裂弾はれつだんの射程しやていが、いまやガンマ星にとどくようになったらしく、しきりに空気は震動し、本艇はゆさゆさと揺れだした。また、ときおりどこからさしこんでくるのか、目もくらむほどの閃光せんこうが頭上で光ることがあった。

テッド隊長はいそがしかった。繫留索けいりゆうは、はじめはとても本艇からはなすことができないほど強いもので、それをたち切ることをだんねんしていたが、テッド隊長はガンマ和尚がいったことばに希望を持ち、隊員をなおも繫留索のところへいかせて、そ

れをたち切る作業をつづけさせた。

「サミュエル先生は、どうされたろう」

テッド隊長はもう一つ気にかかっていたことを口にした。こつちから連絡にだしたロナルドとスミスが、途中でああいうことになつたため、サミュエル博士は待ちぼけをしているであろう。そこで無電をかけてみると、博士はついに待ちあぐねて、部下十名とともに、こつちへでかけたという。博士は、まもなく姿を見せた。息せききつて、テッド隊長のところへとびこんできた。

「燃料がないのだ。すこしもないのだ。きみのところもじゆうぶんでないだろうが、できるだけわけてくれたまえ。わたしは、乗組員たちを見殺しにすることができない」

放射能物質であるその燃料は、本艇でもじゆうぶんな貯蔵がなかつた。それは怪星ガンに捕獲される前後に、ひどく使いすぎてしまったからだ。といって、テッド隊は『宇宙の女王クイーン』号を救いにきたのであるから、サミユル博士のたのみに応じないわけにいかなかった。

テッド博士は、英断をくださった。

「よろしい。先生のところへ、わが貯蔵量のはんぶんをさしあげましょう。しかし大急行で、ここからはこびだすのでないと、まにあわないかもしれませんよ」

そのとおりであつた。あたりの空気をやぶつて、爆発音がしだいに間隔かんかくをちぢめて、どかーんとどんと、気味のわるい音をひ

びかせ、艇は波にもまれているようにゆれた。

「ありがとう、テッド君。わたしは感謝のことばを知らない。わたしは、わが乗組員にたいして」

「いや、先生。お礼をおっしゃるよりも、一分間でもはやく燃料をはこぶことですよ。わたしのところからも運搬作業に十名をお貸ししましょう」

「なにから何まで。……しかし、じつは脱出に成功する自信はほとんどないのだがねえ」

サミュエル博士は顔を曇くもらせた。

「運と努力ですよ、先生。われわれは天使のようにむじやきに、そして悪魔のごとく敏びんしょう捷しょうでなくてはならないのです。うたが

いや不安や涙はいまは必要でないのです」

「そうだったね。わたしはきようはことごとくきみから教えられた。師と弟子の立場はぎやくになったよ」

それからテッド隊長は、『宇宙の女王』号への放射能燃料の運搬を指図した。艇からえらばれた十名の運搬者のなかに、帆村荘六と三根夫のまじっていたことをしるしておく。この両者は志願して、その運搬員にくわわったわけである。作業は、はじまった。テッド隊長の胸は、いまにもはりさけんばかりに痛んだ。師サミユル博士に報ほうおん恩し、『宇宙の女王』号の乗組員たちに希望を持たせることにはなつたが、しかしこの燃料運搬がおわるまでに、はたしてこのガンマ星がいままでどおり安全な状態をたもつてい

るかどうか、それはたいへん疑わしいことであつたからだ。

運搬作業のとちゆうで最悪の事態が起つたとしたらどうだろう。運搬に従事している二十名の同僚を失わなくてはならないのだ。そのなかには、愛すべき尊敬すべき十名の本艇員がいるのだ。三根夫少年もいる。帆村莊六もいる。——神よ、作業がおわるまで、かれらの身の上をまもりたまえ。サミュエル博士は、驚いたことに、二十名の運搬員といつしよに、やはり燃料運搬にしたがつていた。博士の気持はよくわかる。燃料運搬作業は、その三分の一のところまで中止するのやむなき事態にいたつた。

それはアドロ彗星の砲撃がますますはげしくなり、ガンマ星の天蓋てんがいをぼんぼんと破壊しはじめたからであつた。運搬員の頭上

からは、破壊された天蓋や架橋かきょうの破片が火山弾かざんだんのようにばらばらと落ちてきて、危険このうえないことになった。

サミュエル博士は長ちやうたいそく大息するとともに、そのあとのことを遂つひにあきらめた。

「運搬はやめる。隊員はそれぞれの艇へいそいで引揚げなさい」
「先生、いま運搬をやめては、『宇宙の女王』号はよていした燃料の三分の一くらいしか持つていないことになり、長い航空にはたえませんですよ。もつとがんばりましょう」

「ぼくも、やりますよ。まだ、大丈夫、やれますよ」

と帆村と三根夫とは、左右からサミュエル博士を激げき励れいした。

「そういつてくれるのはありがたい。が、わたしはいまやじぶん

の運命にしたがうのです。運搬作業は、とりやめにします。あなたがた、はやくテッド君のところへ引揚げてください。そしてテッド君に、わたしが心から大きな感謝をささげていたと伝えてください」

博士の決意は、もうびくともゆるがなかった。そこで帆村たちも博士のことばにしたがつて、本艇へ引揚げていった。これがあなたがたの顔の見おさめだろうと両艇員は別れ去るのがとてもつらかった。

なにごとくも運命であつたろう。帆村たち十名が本艇へたどりついで、テッド隊長に報告をはじめ、それがまだおわらないうちに、とつぜん千載せんざい一遇いちぐうの機会がやってきた。

猛烈な砲撃が天蓋にくわえられたけっか、ぽっかり穴があいたのである。暗黒な空が見えた。

「今だッ」

出航！ テツド隊長は、出航命令をくださった。操縦員たちは極度に緊張した。

艇の繫けいさく索はたたれた。そして針路は、吹きとばされた天蓋のあとへ向けられた。

大危険である。砲撃はつづいているのだ。すこし間かんかく隔はおいであるが、猛烈に撃ってくる。天蓋や構築物の破片や、砲弾そのものまでが頭上からばらばら落ちてくる。もしその一つが本艇の要所にあたれば、本艇は即時に飛ぶ力をうしなって、あわれな巨

大な墓場と化さなくてはならない。

しかしそれをおそれていられないのだ。脱出はいまをおいてほかにないのだ。

全速前進！ 僚艇に注意！ テツド隊長以下の艇員は、ものすごい初速と加速度にたいして、歯をくいしばってたえていた。気が遠くなる。頭が割れるようだ。脱出に成功した。

脱出したというよりも、空間にほうりだされたといったほうが、その感じがでる。なにしろ一瞬のできごとだった。そしてそのあと、艇員たちは数十分間にわたって失心していた。やっと、ぼつぼつ気がついた者がでてきて、それから同僚を介抱かいほうした。しばらくは、何がどうなっているのやら、さっぱりわからなかった。

やがて、思いがけない快報がもたらされた。それはほかでもない。今、本艇がただよっている位置から二百万キロばかりのところになつかしい地球の姿が見えるというのであった。艇員は喜びに気が変になりそうになった。

「もうひととびで、地球へもどれるんだ」ああ、意外にも、ガンマ星から脱出したところは、地球に間近いところであつたのだ。燃料の心配も、いまはもうなかつた。

艇員は、気がついて、ガンマ星とアドロ^{すいせい}彗星の姿を天空にもとめた。ところが、ふしぎなことに、それらしいものは何にも見えなかつた。どうしたのであろうか。テッド隊の宇宙艇九隻のうち、七隻はぶじに地球へ着陸した。他の二隻は、おいしいことに脱

出に失敗したらしい。

サミュエル博士の『宇宙の女王』号もぶじアメリカに着陸した。博士をはじめ乗組員はすくない燃料にあきらめの心を持っていたが、脱出してみると、地球は意外の近くにあったため、帰着するまでにそれだけの燃料でじゅうぶんありあまったのである。テツド隊は、ついに救助の任務をはたして、全世界から隊員全部が大賞讃をうけた。三根夫少年は、なかでも大人気で、新聞社や放送局からひっぱりだこのありさまだった。かれはいつも少年らしいむじやきな話ぶりをもって、怪星ガン——じつはガンマ星のことや、ふしぎなガン人種のことについて、全国の少年少女たちに物語るのであった。

ただざんねんなのは、ガンマ和尚おしょうが、あれほど熱心に希望したガン星文化の資料が、本艇へとどけられないうちに、本艇はガン星からとびだしてしまったことだ。テッド博士はざんねんがつている。そしておなじ志こころざしのポオ助教授と帆村莊六むらたむねむすしとが、いまは博士の下で、『ガン星およびガン人の研究』という論文をつくつているといふ話だ。最後に、地球から見たガン星の最後について、一言のべておこう。天文台てんもんだいは急速にちかづく彗星を発見して、ただちに全世界の天文台へ通報した。

この彗星の速度は、じゆうらいの彗星よりもはなはだ速く、そしてその翌日には、あつというまに、地球と火星の間を抜けて飛び去った。それは深夜のことだったが、通過のさいは、約三時間

にわたり、まるで白昼はくちゆうのように明かるかったという。そして

その彗星は、ひとつのものと恐れ、テッド隊員がしきりに知りたがっているようなガン星の姿はぜんぜんみとめられなかつたという。それから考えると、おそらくもうそのときまでに、ガン星はアドロ彗星の腹ふくちゆう中へおさまっていたのであろう。ガンマ和尚やハイロ君の運命については、もちろんなにも知られていない。

宇宙は広大であり、古今は長い。そして地球人類の科学知識はあまりにもうすく、そしてせまい。われらは、自然科学について知ること、あたかも盲人が巨象の片脚の爪にさわったよりも知ることがすくないのだ。われわれは、いそいで勉強しなくてはならぬ。それは地球人類のゆるぎなき幸福のために、ぜひひつような

のである。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第13巻 少年探偵長」三一書房

1992（平成4）年2月29日第1版第1刷発行

初出：「冒険少年」

1948（昭和23）年1月～1949（昭和24）年3月

※「ミネ君」、「三根クン」の表記は、底本において統一されていない。本ファイルも、底本のままとした。

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2001年7月21日公開

2006年7月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

怪星ガン

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>